
A.O.G -Agent Of God- ~ 真剣で代行者に恋しなさい！ ~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G - Agent Of God - 真剣で代行者に恋しなさい！

【Nコード】

N9214Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

初めましての方は初めまして、知っている方はどうも反省猫です。色々思う事もあり、新たに書き直し+新しい話を書き足し、題名も少し変えました。という事で新しくなったA・O・Gをよろしくおねがいします。

この作品は真剣で私に恋しなさい！の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方にはおすすめできません。

それでもいよいようんがは 暇つぶしやんや

第1話 『神の代行者へエージェント』 (前書き)

この作品は真剣で私に恋しなさい!の二次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方には
おすすめできません。

それでもいいよという方は、暇つぶしにどうぞ！

第1話 『神の代行者へエージェント』

なんでこうなった……

俺は今何もない真っ白な空間にいる。

そして目の前には俺と同じくらいの金色の長い髪に青い瞳の美しい女性がこちらに微笑んでいる。

さかのぼる事30分前……

（回想）

俺の名前は、てんじょう天錠 あきら暁

アニメとかゲームなどを愛するいわゆるオタクと言われる大学生だ。

前々からほしかったゲームを買って意気揚々と自宅に帰る途中、

少年達が集まって何かをやっていた。

俺は、少年達が集まっている隙間から覗くと少年達の中央に

服を着たうさぎのような変な生き物が少年達に虐められていた。

暁

「なんだ？ あの子は？」

俺は不思議に思いながらもなぜか見過ごせない感じがして、

少年達にちょうど持っていたカードゲームのレアカード数枚を

少年達に渡し、その不思議な生き物を助けた。

良く見ると左前脚を怪我していたので、とりあえず

家に連れて帰り、怪我の手当てをした。

すると驚くべき事が起きた。

??

「いやあ、助かりました。貴方は私の命の恩人です」

その助けたウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

暁

「うお！　しゃ、しゃべった！」

俺は、突然の事で思わず腰を抜かした。

??

「あ、申し遅れました！　私、わたくし神の従者いみなをしております稲葉と申します」

そう言つて稲葉と名乗ったウサギもどきが丁寧にお辞儀をした。

俺もすぐに姿勢を正し

暁

「あ、これはご丁寧に、俺の名前は、天錠 暁です。よろしく」

そう言ってお辞儀を返した。

今、神の従者とか言ったか？ 暁は目の前の自称神の従者の稲葉をじいーと見ている。

稲葉

「それにしても、貴方は最近では珍しい奇特な方ですね。

大抵の人はそのまま素通りか、見ても見ぬ振りをしていましたのに」

暁

「いや、俺はただ見過ごせなかっただけですよ」

暁は謙遜したが、本当は彼の過去にその理由があった。

彼は大切な人を目の前で亡くしたのだ。

稲葉

「御謙遜を。あなたは私を助け手当てまでしてくだされました。本当に感謝いたします」

そう言ってお辞儀を下げた。

暁

「いや、当たり前的事ですから、頭を上げてください」

そついうと稲葉はじいーっと品定めする様に暁を見ている。

暁
「な、何か？」

暁はその行為にたじろいだ。

稲葉

「ふむ、あなたならわが主に会わせてもいいかもしれません」

今、神と言ったか？ 神…… 神……

暁

「えええええ！！！！ マジですか？」

稲葉

「ふふふう、はい！ では行きますよ」

暁

「い、行ってくて、どこに？」

稲葉

「いわゆる天界というところですよ、では――」

暁

「ちょ、ちょっと！！ まだ心の準備が……！！」

稲葉

「いえ、善は急げと申しますから」

暁

「いやいやいや――」

稲葉

「ええい、往生際の悪い！ 行きます！」

暁

「うわぁー!!」

稲葉に右肩をタッチされた瞬間、1人と1匹はどこかへ転移した。

.....

.....

暁

「うん... ここは... どこだ？」

俺はどうやら気絶していたらしく、目が覚める真っ白い何も無い空間に横たわっていた。

??

「目は覚まされましたか？」

突然誰かからそう訊ねられ、俺はビクツとなり、声のした方向に目を向けた。

ちょうど自分の前方に一人の美しい女性が立っていた。

その傍らに稲葉も立っている。

暁

「貴方がもしや……」

??

「はい、申し遅れました第1級多世界管理者ルカ＝ツヴァイト＝ル
ミナスと申します。

いわゆる貴方達の世界の言葉で言うのならは【神】です」

そう言って微笑んだ。

……っと言った感じで回想終了。

暁

「貴方が神で名前がルカ＝ツヴァ……」

ルカ

「あ、ルカでいいですよ。 名前結構長いですし……」

暁

「じゃ、ルカさん。俺の名前は……」

ルカ

「天錠 暁さんですよ？ （ニコッ）知ってますよ」

暁

「（赤面）／／／」

暁は、女性の免疫がない事はないが、どちらかと言えば苦手だ。

ルカ

「稲葉を助けて頂きありがとうございました」

そう言つて暁に頭を下げた。

暁

「あ、当たり前的事をただけですよ。お氣になさらず（赤面）／／」

ルカは、じいーと上目使いで暁を見た。

暁

「う…… な、何でしょう？」

ルカ

「うふ、合格！」

暁

「……へ？」

暁は間抜けな声を上げた。

ルカ

「暁さん、単刀直入に申します。私の代わりに他のセカイを廻っていただけませんか？」

暁

「はあ？ セカイを廻るう？」

ルカ

「そのままの意味です。本来なら私が行かなければならないのですが、

今ここを離れるわけには行かないので、代わりに行ってくれる人を探していたんですよ」

そう言つて、ニツコリ微笑む。

暁

「で、でも、俺、何の能力もない普通のしがない大学生ですよ？」

ルカ

「それなら心配しなくても大丈夫ですよ。私が貴方に必要な能力を与えますよ」

それを聞いて暁は一瞬考えた。

能力がもらえる？

暁

「……その能力というのは、人を救えますか？」

その問いに一瞬キョトンとなったルカはすぐ笑みを浮かべ、

ルカ

「はい、救えますよ」

暁は過去の出来事を思い出していた。

暁は、大規模なテロで両親を失った。

その時思った俺にもつと力があれば大切な人を助けられたかもしれないと

暁は、真剣な表情になり、

暁

「そのお話お受けします」

ルカ

「それでは今から貴方は、私の代行者です」
エージェント

そして暁は神の代行者エージェントになった。

それからルカにこの依頼の詳しい内容を聞いた。

簡単に言うところだ。

俺は、他のセカイをただ廻るのではなく、

そのセカイで発生したイレギュラーを取り除く事。

そして、壊れた部分があれば修正する事。

この2つが大きな目的だ。

次にそのセカイで俺には役が与えられる。

その役をやりながらセカイでの任務を遂行する事になるのだ。

またその役の許容範囲なら何をしててもかまわないらしい。

ただし、人を殺すなどの事は禁止だ。

ちなみにそのセカイで協力者をいくら増やしてもOKらしい。

それを理解した上で頷いた。

ルカ

「次に貴方に授ける能力ですが、なんか希望がありますか？」

暁

「そうだな。身体能力上昇にして修業とかすればそのまま反映されて強くなるかな。となる成長率限界突破。

それと初期の能力は、これから行くセカイの最強と同質な感じで後は、ありとあらゆる知識と技術」

ルカ

「ふむふむ、他には？」

暁

「毒とかの状態変化無効でそれと不死にしてもらえますか？」

後は、戦闘能力向上。魔力と氣両方無限状態で

そしてこれが一番の願いです。

アニメやゲームなどの必殺技や魔法とか使えるようにして下さい！」

ルカ

「ふむふむ、それじゃ希望したものと私からのプレゼントで創造の力と貴方の魅力を最大値にそれとこれはおまけです」

そういつてルカは目を瞑り、何やら呟いている。

ルカ
「我^{わが}…… 力…… かの者に…… 与えん!!」

ルカがそう言った瞬間、暁の全身が光り輝く

暁

「ッ……!!」

暁は、光が収まるまで目を瞑った。

そして光が収まるとルカが口を開いた。

ルカ

「ふう、今ので能力を付加しました。その証に」

そう言つとルカが指を鳴らすと暁の目の前に大きな姿見が出現した。

暁

「証? これって!?!」

暁は驚いた。顔は元々F。?のセ。イロス似のイケメンだったので
変わってないが、

髪と瞳の色が変化していた。

髪は金髪、瞳の色は赤になっていた。

ルカ

「ふふ、それが代行者の証です」

ルカは微笑みながらそう言った。

暁

「これが代行者の証……」

暁がそうつぶやくと

ルカ

「では、早速ですがあるセカイに言っただきます」

その言葉に暁は、ルカに視線を向ける。

暁

「どのセカイにいくんですか？」

ルカ

「あなたに行ってもらうセカイは、【真剣で私に恋しなさい！】と似たセカイです」

暁

「へ？ まじこいに似たセカイって？」

ルカ

「はい、どうやらそのセカイに、イレギュラーが発生しているようです」

暁

「ふむ、わかりました。行きます！」

暁は気合いの入った声でそう言った。

ルカ

「ふふふ、ではゲート開きます」

ルカは、また目を瞑り何か呪文を唱えた。すると

暁の目の前に魔法陣が出現する。

暁

「これがゲート……では、行ってきます」

ルカ

「はい、いつてらっしゃい」

ルカが笑顔で送り出してくれた。

暁は、ゲートの中に入りそして消えていった。

暁が行った後、

稲葉

「彼、連れてきた私が言うのもなんですが大丈夫ですかね」

その言葉にルカは笑みを浮かべ、

ルカ

「きつと大丈夫よ。だって彼は……」

その言葉に稲葉は驚くのだった。

b e c o n t i n u e d

t
o

第1話 『神の代行者へエージェント』(後書き)

暁「おい、駄作者……」

作者「な、なんでしょう?」

暁「いきなり全部書き直すな〜!!」

作者「ご、ごめんなさい(TOT)」

暁「泣いてすむと思ってるのか、ああん(怒)

いままで読んで下さった方々に申し訳たたねえだろうが!」

作者「おっしゃる通りです>(――)<――」

ルカ「まあまあ、暁さんそこまでにしなさいな。

きつと何か理由があるんでしょう〜」

作者「ルカさん(涙)」

ルカ「キモいから近づかないでもらえます(笑顔)」

作者「ひ、ひどい」

暁「理由ね〜、何あるのか?」

作者「ありますよ〜色々と」

ルカ「色々とは?」

作者「まず、このP r o l o g u eだけど

セカイを廻る理由が詳しく書いてなかったり、
他にもルカの性格とかね。

自分で書いてて違和感がw」

ルカ「それで私の性格と言葉使いが前と変わっているのですか」

暁「そういえば、そうだよな」

作者「それ以外にもいろいろあるので、修正するより

一から書き直したほうが早いと思ったので、

今回のような事になったのですよ」

暁・ルカ「なるほど」

作者「それとP r o l o g u eでまだ付け加えたい話もあるのも理由です」

暁・ルカ「ふむ、話は分かった。とりあえずまずは

読んでいただいた人達に謝罪をしなさい」

作者「はい……、今まで読んでくださいました方々

申し訳ありませんでした。A O Gは前よりももっといい
作品になるようにこれからも精進させていただきます」

作者「残りの話に着いても明日の夜もしくは明後日までには
書き上げたいと思います」

作者「これからも新しくなるA O Gをよろしく願います」

作者「では、次回 Prologue 第2話 【新しい家族】で

お会いしましょう！」

暁・ルカ「では次回までさようなら」

第2話 『新しい家族』（前書き）

神の代行者となった天錠 暁は、ゲートを通りまじこいのセカイへとやってきたが……

第2話 『新しい家族』

暁

「（ルカさん、一つ聞いていいか？）」「

暁は念話である質問をする。

ルカ

「（はい、なんでしょう？）」「

暁

「（なんで……！ 俺、子供になつてるのぉ！）」「

そうなのである。

暁の姿はなぜか子供になっていた。

ルカ

「（それはですね、このセカイの役のせいです）」「

暁

「（このセカイでの役？ そういえばなんか説明でいったな）」「

ルカ

「（ええ、今回のこのセカイでの貴方の役は、風間ファミリーの
員及び先導者です）」「

暁

「（風間ファミリーの一員はわかるが、先導者とは？）」「

暁は、理解不能といった表情でルカに聞く

ルカ

「（風間ファミリーのみならず、その周りの人々も色々問題あるでしょう？）」

そう言われて、暁はゲームの内容を知っていた為か思い当たる点が多々あった。

暁

「（ふむふむ、それで？）」

ルカ

「（あなたには、彼らをいい方向に導いていただきます）」

暁

「（なっ！！）」

暁は絶句した。

オイオイ、まじかよ。

暁

「（俺がそんなこととしていいのか？）」

ルカ

「（ええ、お願いします）」

それを聞いて「はあ」とため息をついた。

暁

「（かなり問題が山積みだが……やりがいがありそうだ！）」

暁は、口の端を上にあげ笑った。

ルカは、その答えを聞いて喜んでいいる感じだった。

暁はふとある事に気付いた。

暁

「（そういえば、俺はどこに住むんだ？）」

ルカ

「（それでしたら……）」

ルカから家の住所を聞き、最後に意味深な言葉を聞いた。

ルカ

「（ちなみにご自宅のほうにサプライズなプレゼント用意していますので……）」

暁

「（プレゼント？）」

ルカ

「（はい！　きっと気に入ってくれると思いますよ）」

そう言ってルカの念話が途絶えた。

暁は早速聞いた住所を頼りに今から住む我が家へと向かった。

暁

「聞いた住所だとこの辺だが……あつた！」

そこは、1人に住むには大きい西洋建築の屋敷だった。

暁

「間違つてないよな？」

屋敷をじいーと見ていると

玄関から一人のメイドがやってきた。

??

「暁様、お帰りなさいませ」

暁

「えーと、あなたは？」

??

「本日より暁様にお仕えさせていただきます【さえは冴場 りょうか涼香】と申します」

暁

「え？」

メイドさんが俺に仕える？

マジですか？

暁がポカーンとしていると

涼香

「旦那様と奥様がお待ちです。どうぞこちらへ」

暁

「あ、はい」

涼香と名乗るメイドさんに案内され、

屋敷の中に入り、大広間の扉の前に着いた。

涼香さんは扉を開け、俺達は部屋の中に入る。

部屋の中に入った暁は自分の目の前にいる人物達に目を疑った。

暁

「父……さん…… 母……さん……」

そこには死んだはずの父親の天錠 総一と母親の天錠 結華が立っていたのだ。

総一

「暁、久しぶりだな」

父、総一はそう言い、

結華

「暁、元気だった？」

母、結華は微笑みながらそう言った。

暁は、わけが分からなかった。

二人はあのととき死んだはずだ。

暁

「な……ん……で……」

総一

「冴場君、席をはずしてくれないか？」

涼香

「はい、かしこまりました」

そついつて総一達に一礼し、涼香さんは部屋から出て行った。

それを確認して総一が口を開いた。

総一

「神様が、私達をこの世界に記憶のあるまま転生させてくれたんだ」

暁

「なっ！ 神様ってルカさんの事？」

その問いに二人は黙って頷いた。

暁

「い、一体どういう事？」

暁は混乱していた。

まったく意味が分からないと言った表情でそう言った。

総一

「それはなく、父さんと母さんが神の代行者とそのパートナーだからだ」

暁

「な、何イイイイイ!!!!!!」

部屋中に暁の驚く声が響いた。

ルカ

「……それは、私が説明しましょう」

突然、ルカの立体映像がそこに現れた。

暁

「ル、ルカさん!?!」

ルカ

「暁さん、先程はどうも（ニコッ）」

いつもの笑顔でルカは言った。

そしてルカの表情は真剣な表情に変わり、

ルカ

「まず事の始まりは、あの大規模なテロです」

暁

「！」

ルカ

「実はあれはテロではありません」

暁

「テロじゃないって……」

暁は動揺を隠せなかった。

ルカ

「あれは、【敵】の仕業です」

暁

「【敵】？」

ルカ

「はい、私と対極の位置にいる者、名を【ネガ・マリス】」

暁

「ネガ・マリス……」

暁が敵の名を呟くと総一が、

総一

「ルカ、そこからは私が話そう」

暁

「父さん……」

暁は、父のほうに顔を向けた。

総一

「ネガ・マリスは、恨み・悪意などの人間の負の感情が集まった集合体が、神格化したものだ」

暁

「なっ！」

総一

「俺達は奴と戦い、奴を倒した。……そのはずだった！」

総一は、険しい表情になり、手を強く握った。

暁

「そのはずって…… 生きていたの？」

総一

「ああ」

総一

「そして、奴は関係ない人達を巻き込み、あの事件が起きた……」

暁

「……」

暁はあの時の事を思い出し、顔を下に向けた。

総一

「実はあのとき、お前も死んでいたんだ……」

暁

「ッ……！　なんだって……」

暁は驚きを隠せなかった。

俺はあの時死んでいた？

では、なぜ俺は生きてるんだ？

暁が考えていると

総一

「私達は、自分達の命を使い、巻き込まれた人達とお前を助けたんだ」

暁

「……」

じゃ、何かあ、

両親が死んだのは俺とその人達を助けたせいという事か？

暁は、呆然とした。

総一

「今、お前、自分のせいと思ったんじゃないだろうな」

総一は怒ったような顔でそう言った。

暁

「で、でも事実なんだろう？」

すると結華は近寄り、暁を抱擁し、頭を優しく撫でた。

結華

「貴方が気に病む事はないのよ。私達はあなたに生きてほしかったから……」

暁

「で、でも！」

暁がその続きを言おうとしたが、結華がその続きを言わせない。

結華

「暁、親というものはね、子供の為なら命を賭けて護るものなのよ」

暁

「母さん……」

母親は、小さい子供をあやす様に優しく頭を撫で続けた。

暁は、母親に撫でるのを止めてと手を出し、

真剣な表情で

暁

「話は分かったよ。俺がそのネガ・マリスを倒せばいいのか？」

ルカ

「いえ、今奴を倒す事は出来ないわ」

暁

「なぜ！」

暁は、声を荒げる。

総一

「奴は、負の集合体だ、人の負の感情が無くならない限り倒す事は不可能だ」

暁

「じゃ、何か父さん！ このまま指をくわえて見てろっていうのか！」

暁は、総一に詰め寄る。

総一

「そう熱くなるな、暁 絶対倒す方法はあるはずだ。今は、イレギュラーとバグの対応を優先するんだ」

それも聞いて、暁は納得してなかったものの

暁

「わかった……」

悔しい表情でそう答えた。

それから親子3人は、今までの事を話した。

暁

「そうか、父さん達はもう力があんまりないんだね」

父達は、あの事件で大半の力を使ってしまい、今では、

川神鉄心に劣るものの釈迦堂クラスの力は持っていた。

総一

「といっても弱くはないぞ」

結華

「ふふ、そうね」

暁

「じゃ、俺が何とかするしかないのか」

ルカ

「そうですね、このセカイでは暁さんが頼りです」

暁

「ん？　なんか気になる言葉を聞いたような……　このセカイではとは？」

ルカ

「ああ、それなんです、貴方のほかに神の代行者があと7人います」

暁

「……はい？ 俺入れて8人いるの？」

暁は軽く驚いている。

ルカ

「ふふ、はい」

微笑みながらそう答えた。

暁

「俺…… 正直いらなくない？」

ルカ

「いえ、他の方々も他のセカイで手いっぱいでしたので、それに暁さんの場合、代行者最強の総一さん達の力を
受け継いでますから」

軽い爆弾発言だ。

それで俺は選ばれたのか。

少しおかしいな～と思ったんだよ俺。

暁

「あれ～？ おかしいな～ 今変な事を聞いたような～」

暁はとぼけている。

総一

「事実だ。お前に俺と母さんの力を半分ずつやった」

暁

「まじですか？」

そう言つて、母を見ると微笑みながら頷いた。

暁

「だ、だけど今まで俺そんな力使えなかったけど……」

総一

「ああ、それはな。俺がルカに頼んで封印してもらってた」

暁

「オイ！」

暁は突っ込んだ。

ルカ

「力の封印なら能力を渡すときに解きましたよ？」

暁

「な、なんだって!!」

暁は今日だけで驚きの連続だった。

暁

「な、なんか驚きすぎて疲れた……」

総一

「あ、そうそうお前に一つ言い忘れてた」

暁

「もう大抵の事では驚かないよ、俺」

暁は疲れた顔でそう言った。

総一

「お前には妹がいます」

暁

「へ……？」

結華

「今年の春、生まれたのよ。名前は、【天錠てんじょう 桜華おうか】」

暁

「俺に妹が……」

それを聞いて

暁

「これからは、また家族と暮らせるのか……俺？」

総一

「ああ」

結華

「ええ」

暁の目から涙がこぼれた。

それを慈愛の眼差しで見ていたル力は

ル力

「いいプレゼントだったでしょう?」

ル力のその問いに暁は涙を服の袖で拭き、元気な声で

暁

「ああ!」

こうして暁は、再び家族と暮らせるようになったのだった。

c o n t i n u e d

t o b e

第2話 『新しい家族』（後書き）

作者「まさかの両親復活と妹の存在、いかがだったでしょうか？」

暁「俺も驚きまくって疲れたわ（――；）」

作者「そうはいつでも嬉しいでしょう？」

暁「ん、まあーな」

作者「テレてやんの」

暁「う、うるさい!!」

作者「とりあえず、主人公いじりはここまでにして」

暁「（作者、いつか滅する）」

作者「敵の存在が明らかになったね」

暁「ネガ・マリスだっけ？」

作者「そうそう」

暁「あれって、名前の由来あるの？」

作者「あれはね、負の英語訳のnegativeと悪意の英語訳のmaliciousと繋げただけ」

暁「結構単純なネーミングだな」

作者「それでもかなり強いよ」

暁「まじで？」

作者「まじで」

暁「……と、とりあえず次回予告を」

作者「あ、ごまかしたね」

暁「うつさい！」

作者「こほん……では、次回 第3話『業火の中で』でまたお会いしましょう！」

暁「では次回までさよなら」

第3話 『業火の中で』（前書き）

ということ、あの人物との物語です。

第3話 『業火の中で』

あれから4年の歳月が過ぎた……

ここはアメリカのLA。

今日は父に連れられ知人の会社の操業20周年の記念パーティーに行くことになった。

まさか、うちの父親の職業が、世界屈指の財閥、天錠コンツェルンの総帥とは……。

元いたセカイでも父親の商売の才能は群を抜いてたからな。

リムジンに乗り、40分後、会場のビルに着いた。

父親もキリツとした表情になり、営業用の顔になる。

俺も一応、大財閥の御曹司の為、キリツとした感じを出す。

会場に着くといろんな人達が、寄ってくる。

富豪A

「これはこれは、天錠さん、今日も凛々しくらっしゃる」

総一

「いえいえ、そんな事は」

婦人A

「またまた御謙遜を。あら？ こちらの子は？」

総一

「私の息子の暁です。暁、挨拶なさい」

そう促され、暁は人を魅了する微笑みで

暁

「天錠 暁です。父がお世話になってます」

婦人B

「あら、理髪そうなお子様ね、おほほほ」

暁

「（あー、やだやだ。この人達、わかりやすいおべっか使いやがって）」

暁は心の中で毒づいた。

そして、会場を見渡すと気になる少年を見つけた。

暁

「（銀色の髪のツンツン髪、あれはもしかして……）」

暁は、周りの人に「失礼」と言って抜けだし、その少年に近寄った。

暁

「あのすいません」

??

「ん？」

暁に呼びかけられてその少年がこちらの方を向いた。

暁

「私の名前は、天錠 暁と申します」

??

「おお！ 総一殿のご子息か！ わが名は、九鬼 英雄！」

暁

「（やっぱり……という事は、ここがあの事件の現場か……）」

英雄

「暁殿。どうかなされたか？」

暁

「いや、何でもありません。ところでどうも殿とか付けられるのは慣れてないので

私の事は、暁と呼び捨てでかまいません」

英雄

「暁殿がそう言うなら、これから暁と呼びましょう、それと我と話す時は、敬語でなくてもよい」

暁

「わかった。そのほうが助かる。どうもこういう場所は苦手で」

英雄

「フツハハ！！ 場数を踏めば、苦手も気にならなくなるよ」

暁

「そこまで慣れたくないんだが」

英雄

「貴校は、面白い人物のようだ。我と友になってくれぬか？」

そう言つて、英雄から手を前に出される。

暁

「ああ、喜んで！」

暁は前に出された手を握り返し握手をした。

ちょうどそのとき

ズドオオン！

何かが爆発したような音が会場全体に響き、入り口付近から煙が入ってくる。

婦人A

「キヤアアアア！！！！！」

婦人Aが悲鳴を上げる。

英雄

「な、何事だ！」

ズドオン！ ズドオン！ ズドオオン！ ……………

英雄がそう言った直後、連続して一斉に爆発音が鳴り響き大量の煙が会場に立ち込め、

爆発音がした部屋から炎が上がる。

暁

「この音は……爆弾か！」

英雄

「何イ！」

暁

「とりあえず、ここから脱出しよう」

英雄

「うむ」

そう言って、英雄の左手を握り、走り出す。

出入り口付近には、人々が我先にと出入り口に殺到している。

そして、自分達がいる反対側から爆弾の爆発音がした

ズドオオン！

逃げ遅れた人が爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされる。

英雄

「人が……」

総一

「おい、暁！」

総一が二人に駆け寄ってくる。

暁

「父さん！ 英雄を頼む。俺は逃げ遅れた人を助けに行く！」

総一

「……わかった。必ず生きて帰ってこい！」

暁

「ああ！」

英雄

「無茶だ！ 暁は我と同じ子供ではないか！

総一殿はご自分のご子息が心配ではないのか！」

英雄は総一に抗議する。

総一

「あの子なら大丈夫だ……」

その理由を知らない英雄はその言葉に怒りを覚える。

英雄

「我也助けに行く！」

そう言つて、暁が向かった方向に走っていく！

総一

「あ、英雄君、待て！」

総一の制止を振り切り、英雄は暁の方へ進んで行く。

そのとき、前に進んでいた英雄の近くで爆弾が爆発した。

英雄

「ぐわゝ」

英雄は吹き飛ばされ、吹き飛ばされた場所に尖った瓦礫があり運悪く、

英雄の左肩と左腕に突き刺さる。

英雄

「ぐっ！！」

物凄い強烈な痛みを感じる。

そして最悪な事に他の部屋から発生した火災がこの会場まで燃え広がりが会場全体が火の海になった。

一方その頃、

暁は、吹き飛ばされた人々を救助し、ビルの外にでた。

暁

「父さん〜！ あれ英雄は？」

総一

「あれ？ 暁と一緒にしないのか？ 自分も助けに行くと
暁を追って行ったぞ」

暁

「なんだって！ なんで止めなかったんだ！」

総一

「止めたさ、しかし、会場にはいなかったし、
外に出たんじゃないかと思って探しに来たんだが」

その言葉を聞いて、暁は舌打ちし

暁

「チッ！ 俺探してくる！」

総一

「今、ビルの中は火の海だぞ。それにまだ爆弾があるかも知れんのだぞ！」

暁

「心配するな、俺を何者と思ってる」

その言葉を聞いて総一は小さく息を吐き、

総一

「フ、いらぬ心配だったな」

そして暁は再びビルの中に入って行ったのだった。

英雄 side

英雄

「ぐっ!!!」

左肩と左腕の傷と血が大量に出て、意識を持っていかれそうになったが、

英雄は、だらんとなった左腕を右手で押さえ、出口を目指す。

英雄の周辺は火が燃え盛り、炎の壁となって行く手を阻む。

英雄

「チィ！ 我は……こんなところで倒れるわけにはいかぬ！」

英雄には夢がある。

【世界一のプロ野球選手】という夢が…。

英雄

「我は絶対生きてここから出る！」

英雄は一步步を歩を進める。

ちょうど暁より先に救助に来ていた女性が一人

女性

「おい、だれがいるか！」

女性は生存者がいないか大声で呼びかける。

その声に英雄は、

英雄

「ここにいるぞ！　ここだ！」

女性

「！　あつちか！」

女性は目にもとまらぬ速さで英雄の所まで移動した。

女性

「大丈夫か！　酷い怪我じゃないか！」

英雄

「心配いらん！　ただのかすり傷だ」

女性

「嫌、どう見ても重傷じゃねーか。ホラ、肩を貸してやる、歩けるか？」

そう言って、女性は肩を貸した。

英雄

「かたじけない」

女性

「にしてもその怪我で良く動けたな」

英雄

「我には、夢がある。その夢の成就の為にここで死ぬわけにはいかぬ」

女性は驚いた。

まだ小学生のガキなのにここまで確固たる信念と気高さを持っているこの少年に

思わず、尊敬を覚えた。

英雄 s i d e o u t

二人はようやく出口へとたどり着いた。

女性

「もう少しで出口だ。がんばれ！」

英雄

「ああ！」

出口に辿り着いた瞬間、部屋の上部が崩れ、大きい瓦礫が落ちてくる。

女性

「チィ！」

持っていた2本の小太刀を抜き、大きい瓦礫を目にも止まらぬ速さ

で切り裂いた。

しかし、続けて又別の瓦礫が複数上から落ちてきた。

女性

「対応が追い付かない！」

英雄

「ここまでか……無念！」

そう言っで、英雄は目を閉じる。

しかし、二人と瓦礫の間に誰かが立ちふさがった。

それは英雄が良く知る人物だった。

英雄

「あ……あ……暁！」

暁

「もう大丈夫だ！ 英雄」

そう言っで暁は、二人を担ぎあげ、光の如く、瞬く間にビルから脱出した。

そして、誰もいない公園の芝生の上に英雄を置いた。

女性

「お前は一体……」

暁

「ん？ 英雄のダチだ！（この女性は……）」

髪は長いが後に英雄の専属メイドとなる忍足 あずみだ。

たしかこの時期は、大佐（『君が主で執事が俺で』参照）の傭兵部隊にいたんだっけ？

暁

「こんな事をしてる場合じゃない」

英雄の怪我を見ると重症だった。

暁

「仕方ない、ここで応急処置をする」

あずみ

「応急処置だと？」

あずみは何言ってるんだこいつと言わんばかりに疑わしい目で暁を見た。

暁はそれを気にする事無く何もない空間から医療機器を出した。

あずみ

「な！ 一体どこから出した」

暁

「細かい事は気にするな！ 英雄、麻酔なしでやるからじっとしてろよ」

英雄

「つむ……」

暁

「（こいつはやばいな、意識を失いかけている。血も結構出てたかな）」

そう思いながら、鮮やかな手際で傷の手当てをした。

英雄

「ぐああああ……!!」

英雄の左腕と左肩に凄まじい激痛が走る。

数分後、応急処置は完了した。

あずみは信じられないとばかりにあっけにとられていた。

暁

「（このままだと野球ができなくなりそうだな。仕方ない、あれを使うか）」

暁は、左腕の傷口に手を当て、

暁

「治癒巧！」

そう言った瞬間、暁の手から緑色の気を出し左腕に送り込む。

あずみ

「な！ 氣だと！」

英雄

「これは！」

あずみと英雄は驚いた。

小学生くらいの少年がセカイでも使える者が少ない、氣を使っているのだ。

驚かない方がおかしい。

左腕に氣を送り込むのが終わると次に左肩に氣を送り込んだ。

数分後

英雄

「礼を言う、暁。お前は命の恩人だ」

英雄は暁にお礼を言った。

暁

「よしてくれ、友達を救うのは当たり前だろ？」

それに礼を言うならこの人にもお礼を言ってくれ」

英雄

「そうであつたな、救助の方、礼を言う」

あずみ

「礼には及ばないよ、任務だからな。それよりそのガキ、お前一体何者だ？」

暁は、その言葉にニイと口の端を吊り上げ、

「俺の名前は天錠 暁、英雄の友人で代行者^{エージェント}さ」

あずみ

「天錠…… そうか、お前が天錠コンツェルンの！」

暁

「そういうとき、あずみさん」

あずみ

「！」

あずみが小太刀を構える。

あずみ

「なぜ、私の名前を」

暁

「それは、大佐さんと知り合いだからさ」

あずみ

「なるほどね、たしかにお前の親父さんと大佐は友人関係だから、私の名前を知っていても不思議じゃないか」

そう言うにあずみは小太刀を収めた。

暁

「うんじゃ、あずみさん。英雄を病院に連れて行ってやってくれ」

そう言つて、暁は父のいる方向へ歩き出す。

あずみ

「ああ、わかった」

英雄

「暁！ また会えるか？」

その問いに

暁

「ああ！ また会えるさ！」

暁は背を向けたままそう答えた。

後日、

英雄の怪我の具合を聞いた所、

左肩と左腕ともに問題なく順調に回復し野球もできるみたいだ。

よかったよかった。

後から聞いた話だが、英雄の怪我の治療をした先生が、

医者

「こんなに見事な応急処置を私は見た事がない」

と褒めてたらしい。

さて、そろそろ風間ファミリーのメンバー達と接触する為、日本に移動しますか。

t o b e c o n t i n u e d

第3話 『業火の中で』（後書き）

作者「ということで、英雄とあずみ登場でした」

暁「やっとまじこいのキャラがでてきたよ」

作者「まあね」

暁「でもこの話を書いたってことは…… Prologueはこれで終わりか？」

作者「ああ、そうだよ次から第1章、やっと主要メンバーできます」

暁「おお！」

作者「あと、技とか人物とかはまたあとで紹介したいと思います」

暁「ふむふむ」

作者「ということで次回、第1章 第1話 『風間 翔一と直江 大和』でまた会いましょう」

暁「では次回までまたな」

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（前書き）

ということで、風間ファミリー初期メンバーの二人の登場です。

第1話 『風間 翔一と直江 大和』

両親と別れ、俺は冴場 涼香さんを含む12名のメイド達と

LAから日本へと引越した。

目的地は川神市。

今度住む場所は、将来【チャイルドパレス】が立つ土地をうちが買取り、

屋敷を建てた。

それは俺の決意の表れだった。

暁

「（絶対、冬馬達を救ってみせる！）」

引越しの片付けも一段落し、俺は行動を起こすことにした。

暁

「涼香さん　ちょっと出かけてくれるね」

涼香

「お一人ですか？　最近物騒ですから、誰か護衛を付けましょうか？」

暁

「んーまあ、一応大丈夫だけど、誰か付けてもらえる？」

涼香

「それでは、来夏にお願いしましょう。来夏」

涼香が呼ぶとメイド　No.2の南雲なくも　来夏らいかが一瞬にして現れた。

来夏

「呼びましたか、涼香？」

涼香

「ええ、暁様の護衛をお願い」

来夏

「了解しました。暁様、では参りましょう」

暁

「ああ、お願いね、来夏さん」

暁が微笑みながらそう言った。

来夏は、少し頬を赤く染めて、

「こほん、では、参りましょう／＼」

そう言っつて瞬く間にまたその場から消えた。

暁

「では、いつてきます!」

涼香

「いつてらっしゃいませ」

涼香に見送られて暁は目的にの空き地を目指す。

15分後、

暁は目的地の空き地に着いた。

来夏さんも暁が呼べばすぐ跳んで行ける距離にいる。

暁は、空き地を見渡し、目的の建造物を見つけた。

それはダンボールで出来た俗に言うダンボールハウスだった。

暁は、ダンボールハウスに近づき、少し開^あいているドアの隙間から中を覗いた。

すると中に暁と同じ歳のバンダナの少年が何かをしていた。

暁

「（あれがキャップか） 声をかけてみるか？」

そう思いながらドアを開けた。

翔一

「誰だ!」

暁

「ごめん、ちょうど散歩していたらこのダンボールが目に入って、これって君が一人で作ったの？」

翔一

「ああ、俺一人で作った！ それとこの名前は【風雲風間城2号】だ！」

暁

「2号？ 1号は？」

暁は首をかしげながら言った。

翔一

「作った次の日に行ったら知らないおっさんが住んでいたからあきらめた」

それを聞いて、暁は納得したような表情で

暁

「なるほどね」 にしても所々やばい箇所があるな」

翔一

「なんだと！ 俺の作ったのにケチをつけるのか！」

翔一は、自分が一生懸命作った物にケチをつけられ怒っている。

暁

「怒ったなら、謝るよ。俺ならこの城をもっと頑丈にできるよ」

翔一

「本当か！どうやるんだ？」

暁

「ああ、それはね……」

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一

「おまえ、いろんな事知ってるな、友達になつてくれないか？
俺この町に来たばかりだから友達いないんだ」

暁

「俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ」

翔一

「アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ！」

暁

「ならシヨウだな！ よろしくな！」

翔一

「ああ！」

そういつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。シヨウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、シヨウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすことになり、この町

に引っ越してきたのだ。

翔一

「おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すげーな！」

暁

「凄いのは、父さんのほうさ、俺が偉いわけじゃない」

翔一

「じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか？」

暁

「将来、継ぎたいと思ってる」

翔一は、その答えを聞いて、

翔一

「そうなのか、じゃ、会社継ぎ前に一緒に旅にいかねえーか？」

暁

「ははは！それもいいな。考えておくよ」

翔一

「楽しみだぜ！」

暁

「ああ！」

そう話していると外に誰かがいる気配を察知した。

暁 「（俺達と同じくらいの少年か。ここにきたという事は……大和か！）」

暁 「誰か外にいるみたいだ」

翔一 「ん、誰だ？ 出てみるか？」

暁 「ああ」

二人が外に出るとそこには、荷物を持ったニヒルな感じの少年が立っていた。

少年の名前は、直江 大和

話を聞くとどうやら家出をしてきたらしい。

大和 「俺は、母親がうるさいから家出したんだ。しかし、俺は冷静な子供だ。あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く」

暁 「お前、アホだろ？」

大和

「アホとはなんだ！」

あほと言われ、大和は怒っている。

暁

「アホはアホだ。冷静ならそんな事はしねえよ。

それに家出ならもつと遠くに行け。

母親に探してほしいのが丸わかりだ」

大和

「ぐっ……」

大和は、凶星を言われ黙った。

暁

「お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしとか考えてねえよな？」

大和

『実際そうだろ？』

暁

「だから、お前はアホなのだ！ そんなこと考えてたら、人生かなり損するぞ」

大和

「何？」

暁

「いいか！ 人生というのは長いようで短い。

お前にも夢があるだろ？ それを叶えるためには並大抵の努力じゃないし、

夢によつては、専門の知識と経験も必要だ。

人生を死ぬまでの暇つぶしと言ってるやつは、その時間すらも無駄にしている。

まず、その考えを捨てろ！ 後、そのニヒルな感じはキャラか？ はつきり言つて、お前に似合つてないしかなり痛いぞ。実際のお前はそんな奴じゃないだろう？」

大和は、自分がいままでカッコイイと思つていた事をかなり痛いと言われ、

自分の考えも否定された。

だが、不思議と怒りがこみ上げて来ない。

それは大和も無意識のうちに自分は間違っているんじゃないかという考えがあつた証だつた。

大和

「じゃ、どうすればいい……？」

大和が暁にそう訊ねると

暁

「夢の為な努力と労力を惜しむな！ 必要な知識も学べ！ ダメだつたときなんか考えるな！

常に前向いて進め！ そうすればいつかその夢に手が届く！」

その答えを聞いた大和は、

大和

「お前、名前は？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁」

大和

「アキラ……俺をお前の弟子にしてくれ！」

暁

「弟子！？なんでまた？」

大和

「お前は、俺の知らない知識をたくさん持っている。それにお前が師匠なら俺の夢に近付ける気がする。」

暁

「夢？どんな夢だ？」

大和

「総理大臣になってこの日本を変えたいんだ！」

暁

「へえー、これまた大きな夢だな。半端な道のりじゃないぞ？」

大和

「覚悟してる。険しい道だと思うけど、どうしても俺はその夢をかなえたい！」

暁

「そうか……わかった。俺の弟子にしてやるよ。」

大和

「ほ、本当か！　ありがとうございます。アキラ…いや師匠！」
なんか大和がうれしそうにそう言った。

翔一

「おまえも面白い奴だな！　俺は風間　翔一！　よろしくな！」

大和

「俺は、直江　大和。　直江　兼続の直江に大和魂の大和だ！」

暁

「大和か、よろしくな！」

暁は大和の前に手を差し出す。

大和

「これからよろしくお願いします師匠！そして翔一！」

大和は、暁の手を握り返し握手をした。

暁

「ああ！」

翔一

「おう！」

こうして俺は、その日のうちに友人と友人兼弟子を手に入れたのだ
った。

e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

t
o
b

第1話 『風間 翔一と直江 大和』（後書き）

作者「という事で、キャップと大和登場の回でした」

暁「なんか大和、弟子になったぞ？」

作者「あーいいのいいの、大和のあの性格私嫌いだし、とりあえず、更生させないとねと思ったんで今回この話になりました」

暁「なるほどね、そういえば一子達は？」

リメイク前のやつでは、やっつけって感じだったけど？」

作者「それなら次の話でワン子・ガクト・モロの加入の話ですよ。まあやっぱ、やっつけじゃなく真面目に書いたほうがいいよ。うな気がしたしね」

暁「なるほどね」

作者「まあ、話長くなるから読んでくれる方には申し訳ないけどね」

暁「まあね」

作者「ということで、次回 第2話 『風間ファミリーのはじまり！』でまた会いましょう！」

暁「じゃ、次回までまたな！」

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』 (前書き)

今回は、風間ファミリー結成時の残りのメンバーの加入話です。

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』

—— 風間ファミリーは3人からはじまった。

まず俺、天錠 暁と、風間 翔一、それから直江 大和。

あの出会いから良く遊ぶようになっていた。

リーダー気質のキャップと補佐気質の大和、それと両方を補佐する俺、

3人の相性がよかったんだろう。

翔一

「駄菓子屋いこーぜ。ピックリマンのキラあてんぞ」

大和

「カードの位置に法則があるんだ。新品の箱にしようぜ」

暁

「買うのはいいが、良く考えてから金使えよお前達」

キャップが俺達をリードする感じで楽しかったが、

二人が暴走しそうなときは俺が止めていた。

そんな俺達3人をじーっと見ていたのが岡本 一子。

のちに川神院に引き取られることになる女の子だ。

翔一

「お、なんだお前。俺達と一緒に遊ぶか？」

一子

「え……」

キャンプの良いところは、こういう風に

爽やかに人に手を伸ばすことだ。

一子

「うんっ！」

ワン子はうれしそうにその手をとった。

こうして、ワン子も俺達と遊ぶようになった。

一子

「女の子と遊ぶより大和達と遊んだほうが楽しいわ！」

俺達は、他愛もない会話をしていたときちょうどワン子の話題になった。

大和

「へー、今までは違うところにいたんだ」

一子

「うん、おばーちゃんがひきとってくれた」

ワン子は、孤児院からおばあさんに引き取られてここに引っ越してきたらしい。

ワン子の孤児院の話は面白かった。

一子

「それでね、リクオっていうやつが俺はコックになるって包丁いじっちゃって……」

大和

「お前のいた孤児院バイオレンスだなあ」

翔一

「ワン子泣き虫だからイジめられてたろ？」

一子

「タツちゃんがいるから平気だったよ」

源 忠勝、のちに風間ファミリー入りする漢である。

暁

「（それが原因で忠勝のやつは、一子に兄って感じでしか見てもらえないんだよね」

報われねなあ……）」

暁が忠勝の事を考え込んでいると

一子が暁に寄ってきて、

一子

「どうしたの？」

不思議そうに暁に聞いた。

暁は、すぐに何とも言えない表情から優しい表情になり、

暁

「いや、なんでもないよ（ニコッ）」

そう言って微笑みながら、優しくワン子の頭を撫でた。

ワン子は、子犬のように気持ちよさそうに目を細める。

翔一

「本当にワン子は犬みたいだなあ」

大和

「たしかに！」

そう言っで、大和が笑う。

一子

「ん？」

ワン子はどうやらわかってないようだ。

暁

「（まあ、そこがかわいいんだけど）」

どうやら俺もワン子に甘いらしい。

俺は苦笑するのだった。

俺達4人はフリーダムなキャップとわんぱくなワン子、

それらの暴走をおさえる俺達、という感じでまとまっていた。

ワン子は元気ではあるが、よく泣いていた。

翔一

「いえーい！俺またうめえ棒当たりー！」

翔一は嬉々とした感じでそう言った。

一子

「なんでそんなにいっぱい辺りが出るのよう……」

大和

「あ、今回俺も当たった」

翔一

「俺と大和仲間ー。ワン子1人だけ仲間外れー！」

一子

「うわーん！！」

ワン子は大声で泣き出した。

暁

「俺もはずればっかだから、ワン子と同じはずれ仲間だ。

だから、泣くな」

本当は1回当たっていたが、ワン子にはだまっていた。

ワン子

「……本当？」

暁

「ああ！ だから泣くな」

それを聞いて、ワン子は服の袖で涙を拭き、

ワン子

「うん！」

そう言つて、笑顔を見せてくれた。

感のいい大和は、俺が本当は当たってたのを気付いてたみたいだが、

黙っててくれた。

俺達は何もするにも一緒だった。

商店街にやってくると知り合いの本屋の店長が声をかけてきた。

店長

「おお、お前ら元気のいい4人だなあ！」

そう言つて、

店長

「でも俺の店の前で遊ぶなバツキャロー！」

と怒られた。

翔一

「それー！　たいきゃーく！」

一子

「わー！　まってよー！」

大和

「お騒がせしましたー！」

暁

「本当にいつもすみません、今度また本買いにきますので！」

店長

「おう！　貴重なお得意様だからなおまえはでもまた店の前で遊んだら

承知しねーぞコンチクショウ！」

暁

「はい！」

そつ返事をして、暁は店長に頭を下げ仲間の元に向かった。

店長はそれを見送って

店長

「あの風間ってのは悪ガキになりそうだが、それと天錠のほうは

あの歳でしっかりしてるなあ」

店長の人を見る目は確かだった。

岳人

「おいてめえ風間！ クラスの女子に少し
人気あるからって調子乗るなよ！」

浅黒の背の高い少年、島津 岳人がキャップに絡んできた。

翔一

「別にのってねーよ。お前が勝手に怒ってるんだろ」

キャップは呆れ顔でそう言った。

岳人

「けっ、覚悟しろ。ブツ飛ばしてパンツ脱がせて

泣かせてやるぜ。ふへへへ！」

どこかの三下の悪党みたいな笑い方をしてそう言った。

翔一

「面白いな、喧嘩は負けた事ないぜ」

それを聞いてガクトは、

岳人

「そりゃ今までの相手が弱いからだ」

岳人がそう言うときゃップは真面目な顔になり、

翔一

「いや、喧嘩売ったら死にそうな奴が仲間に居るんで……」

暁

「（そういえば、この前、DBのかめはめ波撃って見せたら、全員驚いていたな……）」

ガクトは、その言葉に首をかしげたが、

岳人

「ん？ 俺様は……強えぞ……」

一子

「あわわわわ、あ、暁と大和どうしよう?。」

暁

「心配するな。危なくなったら俺が止める」

そう言って、動揺しているワン子の頭を撫でる。

暁

「それにうちの軍師がなんとかするだろ」

暁は、大和を横目でちらりと見ると

大和

「（こういう手合いは策で八めるに限る）」

何か策を思いついたみたいだ。

大和

「……では喧嘩で勝負をきめようか。殴り合いだよ」

大和

「夕方5時に空き地にきな！ にげるんじゃないぞ」

そう言って、ガクトを挑発する。

岳人

「面白い。上等じゃねえか、ひよろひよろ野郎」

そして決闘開始の夕方5時――。

岳人

「ぐお！？　なんだこれ落とし穴！？」

岳人はまんまと罠に嵌った。

暁は、呆れていた。

暁

「策ってこれだったのか…… はあ」

暁がため息をついた。

大和は5時までに空き地に落とし穴を作成しておいた。

翔一

「いい眺めだな！ 行くぜコラー！！」

岳人

「やめ、ちょ、おま！ ヒキョーだぞ！」

翔一は、落とし穴の上から岳人に蹴りまくった。

暁は無言で、翔一に傍に行き、

一子

「暁？」

暁は、キャップの首根っこを持って上にあげた。

翔一

「ちょ、暁、なにしゃがるー！」

大和

「そうだよ、師匠」

翔一と大和が抗議してきたが、一瞬二人を睨むと黙った。

暁は、ため息をつき、

暁

「たしかに自分より強い奴には策を用いるのは有効だ。
だが、相手一人に大勢でいたぶるのは、おかしくないか」

そう言うと、二人ともシュンとしている。

暁

「そこのお前もこれじゃ、嫌だろう？」

ガクトにそう言うと

岳人

「ああ！ 納得できねえ！」

それを聞いて

暁

「俺がこいつの相手をしよう……」

その言葉に

翔一・大和

「イイイイ！！！！！」

キャンプたちはガタガタ震えていた。

岳人は、その様子を不思議そうに見ていたが、

この後、なぜ彼らが震えていたのか知ることになる……

………

岳人を落とし穴から引き揚げてから

お互い正面になるように向きあい、

岳人

「お前が相手あ！ 俺は強えぞ！」

暁

「俺は、まあまあ強いぞ」

そう言って、喧嘩が始まった……

1分後、ガクトはブルブルと震えていた。

そして

岳人

「申し訳ありませんでした！！」

それはそれは綺麗な土下座だったという……。

それからあまりにも不公平なので、もう一度仕切り直し、

キャップと岳人にタイマンで決着を付けさせ、

お互いに認め合う所を見つけたようで

そしてその結果――。

一子

「わわわ何か来たよ」

岳人

「よっ、今日から俺様達も遊びにまぜろよ」

岳人

「島津 岳人だ。んで、こいつもいれてくれ、ダチの」

卓也

「師岡 卓也、よろしくね」

翔一

「おう歓迎するぜ」

キャップは二人を歓迎した。

一子

「がるるっ!」

ワン子はなぜか岳人を威嚇する。

岳人

「なんだこの生き物は」

大和

「新入りに負けないよう気を張ってるのさ」

岳人

「面白い生き物だ。よろしくなオイ」

卓也

「仲良くやろうね」

暁

「ああ、俺は、天錠 暁だ、よろしくな二人とも」

するとガクトは、暁の目の前に立ち、すぐさま土下座し、

岳人

「あんたの強さに惚れた。弟子にしてくれ!」

暁

「はい?」

こうして俺は、また新しい弟子が出来たのだった。

これで6人。

これが風間ファミリーの始まりだった……

c o n t i n u e d ……

t
o
b
e

第2話 『風間ファミリーのはじまり!』（後書き）

作者「ということで、題名変わってますが、気にしない方向で」

暁「気にするわ!」

作者「私少し勘違いしてたんですよ」

暁「勘違いとは?」

作者「原作で最初の5人のときに風間ファミリー結成したと思ってたんですが、

もう一度、やり直したら、百代と京入ってから後でした」

暁「ああ、だから結成じゃなくてのはじまりに変えたのか?」

作者「はい、そうです」

暁「そう言う事が」

作者「疑問に思われた読者の皆様申し訳ございません」

暁「これで俺入れて6人と言う事は次はあの人登場?」

作者「はい、そうなんです。あの人が登場です。

ということで、次回 第3話 『百代登場! 暁VS百代』で
またお会いしましょう!」

暁「次回までまたな〜!」

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』（前書き）

という事で、まじこいメインヒロインの一人、武神 川神 百代登場です！

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』

風間ファミリー結成から数日がたったある日の事

同じ学校の違うクラスの同級生のグループが、俺が松笠に行ってる間に

助っ人の上級生を連れて俺達の秘密基地を奪おうと喧嘩を売ってきた。

なんとか追い払ったものの秘密基地は壊されてしまった。

翔一

「ちくしょう！ あいつら秘密基地壊しやがって！」

悔しそうに怒っている。

岳人

「まったくだぜ！ にしても人数が多すぎる！」

大和

「仕方がないよ、師匠がいたらあんなやつら倒せたけど、今、松笠に行ってるし（――；）」

卓也

「たしかにアキラいるとすぐ決着付きそうだけど（――；）」

一子

「ねえ、キャップこれからどうするの？」

翔一

「大和、なんか策ねえか？」

大和

「んー、そうだな。助っ人頼むか」

一子

「助っ人？」

岳人

「大和く、なんか当てがあるのか？」

大和

「ああ、川神院って知ってるか？」

卓也

「武術の総本山でしょ？ 川神の人なら知らないはずはないよ。それがどうしたの？」

大和

「その総代の孫が俺たちの学校の上級生なんだ。名前はたしか川神 百代」

翔一

「たしかにそいつが助っ人してくれたら、鬼に金棒だな！」

大和

「助っ人の件は、俺が行ってくるよ」

岳人

『おう、任せたぜ！ 大和！』

とりあえず、川神 百代をする事に決定した。

そんなやりとりを遠くからじいーと見つめる少女が一人、

京

「……いいなあ、楽しそう……」

少女の名前は、椎名 京

後に風間ファミリーの一員になるのだが、それはまた別のお話……

所変わってここは、川神院

武術の総本山にして、武の頂点。

多くの武術家が、今日も武の境地を目指して鍛練を続けている。

百代

「さてと、今日も走り込み行くか」

やる気がない口調で山門を出ると一人の少年が門の前に立っていた。

大和

「すいません、ここに川神 百代って人いますか？」

百代

「川神 百代は、私だが？」

大和

「いきなりで悪いのですが、力を貸していただけませんか？」

そう言って、大和は頭を下げた。

百代

「ここではなんだ、近くの川原で話を聞こうか？」

大和

「はい」

そう言って、二人は、多馬川の川原に移動した。

川原に到着すると大和は、百代に助っ人の依頼をした。

百代

「それは、ゆるせないな、私は卑怯なやつや不誠実なやつが大嫌いだ。」

でも、何か見返りがないと私は手を貸さないぞ？」

大和

「では、報酬としてこれを」

そう言って差し出したのは、百代が集めている野球カードのレアだった。

百代は、上機嫌でこれを受け取り、

百代

「後、こっちからお前に条件がある。おまえ、私の舎弟になれ！」

大和

『舎弟ですか（汗）……あの拒否権は？』

百代

「拒否した場合は、助っ人の件は無しだ」

大和

「わ、わかりました、あなたの舎弟になります」

その答えを聞くと百代は嬉しそうに

百代

『そうか！ 今日からお前は私の弟だ！ よろしくな、大和！』

大和

「よろしくお願いします！ 姉さん」

そういつて、握手を交わした。

百代

「あ、そうそう言い忘れてたが、もし契約を破ったらお前を蹴り殺すからな。」

何度も言うが、私は不誠実なやつは嫌いだ！」

鋭い眼光で大和を見る。

大和

「は、はい……………」

このとき、大和は心底後悔したという。

とりあえず合掌

チーン！

数日後、また例の同級生と上級生混合のグループが風間ファミリーに喧嘩を売ってきたが、

百代によって一瞬のうちに数人の同級生達は、倒されていった。

同級生 A

「い、痛いよ〜」

同級生 B

「う、腕が！！」

同級生 C

「こ、こいつ強え！！」

上級生 B

「止めろ、止めろよ〜」

百代

「命乞いは見苦しいぞ！」

百代は、殺気を放ちながら心底楽しそうに喜んでいる。

するとあちら側の上級生の男子が、

上級生 A

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も殺してやるぜ！」

しかし、両足が震えているので、ただのハッターだとすぐわかる。

百代

「悪ね、へえー、素敵だなあ先輩。デートしてくれ！」

大和

「あ、キレた」

翔一

「キレたなあ」

一子

「百代お姉ちゃん、怒ってる！」

岳人

「俺、知らねっと！」

卓也

「あーなったらもう止められないね」

風間ファミリーの面々は、完全に傍観者になっていた。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ」

そういつて、近くの建物を指さし、その上級生の左足を持って、そのまゝ一瞬にして

近くの建物の屋根に飛び上がった。

風間ファミリー

「ま、まさか………!？」

百代は、空気投げの要領で、上級生を屋根から投げ落とした。
しかし、予想もできない事が起きた。

？

「おいおい、ここまでやる必要はないだろう」

百代 side

大和の約束の通り、私は、風間ファミリーの用心棒になった。

風間ファミリーの連中は面白い奴らばっかだ。

まだ会ってないが、ファミリーの一人に物凄く強い奴がいるという。

何でも大和達と同じ歳らしい。

私より強いだろうか……それとも……

何にせよ。会うのが楽しみだ。

私が用心棒するようになって数日が過ぎた頃、同じ学校の馬鹿な連中達が私たちに喧嘩売ってきた。

その時、ワン子を上級生の一人が殴った。

その瞬間、私は怒った。

私の仲間に今何をした？

これは許せることではない！

とりあえず、向こうからやってきたんだ。

こちらのせいじゃない。

これは正当防衛だ。

私の仲間に手を上げたんだ。

お前達覚悟はできているんだろうなあ！！

私は、そいつらの腕の骨を外していった。

上級生 A

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も同じ様に

殺してやるぜ！」

こいつは馬鹿か？そんなハツタリ私に効くか！

とりあえず、こいつはあの建物屋根から落そう。

そうしよう。

ただそのまま落してもおもしろくないので、

両足で着地できるように落すか。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ」（ニタあ）」

そういつて、近くの建物を指さし、私はそのバカの左足を持ちあげ、建物の屋根へと

飛び上がった。そして、私は躊躇なくそのバカを3階建の建物の屋根から投げ落とした。

しかし、予期せぬ事が起こった。

？

『おいおい、ここまでやる必要はないだろう』

なっ！　なんだこいつは？

私が助けたのを見えなかっただど？

私は、ただただ驚いていたが、やがて寧猛な笑みを浮かべた。

おもしろい！

こいつはおもしろいぞ！ たぶん実力は私と同等かそれ以上だ！

こんな近くに面白い奴がいたとは！

でも待てよ、あの少年の姿どこかで……

はっ！ こいつが大和が言ってたやつか！

ハハあ！ 本当に面白い！

私の興味は、今現れた少年に注がれ、

さっきまで相手にしていたバカ達の事など

どうでもよくなっていた。

百代 side out

一子

「ねえ、あれって……アキラじゃない？」

大和

「ああ、間違いない、師匠だ」

翔一

「おお！ 本当だ！」

岳人

「でも助かったぜ」

卓也

「本当だね、僕たちじゃモモ先輩止められなかったしね」

メンバーは安堵の表情を浮かべそう言った。

百代

「おい、そこのおまえ！ お前が天錠 暁か？」

暁

「ああ、そうだけど？ 君は？」

百代

「私は、川神 百代だ！」

この子が川神 百代かあ。

暁

「よろしく（ニコッ）」

暁は微笑みながら百代に手を差し出す。

百代は、暁のその微笑みに

百代

「お、おう、よろしく／＼／ （なんか胸がドキンとしたぞ………！）」

「

動揺しながらも暁の手を握り返し、握手した。

暁

「とりあえず、その前に……」

そう言つて、暁は相手グループのほうに向き、鋭い眼光で睨みつける。

相手グループ

「ひい！……！！！」

暁

「おい、おまえら、この前忠告したのよな？　ちよっかいかけるなつて！」

暁は、軽く殺気を放ち言った。

相手グループ

「す、すみませんでした」

相手グループ全員、暁に土下座した。

暁

「もう二度とちよっかいかけってくるな、もし、またしたら………わかつてるな！（ギロリ）」

相手グループ

「はい、もうちよっかいかけません！！！」

暁

「さて……そのままじゃきついだろう。
俺が嵌めてやるう」

相手グループ

「いやいやいや……！ 貴方様にお手を煩わす訳には……」

暁

「遠慮するな（ニコッ）」

相手グループ

「ひいいい……！！！！！！」

暁は、腕の関節が外れている相手グループ全員の関節をはめ直して
行った。

ゴキッ！ ゴキッ！

相手グループ

「ギャ~~~~~~~~！！！！」

相手グループ全員の断末魔が辺りにこだました。

く数分後く

相手グループは、一目散に逃げ出した。

暁

「ふう、やっと終わったな」

そう言つて、暁が一息ついていると

百代

「おい、おまえ！ 私と勝負しろ！」

暁

「（さっそく、勝負を申し込まれたか。もらつた能力試すにはいいか）」

暁

「いいよ。ここじゃなんだし、どつかいい所ないか？」

百代

「川神院はどうだ？ そこが家なんだ」

暁

「OK そこでいいぜ」

そのやり取りを見ていた他のメンバーは、

大和

「師匠、あつさり勝負受けたね」

翔一

「暁は自信があるんじゃないか？」

一子

「アキラ、凄いものね！」

岳人

「ああ、師匠ならモモ先輩に勝てるだろう」

卓也

「そうだね」

そう話ながら、風間ファミリーの面々は川神院に移動した。

川神院に着くと百代は大きな声で、

百代

「じじい！ いるかあ！！！！」

そう呼ぶと立派な髭を蓄えた老人が奥の間からでてきた。

鉄心

「なんじゃい、百代騒々しい」

百代

「こいつと手合わせしたいんだ。審判してくれ」

鉄心

「ん？ どの子じゃ？」

暁

「はじめまして、天錠 暁と申します、お目にかかれて光栄です。」

そう言って、頭を下げた。

鉄心

「天錠……、そうか総一の息子か！」

暁

「はい、そうです」

総一から鉄心と知り合いというのをあらかじめ聞いていたので、

驚く事はなかった。

鉄心

「あ奴は元気か？」

暁

「はい、鉄心さんにあつたら息災と伝えてくれと父から」

鉄心

「そうか、そうか、儂の事は鉄爺で良いぞ」

暁

「では、鉄爺と今度から」

鉄心

「そうか、あ奴の息子か。ふむ……」

鉄心は、暁をじいーと観察するように見ている。

実力は百代と同等もしくは上か。

しかもこの小僧何かまだ隠しておるな。

流石は、【鬼神】と呼ばれた漢おとこの息子じゃわい……

これは、面白い試合が見れそうじゃ。

鉄心

「ふむ、よからう。試合を許可しよう!」

百代

「本当か!　いくぞアキラ!」

百代は嬉しそうに暁の右手を握り、試合場まで引つ張っていく。

暁

「そんなに引つ張られても試合は逃げないぞ」

そういつて、鉄心を加えた風間ファミリーの面々は試合場に移動した。

試合場では、師範代の釈迦堂　刑部とルー・イーが、門下生の試合を見ている。

そこに鉄心達がやってきたので、何事かと二人の師範代は首を傾げた。

鉄心

「釈迦堂とルーこっちにきてくれ」

二人は、鉄心の元にやってきた。

釈迦堂

「総代、何か用ですかい？」

鉄心

「今から百代とそっちにおる少年の手合わせするんで、
門下生達の修練を一時やめてもらえんか？」

ルー

「ハイ、わかりました。みんな、今の試合終わったら一旦終わる
ヨ」

そして門下生達の試合が終わると、門下生達は、試合場から出て行
き、

鉄心

「すまんのう、百代、アキラ君、試合場中央へ」

そう言うと二人は、中央でお互いを真正面にして向かい合う。

鉄心

「では、これより試合をはじめる！」

鉄心

「東方！ 川神 百代！」

百代

「ああ！」

鉄心

「西方！ 天錠 暁！」

暁

「はい！」

鉄心

「それでは、はじめいー！」

百代

「ハアアアアア~~~~！！」

先に動いたのは、百代だった。

百代の銃の弾丸より早く鋭い複数の突きが、

暁を仕留めようと狙ってくる。

しかし、暁は、最小限の動きでその鋭く早い複数の突きをなんなく
躲す。

百代

「チィ！！！！！」

百代は、舌打ちすると攻撃を蹴り主体に変えて、

暁に蹴りのラッシュをお見舞いする。

百代

「ウラアウラアウラアウラアー！！」

しかしまたしてもなんなく躲し、百代の左足が前に出た瞬間、

暁

「ふん!!」

突き出された百代の左足をそのまま掴み、地面に叩きつけた!!

試合場の地面に軽くクレーターができている。

百代

「グハあ!!」

暁は見下ろす様に

暁

「まだまだ終わりじゃないだろ？」

と百代を挑発する。

百代は、一瞬にして体勢を整え拳を構える。

百代

「ああ!!」

暁

「ハハ!そうこなくっちゃな!」

暁は、心底うれしそうに笑いながらそう言った。

二人の戦いはまだ始まったばかりだ……

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第3話 『百代登場！ 暁VS百代』（後書き）

作者「という事で百代登場です」

暁「ふむ、俺出会っていきなりバトルなんだけど（・・；）」

作者「まあ、いいじゃないか、そうしないと話が進まないんだから」

暁「それはそうだが、後、京ちよつとだけでてたね」

作者「今回はゲスト出演。出てくるの当分先だしね」

暁「ふむ」

作者「それまで連続でバトルが続きます」

暁「まじか……」

作者「まじです」

暁「オイオイ、連続はきついつて」

作者「大丈夫、お前若いから気力で行け！」

暁「それもそれでどうなんだろうね」

作者「さあね、うんじゃ次回予告行ってみよう！

次回、第4話 『暁の力』でまたお会いしましょう！」

暁「では次回までまたな！」

第4話 『暁の力』（前書き）

暁VS百代の続きをどうぞ

第4話 『暁の力』

二人がお互いに向きあい構えたまま5分が過ぎた……

百代

「では、こっちからいかせてもらうぞ!!」

そう言つて百代は、掌に氣を貯め、

百代

「くらえー!!! 川神流・致死^{ちしほたろ}蚩^しう!!!!!!」

百代の掌から無数の氣弾が、暁の方へ向かっていく!!

それに対して、暁は、目を瞑り、

暁

「喝っ!!!」

そう叫んで目を見開き、気合いだけで全ての氣弾を跳ね除けてしまった。

その光景に百代は、

百代

「オイオイ、気合いだけで私の致死蚩を跳ね除けるとは!」

百代は臆することなく、ニイと口の端を上げて笑う。

百代は、再び構えると

百代

「じゃ、これはどうだ！！！！ 川神流・星殺しい！！！！！！」

膨大な量の氣の奔流が暁を襲う。

それに対して、暁は、

暁

「ほおー、こいつは凄いねー、うんじゃこっちも氣を使った技を！」

暁は両足を前後に開いて腰を落とし、深く高い息吹の声を上げた。

特殊な呼吸法により全身に満ちた氣と魔力のエネルギーを束ね、

そこに攻撃的なイメージ——闘魂を吹き込んで【神氣】と化する。

脇に抱えた両手の間から目映い白色の光がほとばしった。

「—— 天錠式神飛拳！！」

暁はソフトボールほどの大きさに圧縮した神氣弾をアンダースローで

投げつけた。

すると百代が放った星殺しに命中し、相殺した。

その光景に試合を見ていた全員が驚いた。

鉄心

「な、なんじゃと……」

暁が使った技、その名も【神威の拳】

はるか太古から伝えられている幻の拳だ。

鉄心

「なぜ、あの技をあの少年が……」

一方、違う場所で見っていた釈迦堂とルーは、

釈迦堂

「なんだありや、ソフトボールみたいな気弾1つで星殺しを相殺しちまったぞ……」

ルー

「彼には、ただならぬ力を感じるネ……」

釈迦堂

「ああ、俺の禍々しい氣と正反対のなんというか清浄なる氣……」

二人の額から汗が流れる。

また違う場所で見っていた風間ファミリーは、

翔一

「くうう、やっぱすげーぜ！ 暁は！」

翔一は興奮している。

大和

「ああ、流石、師匠。かめはめ波撃てるだけあるぜ！」

大和は自分の事のように胸を張る。

一子

「暁は、本当に強いよね」

ワン子は感心している。

岳人

「俺も師匠とタイムマンした時、死ぬかと思ったぜ……」

ガクトはあの時の事を思い出したようで、ガクガクと震えていた。

卓也

「暁の場合、もう次元が違うよね（汗）」

モロは、考えるのを止めた様な感じでそう言った。

皆が皆、そんな話を話してる間にも試合は続いていた。

百代

「ハハハ！！ 楽しいな暁！」

暁

「ああ、でもそろそろ終わりにしよう。百代さん、一番強い技でこい！」

暁は百代を挑発する。

百代

「それは挑発か？ いいだろう！ では行くぞ！！ かわかみ 波あ！！！！」

暁

「かめはめ波みたいな技だな。うんじゃ、こっちも、かめはめはめ 波あ！！！！」

二つのエネルギー波がぶつかり、辺りは埃や煙でお互い視界が見えなくなった。

暁

「視界が見えなくなったか ん！！！！」

百代が奇襲を仕掛けてきた。

百代

「これで終わりだ！ はああああああああ！！！！！！
川神流禁じ手・富士砕き！！」

今までの技達より遥かに強力で膨大な氣を纏った一撃が、暁の腹に命中する。

百代

「（勝った！）」

百代は勝利を確信した。しかし、

暁

「ふむ、これが百代さんの一番強い技か…… たしかに強力な一撃だが、それだけだ」

暁は淡々とそう言った。

百代

「効いて……ない……だと」

暁

「まあ、でもせっかく百代さんが本気になってくれたんだ。俺もその本気に答えよう」

そう言うと暁は、身体中の神気を爆発させた。

その瞬間、氣を感じられる川神院総代、師範代達、そして百代は驚愕した。

百代

「どんどん氣が上がっていく…… これは!」

百代の身体がガクガクと震えている。

百代

「これはなんだ……？ 私は恐怖しているというのか？」

百代の視線は、暁のほうを向く、

鉄心

「まさか、これ程とは……」

釈迦堂

「おいおい、あの氣の強さ、総代並だぞ……」

ルー

「まさか、そんな子供がいるとは……」

暁

「百代さん、まだ一度も負けた事無いんだって?」

百代

「……ああ」

暁

「じゃ、はじめての敗北を味わってもらっよ」

そう言つと暁の姿が消えた。

百代

「なっ!?!?!」

百代は、辺りを見回す。

すると暁が突然百代の目の前に現れる。

暁

「はあああああああ!?!?! 機神拳無双奥義・真 霸 隴
撃 烈 破!?!」

両手から龍の形をした氣弾を至近距離から百代に連続当て、

百代の身体を上空に押し上げる！

百代

「ぐっ！！！」

百代は、直も続く無数の氣弾を受け続け、迎撃の態勢が取れない。

暁は、光ほどのスピードで、脚に神氣を纏い、

百代に強烈で重い飛び蹴りを撃ち込んだ！

百代

「ぐはぁ！！！！」

百代は、技を喰らい地面へと叩きつけられる。

百代は、ダメージが大きかったのか。そのまま意識を失った。

鉄心は、百代の状態を確認し、

鉄心

「勝負あり！ 勝者 天錠 暁！！」

そう高らかに鉄心は勝敗を告げた。

すると風間ファミリーから喜びの声が聞こえた。

釈迦堂 side

釈迦堂

「あのガキ、勝っちまいがった……」

最近、総代を除いてここまで強い奴を見た事がない。

しかも氣で言えば、総代クラスだ。

なんかおもしろいぞ、このガキ。

俺も死合したくなつたぜ！

そんな事を考えていると自然と獰猛な笑みが零れる。

それを見ていたルーは、

ルー

「釈迦堂、まさか……」

ルーは気付いたようだ。

ルー

「待て！ 釈迦ど……」

釈迦堂

「おい、暁と言ったか。どうだ俺と死合しないか？」

釈迦堂は獰猛な笑みを浮かべそう言った。

釈迦堂 s i d e o u t

突然、師範代の釈迦堂 刑部から試合の申し込みを受けた。

でもこの場合、「試合^{こっち}」じゃなくて「死合^{こっち}」だよな。

鉄心

「これ、釈迦堂。いきなり何を言って「いいですよ」「何？」

鉄心が釈迦堂に抗議していると暁は、あっさりと了承した。

鉄心

「いいのか、暁君？」

暁

「はい、俺は構いませんよ」

釈迦堂

「随分余裕じゃねーか」

暁

「そついう、釈迦堂さんこそ……」

二人の間から気のせいだろうか火花が見える……

鉄心

「——ふむ。なら許可しよう」

そう言うと気絶した百代を風間ファミリーのそばに置き、

鉄心

「それでは、これより第2試合 釈迦堂 刑部 対 天錠 暁の
戦を始める！」

鉄心

「それでは、東方！ 釈迦堂 刑部！」

釈迦堂

「おう！」

「西方！ 天錠 暁！」

暁

「はい！」

両者は中央で相対する。

鉄心

「それでは、はじめい！！！」

釈迦堂

「はああああああ！！！！！！！」

暁

「はああああああ！！！！！！！」

ダンッ！！

両者は、飛び出す様に相手に向かっていた。

そして両者の拳と拳がぶつかり、死合が始まった……

c o n t i n u e d

t o b e

第4話 『暁の力』（後書き）

作者「ということで、百代に勝利した暁君」

暁「それはいいんだが、釈迦堂さんに絡まれたんだが……」

作者「仕方ないじゃん、戦闘狂なんだからあの人」

暁「たしかに（-_-;）」

作者「まあ、がんばれや、主人公」

暁「なんかム力つくな」

作者「まあそれは置いて、技の紹介などは、また別途で紹介します」

暁「あいあい」

作者「ということで、次回、第5話 『釈迦堂 刑部という男』でまたお会いしましょう!」

暁「じゃ、次回までまたな」

第5話 『釈迦堂 刑部という男』(前書き)

暁 VS 釈迦堂の闘い、前編をどうぞ

第5話 『釈迦堂 刑部という男』

—— 沖縄県、離島・黒門島。

神々が宿る島と言われし秘境……

島から遙か東の海は異界・ニライカナイに

繋がると言われている。

釈迦堂 刑部は、その島で産まれた。

釈迦堂の母は、1人の女の子を身籠っていた。

しかし、出産した時、産まれてきたのは2人だった。

医者から言われていた女の子となぜか男の子。

この男の子は、いったいどこから潜り込んできたのか。

母親が産気づいたのが、ニライカナイに一番近い東の

浜であつた事から、彼は異界から来た者として

皆から、恐怖されていた。

生後2日にして、両足で立つことができた為、

皆、彼を恐れた。

“ お前は一体どこから来た―― ”

“ いきなり母胎に現れた、得体の知れない男の子 ”

強く異能がゆえに、彼もまた孤独だった。

異能であるがゆえ、人から恐れられ疎まれ、家族さえも

彼から離れて行った。

そんな幼少期、少年期を送った為、彼の心の闇はかなり深く濃くなる。

そして彼が青年になる頃には、暴力が常の毎日だった。

沖縄に台風のようなガキがいる噂を聞きつけてある老人が、彼を訪ねた。

鉄心

「 お前さんか。沖縄近辺で台風のように暴れまくっているというガキは 」

釈迦堂

「 俺がガキ……ジジイ。てめえは何だ 」

ガキと言われてカチンときている釈迦堂は、鉄心にそう乱暴に訊ねる。

鉄心

「井の中の蛙を痛めつけてやろうと思うてな」

そう、余裕シャクシャクで鉄心は答えた。

釈迦堂

「本当にそうだったら、嬉しいぜ」

殺気を鉄心に向けて放ちながら、低い声でそう言った。

釈迦堂

「…俺は負けた事ねえんだよ」

釈迦堂

「ここまで強いと虚しいレベルだ」

釈迦堂

「自分が誰かも良くわからねえし」

鉄心

「その強さ故の孤独は痛いほど、分かるわい」

鉄心はしみじみそう言い、

鉄心

「だから敗北を、教えてやる」

そう言い放った。言葉は直もつづき、

鉄心

「そしてお前はワシと一緒に川神院に來い」

鉄心

「武術の総本山じゃ。退屈せんぞ」

釈迦堂

「そいつは素晴らしいが…タカが知れてる」

釈迦堂

「……悪いがジジイに負ける気がしねえ」

何かあきらめた感のある声でそう言った。

鉄心

「なら、試してみよう。死合っぞ」

釈迦堂

「容赦しねえぞ」

鉄心

「行くぞ」

鉄心の氣が一気に膨れ上がる。

鉄心

「顕現の参・毘沙門天!!」

釈迦堂は天から伸びた毘沙門天の巨大な足に踏み潰された。

0・001秒を切る圧倒的な速さの攻撃を釈迦堂は回避するのは不可能だった。

ドゴオオオン！！！

踏み潰された釈迦堂の周りとはとてもなく大きな足跡が残っていた。

釈迦堂

「……ゴハツ！？　ぐは……い、いでえっ！？」

鉄心

「ほっほっほ、おう、生きておるか。流石じゃのう」

鉄心は笑いながら釈迦堂に声をかけた。

釈迦堂はなんとか生きてるものの全身の痛みで動く事ができない。

釈迦堂

「て、てめえッ……げはあっ、ぐ、うう」

鉄心の顔が真面目な表情に変わり、

鉄心

「己が分かったか、井の中の蛙」

釈迦堂

「……ぐ、ふふ……蛙か、俺が」

釈迦堂はそう言って、滑稽な自分を笑った。

鉄心

「川神院に来い」

鉄心

「お前より強い奴もいるぞい」

鉄心がにやりと笑い、それを見ていた釈迦堂は、

釈迦堂

「ははは、ははは、ふ、はははっ!!」

釈迦堂は、痛みをこらえながら盛大に笑い、

釈迦堂

「そうか、そりゃあいいや、楽しい!!」

怪物と言われた男は、愉快そうに機嫌が好さそうに笑っている。

こうして、釈迦堂は川神院へ引き取られた。

試合場では、暁と釈迦堂の乱打戦が繰り広げられていた。

釈迦堂

「はああああああ!!!!!!!!!!」

暁

「おおおおおおお!!!!!!!!!!」

お互いの拳を繰り出している速さが常人ではもはや見る事の出来な

い速さになっている。

なので、両者の拳から腕半分が風間ファミリーの面々には見えていない。

岳人

「なんだ、ありゃー!!」

ワン子

「ど、どうなってるの?」

大和

「おそらく、俺達の目では見えない速さで殴り合ってるんだよ」

翔一

「すげー!!!」

卓也

「本当に睨って規格外だね」

一方、鉄心達は、

鉄心

「ほー、釈迦堂とここまでやりあうとはのう。

まあ、氣の量も然ることながら、

とてつもない戦闘センスじゃのう」

ルー

「はい、あそこまで釈迦堂と打ちあえるのは、総代ぐらいでしたガ、まさかあの少年が

「ここまでやるとハ……」

鉄心達は暁を感心していた。

死合は直も激しさを増して行き、

釈迦堂

「なかなかやるじゃねえか、暁!!」

暁

「釈迦堂さんこそ、流石は、川神院師範代だけの事はある!」

釈迦堂

「ははあ!! 褒めてくれるとはうれしいねえ、うんじゃ、お礼にこれでも喰らいな!! 川神流・蠍撃ちいい!!」

そういうと、光のように速く破壊力のある正に会心の一撃と言える拳が、

暁の腹部目掛けて向かってくる。

暁

「うんじゃ、俺もお返しに!天錠式・蠍撃ちいい!!」

同じ技で迎撃してくる!

釈迦堂

「何だっ!!!!」

鉄心

「な、なんじゃと……！」

鉄心もそれには驚いた。

川神流は、門下の者でないと教えられない門外不出の拳法だ。

それをたった今見ただけでやってしまった暁に鉄心及び師範代二人は驚きを

隠せなかった。

そして、お互いの拳と拳がぶつかり合い、凄まじい拳風が起こる！

釈迦堂

「オイオイ、シャレになんねえぞ。お前……」

釈迦堂は顔を引き攣ってそう言った。

暁

「ハハ……！ 驚くのはまだ早いけどね」

そう言って、ニヤリと口の端を上げ笑う。

お互い、拳を引かぬまま、睨みあっている。

暁が口を開く、

暁

「あんた、どうやら【力】を信用しきってるような目をしてるね」

釈迦堂

「だったら、どうした！ この世の中、力が全てだろう！」

暁

「ああ、それも否定しねえ……だがな……それだけじゃダメだ」

釈迦堂

「何？」

釈迦堂は暁を睨む。

暁

「あんたには、これといった信念がない！
信念の無いあんたの力など、紙も同然だ！」

それを言われ、

釈迦堂

「なら、てめえはその信念があるのかよ！」

暁

「ああ、ある！ 俺に勝ったら教えてやるよ！」

そう言って、釈迦堂を挑発する！！

釈迦堂

「お前が俺に勝つだと？ 寝言は寝て言えや！！」

釈迦堂から禍々しいとてつもなく大きい氣が放たれる。

暁

「寝言じえねーさ……事実だ！」

暁からも膨大な大きさの氣が放出される。

釈迦堂

「なら、証明して見せやがれ！！」

暁

「ああ、言われるまでもねえ！！」

そして再び両者は、戦いを再開した。

b e c o n t i n u e d ……

t
o

第5話 『釈迦堂 刑部という男』（後書き）

作者「ということで、釈迦堂戦前編でした」

暁「釈迦堂さんにこんな過去がねえー」

作者「ちなみに釈迦堂さんの双子のお姉さんは、原作じゃ死んでますが

こっちでは生きてます」

暁「へえー、うんじゃ、いつか出てくるのか？」

作者「はい、かなり後ですが、できますよ」

暁「ほへー」

作者「ということで、次回で釈迦堂さんとの死合の決着が付きます」

暁「それはいいけど、俺なんか口調荒っぽくなってないか？」

作者「それは問題ない。そういう設定だから」

暁「まじか……っっていうか設定言っな!!」

作者「ハッハッハ！細かい事は気にすんな（、*）dグツ！」

暁「あー、殴りてえ」

作者「さて、次回 第6話 『決着！そして現れた敵』でまた会

いましよう

では、私は暁に殴られそうなので逃げます、アデュー!!」

暁「あ、こら、待てえ!! おっと、じゃ、次回までまたな
待ちやがれのこの駄作者あゝ!!」

第6話 『決着！ そして現れた敵』（前書き）

暁 VS 釈迦堂の闘い、いよいよ決着の後編です。

第6話 『決着！　そして現れた敵』

釈迦堂

「なら、証明して見せやがれ！！」

暁

「ああ、言われるまでもねえ！！」

二人の氣が一気に高まる。

風間ファミリー達が見守る中、氣絶していた百代が目を覚ました。

百代

「……痛っつ！　……私は、はっ！！」

百代は、氣が付くと飛び起きる。

百代

「大和！　なんで、釈迦堂さんとアキラが死合ってるんだ！？」

百代は驚いた表情で大和に訊ねる。

大和

「あの釈迦堂って師範代が、師匠に死合おって誘ったのさ。
だから、師匠はそれに応じ、今の状況になってる」

百代は、その説明を聞くと試合場で繰り広げられている死闘に

目をやった。

試合場では激しい技と技のぶつかり合いが起こってた。

釈迦堂

「はあああああ！！！！ リングううう！！！！」

8枚の光のチャクラム状の光弾が、暁を全方向から襲ってくる。

暁

「チィ！！ 天錠式神飛散弾！！」

ソフトボール位に圧縮した氣弾が破裂し、様々な方向へ飛び散っていく。

しかし、8枚のリングは、その飛び散った小さな氣弾を躲し、

暁の身体を切り刻んで行く！！

ザッシュ……！！ ザッシュ……！！

暁

「くっ！」

暁は、痛みに顔をしかめさせる。

釈迦堂

「そらそらあ、どうした！！ さっき言ったのはでまかせかあ！！」

釈迦堂は、笑いながら、8枚のリングを意のままに操り、直も暁の

身体を切り刻んで行く。

暁

「はあゝ……………調子に乗るなよ」

暁はため息を吐き殺気を込めた声でそう言い放った。

ゾクッ！！！！

釈迦堂の背中に悪寒が走る。

暁

「はあああああ……………」

暁は、息を吐き出しながら、両手に氣を集中させた。

そして、光速の速さで飛んでいるリングそれを上回る速さで掴んだ。

釈迦堂

「な、何イイイイ！！！！リングを掴んだだと！！！」

そして暁は、リングを粉々に握りつぶした。

粉々になったリングはゆっくりと消えていく……………。

暁は、全身の氣を活性化させ、暁の身体あった傷がみるみる治っていく。

釈迦堂

「瞬間回復だと……………！？」

瞬間回復とは、武術を極めた者だけが使用できる奥義の一つ。

細胞などを氣で活性化させいかな攻撃を受けても即時に自動回復するという

ある意味バグ技である。

百代は、驚いていた自分と同じくらいの少年が、自分の遙か先にある武の境地に辿り着いていることに……。

百代は啞然としていたが、すぐに笑い、

百代

「ハハ！！面白いぞアキラ！ 私は自分が強いと思っていたが、
まだまだだったようだ！」

本当にうれしそうに百代はそう言った。

それを聞いていた釈迦堂もふつと笑い

釈迦堂

「ああ……、俺は天才だと思っていたが、どうやら間違いだったようだ……」

釈迦堂はどこか虚しそうに言った。

そして、表情を変え、物凄い殺気を込めた目で暁を睨みつける。

釈迦堂

「認めてやるよ！ 天錠 暁！ 最高の敵としてなあ！！」

そついうと釈迦堂は、全身の氣を左拳に集中していく。

暁

「悪いけど、もうあんたの攻撃は受けない」

その瞬間、暁の全身の氣が一気に上昇し、暁の背後に何やら巨大な人型が現れる。

鉄心

「なんじゃ、あれは！」

暁

「顕現の壱、阿修羅！！」

そついうと、暁の背後にいる巨大な物体が姿を変え、6本3対に顔が3面の鬼神が現れる。

釈迦堂

「な……な……！！」

釈迦堂は驚いて身動きができない。

暁

「はあああああ！！ オラオラオラオラオラオラオラオラ
！！！！」

阿修羅は、J O J Oのあるスタンドよろしく嵐のような拳の連打を

釈迦堂に浴びせる。

釈迦堂

「へぶ……！ あふ……！」「ふうふううう……！」

釈迦堂は、凄まじい連打により、すでにボロボロだった。

暁

「これで終わりだ……！」

そう言って、釈迦堂の腹に強烈な一撃を喰らわした。

釈迦堂

「ぐはあああああ……！」

釈迦堂の口から大量の血が吐き出される。

そして、釈迦堂は仰向けで地面に倒れた。

鉄心

「釈迦堂お……！」

鉄心は、釈迦堂に駆け寄った。

釈迦堂

「ちい…… 全身が痛くて動けねえ……！」

釈迦堂は、意識を失っていなかったが、もう闘える状態ではなかった。

それを見て、鉄心が

鉄心

「釈迦堂、戦闘不能により、勝者、天錠 暁！」

そう高らかにその場で暁の勝利を宣言した。

その後、暁が、治癒巧で、釈迦堂の傷を治し、ついでに百代の怪我を治した。

ルー

「まさか、内氣功も使えるとハ、君は一体何者だい？」

暁は、その問いに顔を掻きながら、

暁

「ただ単に色々知ってるだけの小学生ですよ」

釈迦堂

「ケツ、その小学生に負けた俺らって一体、なあ、百代？」

百代

「そうですね、釈迦堂さん」

そういつて、いじけている二人は暁とじっと見た。

暁

「あは……アハアハ……」

暁は、顔を引き攣り愛想笑いをする。

鉄心

「一つ聞いても良いかのう、暁君」

鉄心が真面目な顔で訊ねる。

暁

「はい、なんでしよう？」

鉄心

「君の信念とはなんじゃ？」

暁

「俺は、目に映った人達や大切な人達、そしてセカイを護りたい」

鉄心

「ほほおゝ、全てを護る道かあゝ……それは、生半可な道ではないぞ」

鉄心が真面目な顔をして言った。

暁

「ええ、分かってます、でもコレが俺の貫きたい信念ですから……他人にどう思われようとこれだけは譲れません」

そついつて、真剣な目で鉄心を見つめる。

鉄心も暁の本気を感じたようで、

鉄心

「なるほどのう、でもセカイとは？」

そう訊ねると

暁

「あーいう輩からです……姿を現せ！」

そう、誰もいない方向に暁が叫ぶと、

いきなり白いコートに黒いシャツを着たガラの悪い黒髪の男が現れた。

?????

「へえ、やるじゃねーか。俺の気配に気づくなんてよお！」

男は邪悪な笑みを浮かべながらこちらを見てそう言った。

暁

「あんだけ殺気出してたら分かるだろう、普通」

暁は呆れた感じでそう言った。

?????

「ハッ、確かにワザと殺気を出した」

男は悪びれる様子もなくそう踏ん返り返って言った。

暁

「お前、一体何者だ？」

暁は、男の只ならぬ気配を感じ、呆れた表情から険しい表情に変わり男に訊ねる。

男は自分の名前を獰猛な笑みを浮かべたまま言った。

?????

「俺の名は、マンモン＝グリード。ネガ・マリスより生まれし、【強欲】の使徒さ!!」

e c o n t i n u e d

t o b

第6話 『決着！　そして現れた敵』（後書き）

作者「釈迦堂との戦いの決着付きました」

暁「それはいいが、とうとう敵が現れたな」

作者「はい」

暁「ちなみに敵の彼のモチーフは、神咒神威神楽の凶月　刑士郎だ」

作者「まあ、誰？と思った人は検索すればできます」

暁「c v イメージは、谷山　紀章さん、とあるの魔術のステイル役の人だ」

作者「という事で、次回、第7話　『強欲の使徒襲来』でまた会いましょう」

暁「では、またなあ」

第7話 『強欲の使徒襲来』（前書き）

とうとう現れたネガ・マリスの使徒。続きをご覧ください。

第7話 『強欲の使徒襲来』

マンモン

「俺の名は、マンモン」グリード！ ネガ・マリスより生まれし、
【強欲】の使徒さ！！」

マンモンと名乗った男は、高らかにその名を言った。

暁

「……！ ネガ・マリスだと！？」

暁は、驚いている。

マンモン

「その名を知っているという事は、お前……【神の代行^{エージェント}者】か」

マンモンは、険しい表情になり暁を物凄い殺気の籠った眼で睨みつける。

暁

「……ああ」

暁は静かにその事を肯定し、拳を構える。

その様子にマンモンは苦笑して、

マンモン

「まあ待て、今日は争う気はない。今日は顔見せが目的だしな」

暁

「？　どういう事だ？」

暁は、納得いかない顔をしてマンモンにその真意を問う。

マンモン

「観た所、お前まだ代行者なりたてだろ？
そんなやつ倒しても面白みがない」

暁

「なっ！」

暁は、マンモンのその言葉に言葉を失う。

マンモン

「だが、このまま帰るのも癪なんでなあ、
面白いものを見せてやろう」

そういうとズボンのポケットから見た事のあるメダルを2枚取り出した。

暁

「それは、セルメダル！？」

マンモン

「へえ、これを知ってるのか、なら
これからやる事も分かるよな」

ニヤニヤしながらマンモンはそう言った。

暁

「ま、待って!!」

マンモン

「待たなえーよ! そら!!」

すると釈迦堂と百代の額にメダルを入れる穴が現れ、投げたメダルが入っていた。

釈迦堂

「な、なんだ!？」

百代

「これは……!!」

釈迦堂と百代からヤミーという怪人が出てきた。

一子

「キヤアアアアア……!!!!」

一子が恐怖のあまり叫ぶ。

大和

「あれは一体……」

大和は動揺している。

卓也

「か、怪人だ!!」

岳人

「オイオイ、まじかよお!!」

モロとガクトも驚いている。

翔一

「すげー！ 初めて怪人を見たぜ！」

キャップだけ目を輝かせ興奮している。

ルー

「アイヤー!! 化け物ネー」

鉄心

「物の怪か!？」

鉄心達も驚いている。

出てきた2体のヤミーは、脱皮のように外皮がはずれ、

それぞれ、釈迦堂から出てきたヤミーは、ウルフヤミー（以降、ウルフY）に

百代から出てきたヤミーは、タイガーヤミー（以降、タイガーY）へと姿を変えた。

マンモン

「ハッハッハ!! 気にいつてくれたかい？ 俺のプレゼント達は」

暁

「貴様あああ……！」

暁は、怒りを顔にしマンモンに向かっていく。

しかし、マンモンの前に先程の2体が行く手を阻む。

TY

「ここから先は通さん……！」

WY

「マンモン様には指一本たりとも触れさせん……！」

そう言つて、2体は構えた。

暁

「邪魔だ、どけええ……！」

マンモン

「じゃ、後は任せた。俺はこれで失礼させてもらっぜ、何しろ準備がまだでな」

暁

「準備だと……！」

マンモン

「まあ、生きてたら次は相手をしてやるぜ、じゃーな……！」

そういつて、マンモンは一瞬にして姿を消した。

暁

「チィ、逃げられたか、厄介なやつら置いていきやがって!!」

暁は悔しそうにそうぼやいた。

釈迦堂

「暁！ そいつらは一体何なんだ？」

暁

「こいつらは、ヤミー。人の欲望を具現化した化け物です」

百代

「人の欲望を具現化だと？」

そついうとタイガーYが、口を開いた。

タイガーY

「左様、お主たちの強い奴と戦いたいという欲望から我らは生まれた……」

ウルフY

「ああ、その通りだ。俺達は、お前達より強い奴らを全員ぶち殺す!!」

百代

「それは違う!! 私には強い奴と戦いたい、殺すなど考えていない!!」

釈迦堂

「たしかに強い奴と戦いてえ、だがな、それはお前らがやることじゃね!!」

引つこんでろ！！ あとな！ 強い奴を全員ぶち殺す？
そんな面白くないこと誰がやるかボケえ！！」

暁

「あいつらに何を言っても無駄ですよ、二人とも。

あいつらは、たしかに生まれた人間の欲望からできているが、
その人の欲望を間違った形でやろうとするそういうやつらですか
ら」

それを聞いて、釈迦堂と百代は、2体のヤミーを睨みつける。

百代

「私も戦うぞ、アキラ！！」

釈迦堂

「俺も戦うぜ、こいつが俺からでてきたなんて胸クソ悪いからな
！！」

暁

「うんじゃ、3人で行きますか！！」

釈迦堂・百代

「おう！」

そついうと百代は、タイガー＼へ釈迦堂は、ウルフ＼へ飛びかかった。

百代

「はあああああ！！ 川神流・無双正拳突きいい！！！！！！」

百代の渾身の一撃がタイガーＹに襲いかかる。

釈迦堂

「オラああああ！！ 川神流禁じ手・富士砕きいいいい！！！！！！」

釈迦堂の全てを破壊する必殺の一撃がウルフＹを捉える。

……が、しかし、

タイガーＹ

「フン！！ 川神流・無双正拳突き！！」

ウルフＹ

「ハッ！！ 川神流禁じ手・富士砕き！！」

釈迦堂・百代

「！！！！」

2体は、百代達が放った同じ技で返してきたのだ。

お互いの拳と拳がぶつかり合い、凄まじい旋風が起こる！！

百代

「ぐぐぐ……！！！！」

釈迦堂

「く……！！！！」

お互いに一步も譲らない感じだったが、

タイガーY

「ふん！！」

ウルフY

「ハッ！！」

ヤミー達のほうが威力が上だったようで、二人は吹っ飛ばされ、壁に激突した。

百代

「がつ！！」

釈迦堂

「ぐはぁ！！」

暁

「釈迦堂さん！ 百代さん！！」

暁は全身の氣を爆発させ、一瞬にしてヤミー達との距離を詰めた。

暁

「喰らえ！！ 荒れ狂う殺劇の宴！ 殺劇舞荒拳！！！」

ヤミー達にまるで激しい舞を踊っているかの如く、暁が攻撃する。

下段回し蹴りから始まり、パンチ、蹴り、掌底破、飛燕連脚、飛び込み蹴り、

アッパー、サマーソルトと最後にアッパーを決めた。

タイガーY

「ぐっ!!」

ウルフY

「くっ!!」

2体に全ての攻撃を当てたのにかわらず、

2体は倒れなかったむしろ、ダメージがない。

ウルフY

「それで終わりか？」

タイガーY

「話にならん」

そういうと2体の姿が消え、暁の全身に激痛が走る。

暁

「ぐわああああ!!!!」

2体は、暴風の如く、暁の身体に傷をつけてダメージを与えていく。

暁

「い、いいかげんにしろ!!」

暁はついに切れ、回し蹴りで2体を退けた。

暁

「はあ…… はあ…… 仕方ねえ、ヤミーが相手ならこれだー!」

そういつて、左腕を横に突き出す。

暁

「create!! 我、望みしは欲望の怪物を倒す者のベルト!!
現れ出でよ! オーズドライバー!!」

すると左手に3枚のメダルを入れるくぼみが付いた銀色のベルトが
現れる。

タイガーY

「それは、まさか!？」

ウルフY

「オーズドライバーだと!？」

暁は、動揺している2体を見て笑みを浮かべ、オーズドライバーを
腰に巻きつけた。

暁のポケットからは、赤・黄・緑のコアメダルがでてくる。

暁

「それじゃ、変身!!」

カシャッ! カシャッ! カシャッ!

暁は、三枚のコアメダルをベルトにセットし、

オーズドライバー中央の部分を斜めにずらし、オースキャナーをス

ライドさせる。

カシャッ！ ドゥーン ドゥーン ドゥーン ティントゥントゥン！

ドライバー

「タカ！ トラ！ バッタ！」

シャリン！ シャリン！ シャリン！

暁の周りを赤・黄・緑のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「タトバ ♪ タトバ ♪ タトバ！」

ピカリン！ キャシーン！

暁の全身は、3色怪人に変化していた。

それだけではなく、背も成人男性の身長の高さに変化している。

タイガー Y

「オーズだと！！！」

ウルフ Y

「バカなこのセカイにやつはいないはず！！！」

暁

「ああ、借り物だけどな、強さは本物だ！」

その姿を見て驚いた鉄心は暁に訊ねる。

鉄心

「暁君、お主は一体……」

暁

「俺は神の代行^{エージェント}者。セカイに害をなすものを排除せし者^{エージェント}つてところですかねえ」

暁は、笑ってそう言う。

暁

「さあ、ヤミー共、オーズが相手だ!!
かかってきやがれ!!」

ヤミー達と暁^{オーズ}の闘いが始まる……

continued……

t
o
b
e

第7話 『強欲の使徒襲来』（後書き）

暁「やつちまったな、駄作者」

作者「ええ、勢いでやつちまりました……
でも後悔はしない!!」

暁「開き直るな!!」

スパーン!!（作者が暁にハリセンでシバかれた音）

作者「何も叩く事無いでしょうが!!」

暁「なんで、オースなんだ!
あれか、グリード繋がりがこんちくしょう!!」

作者「ああ、そうだよ、こんちくしょう!!」

二人が取っ組み合いの喧嘩を始めた為、しばらくお待ちください

30分後経過――

作者「はあ、はあ」

暁「ぜえ……ぜえ……」

作者「とりあえず、次回予告を」

暁「ああ……ぜえ……ぜえ……」

作者「じ、次回、第8話『オーズ参上!! 語られた秘密』で
またお会いしましょう!! はあ、はあ」

暁「ぜえ…… またな」

第8話 『オーズ参上!! 語られた秘密』(前書き)

マンモンが置いていた2体のヤミー達に対抗する為暁は、仮面ライダーオーズになったのだが……

第8話 『オーズ参上！！ 語られた秘密』

ヤミー達とオーズになった暁が、闘おうとしたその時、
辺りの空間が歪み、一人の男が現れた。

??

「あれ、ここどこだ？ ってヤミー！？」

男は驚いている。

男の服装は民族衣装的な感じの服に癖っ毛のある髪型。

暁は、その特徴である人物を思い出した。

暁

「あなたは、火野 映司さん？」

男は、自分の名前を呼ばれ暁のほうを見る。

映司

「ええええええええええ！！ オーズがなんでここに！ というか俺変身してないし！」

映司は混乱している。

暁

「とりあえず、話は後です。先にヤミーを」

映司

「わかった。でも、オーズドライバーは壊れて無くなったし……」

映司は、真木博士との闘いでオーズドライバーと大切な相棒を失ったのだった。

暁

「なら、ちょっと待って下さいね」

暁は、襲いかかってくる2体のヤミーを蹴り飛ばし、映司にそう言った。

暁は、創造の力を使い、もうひとつオーズドライバーを出した。

暁

「映司さん!!」

そう言って、オーズドライバーを映司に投げる。

映司

「おおっと、これはオーズドライバーと3枚のコアメダル。 良し、これなら!」

そう言って、受け取ったオーズドライバーを腰に巻き、3枚のメダルをセットする。

カシャッ! ドウーン ドウーン ドウーン ティントウントウン!

オーズドライバー中央の部分を斜めにずらし、オースキャナーをスライドさせる。

ドライバー

「タカ！　トラ！　バツタ！」

シャリン！　シャリン！　シャリン！

映司の周りを赤・黄・緑のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「タトバ♪　タトバ♪　タトバ！」

ピカリン！　キャシーン！

映司は、仮面ライダーオーズへと変化した。

大和

「同じやつが二人！？」

大和達は驚いている。

その姿は、正に正義の味方だった。

タイガーY

「オーズが二人だと！？　ウルフY一気に片を着けるぞ！」

ウルフY

「おう！　行くぞオーズ共！！」

そういうとウルフは両腕でソニックブームをタイガーは、口から炎を吹いた。

しかし、二人のオーズは、その攻撃を交わし、

暁

「映司さん、俺は虎のやつを。もう一体の狼のほうはお願いします
！」

映司

「分かった！」

そういうと映司は、メダジャリバー（セルメダル満タン状態）を持ちウルフYに向かって行った。

暁

「俺は、コンボで一氣に！！」

そついうと赤と黄色のコアメダルを引き抜き、

足と同じ緑色のコアメダル2枚をセットし、スキャンさせる。

カシャッ！ ドウーン ドウーン ドウーン ティントウントウン！

ドライバー

「クワガタ！ カマキリ！ バッタ！」

暁の周りを緑色のエネルギー体のメダルが周り、

ドライバー

「ガッタガタガタキリバッ ガタキリバ！」

ジャキン！！

暁は、ガタキリバコンボになった。

暁

「ハッ！！」

暁が気合いを入れて声に出すと分身が15体現れる。

そして、オースキャナーでメダルをスキャンし、

ドライバー

「スキャニングチャージ！！」

15体の分身と共にタイガーY目掛けて一斉に跳び蹴りを叩き込んだ。

タイガーY

「がはあ！！」

タイガーYは、砕け散り、かなりの枚数のセルメダルになった。

映司

「コンボをも使えるなんて君は一体……。それはともかく俺もやるか！」

映司もオースキャナーでメダルをスキャンし、

ドライバー

「スキャニングチャージ！！」

映司はメダジャリバーを構え、空間もろともウルフYを一刀両断した。

ウルフY

「な、何だと……」

ウルフYは爆発し大量のセルメダルに戻った。

こうして、二人のオーズは、ヤミー達を撃退したのだった。

鉄心

「暁君、お主はいったい何者だ？」

暁を問いかける。

暁

「（さて、どういいわけしても納得してもらえないが……）」

正直に話すかごまかすかで悩んでいると

ルカ

「（話していいですよ）」

暁

「（ル、ルカさん！？ いいの？）」

ルカ

「（はい、かまいませんよ。ネガ・マリスの使徒がでてきたからには、

仲間は多いほうがいいですから）」

暁

「はあ、お話します。実は……」

それから鉄心達に自分の正体と目的とあの化け物と

その背後にいる敵の事もそこにいる全員に話した。

鉄心

「なるほどのう、神の代行者か……あの化け物を見なければ信じられなかったのう」

暁

「それが普通の反応だと思いますよ」

翔一

「本当の正義の味方か……すげえ!!」

翔一は目をキラキラさせて興奮してる。

大和

「師匠はやはりすごい人だったんだ、うんうん!」

大和は、自分が師事をお願いした人がやはりすごいと分かったので嬉しそうだ。

一子

「暁は、凄いだね」

ワン子は素直に感心している。

岳人

「やはり師匠はすごいぜ!!」

こちら也大和同様うれしそうだ。

卓也

「本当に暁は驚かせてくれるね、アハハ」

卓也は笑っている。

百代

「強いのも納得だな、また試合しような!!」

百代もいい対戦相手が見つかって嬉しそうだ。

釈迦堂

「たしかにおもしろいガキだよ、おまえは、ハッハッハ!」

釈迦堂も歳の離れた強敵ライバルの出現に嬉しそうだ。

ルー

「私も精進せねばネエ」

ルーは、決意も新たにがんばるようだ。

暁はその様子を見て

暁

「キヤップ、それは違う。俺は正義の味方じゃない。

俺は、大切な人達やその周りの人達それとセカイを
ただ護りたいだけなんだ」

暁のその言葉に全員思ってしまった。

じゃ、お前は誰が護るんだ？つと

翔一

「よし！ お前は俺が……いや、俺達が護ってやる！！」

暁

「え？」

鉄心

「つむ、俺もお前を護ってやる」

ル一

「頼りないかもしれないが、ワタシも」

釈迦堂

「ケツ！ 闘う相手がなくなるのも癪だし、護ってやるよおまえ
をよ！」

釈迦堂は、ぶっきらぼうにそう言った。

暁

「皆、ありがとう……」

映司

「（なるほど、この子も前の俺と同じかも知れないな）」

映司は思い出していた昔の自分を……

そして、大切な相棒を……

すると映司のズボンのポケットから赤い光が漏れている。

映司

「これは……」

ポケットに手をつ込み、中の物を出してみると半分ずつに割れた赤いコアメダルが光っている。

光は激しくなり、強い光でその場にいた全員が目を瞑った。

5分後—— 光が収まり、目を開けると割れていた赤いコアメダルは元通りになっていた。

映司

「え？」

すると映司のポケットに入っていた別の赤いコアメダルと暁が持っていた赤いコアメダルが、

先程の大量のセルメダルの上に飛んで行き、最後に手に持っていたコアメダルがその場所に

飛んでいくと、セルメダルが宙に上がり、人の形を作り始めた。

映司

「ま、まさか……」

するとコアメダル3枚を中心に人の形をしたセルメダルの集合体は、
ガラの悪い金髪の青年へと姿を変えた。

映司

「アंक！！」

それは映司にとって最高の相棒の姿だった。

アंक

「……ん？　ここ、どこだ？」

アंकは辺りを見回すと映司の姿を発見する。

アंक

「映司！　ここはどこだ、説明しろ？」

そのいつもと変わらない口調でアंकはそう言つと

映司

「相変わらずだな、アंक」

映司は嬉しそうにまたは呆れたようにアंकに答えた。

それからアंकに今までの経緯を説明すると

アंक

「何？ 俺達以外のグリードだと？」

暁

「正確に言えば、違うもんなんですけどね」

アंक

「あん？ お前誰だ？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁。よろしくお願いします。グリードのアंकさん」

そういつと鉄心達川神院勢が構える。

アंक

「……なぜ、それを知っている？」

アंकが苛立ったようにそう暁に問いかける。

暁

「俺が、神の代行者だからです」

アंक

「なんだと！！ 神の代行者だと！！」

映司

「あ、アंक知ってるの？ 神の代行者の事」

アंक

「ああ、俺達が生まれる数千年前にはいたからな」

アंकは苦虫を噛みしめたみたいな顔でそう言った。

暁

「まあ、俺は最近なつたばかりなんですけどね」

映司

「そういえば、オーズになっている時、背伸びてなかった？」

当然の疑問である。

暁の今の姿はどう見ても小学生だからだ。

暁

「それはですね……」

暁は、映司に小さな声で耳打ちした。

映司

「なるほど」

百代

「なんで、そこだけ耳打ちなんだ？」

暁

「それは大人の都合上の問題です」

百代

「？」

百代はその答えに首を傾げた。

暁

「とりあえず、説明は以上かな」

??

「ちょっと待って下さい」

全員がその謎の声に辺りを見回す。

すると全員の集まっている中央に突然、綺麗な女性が現れる。

暁

「ル、ル力さん？」

ル力

「お久しぶりねえ、暁君」

鉄心

「この綺麗な女性は誰かのう？」

ル力

「いやですわ、綺麗だなんて」

そういうとル力は、いやんいやんといった感じで体をくねらせ恥ずかしがる。

暁

「え〜と……俺に力と目的をくれた依頼主^{クライアント}、皆で言うところの【神様です】」

・
・
・
・
・

！

暁を除く全員

「ええ〜〜〜！！！！！！」

卓也

「神様ってあの？」

暁

「そうあの神様」

ルカ

「正確には、第1級多世界管理者ルカⅡツヴァイトⅡルミナスと言います。」

気軽にルカと呼んでね」

暁以外の全員は啞然としている。

映司

「！　ということは、アंकを復活させたのって……」

ルカ

「はい、私です！」

アंक

「何iiiiiiii!!!!!!」

復活した本人が一番驚いている。

映司

「なぜ、アंकを復活させたんですか？」

ルカ

「それはですね、あなた達のセカイに今危機が訪れようとしています！」

映司・アंक

「！」

ルカ

「その為に映司さんをこのセカイに連れてきました」

映司

「何で…… ハッ！」

どうやら映司は、ルカの思惑を理解したようだ。

ルカ

「ええ、お気づきの通りです」

新しいオーズドライバーの受け渡しとアंकの復活、それが今回の目的のようだ。

ルカ

「ではさっそくですが、お二人とも元のセカイに戻しましょう」

ルカがそう告げると映司が

映司

「あ、ちよつと暁君に一言いいですか？」

ルカ

「はい（ニコッ）」

暁

「なんですか？ 映司さん」

映司

「暁君、何でもかんでも一人で背負い込むなよ」

暁

「え……」

映司

「君の周りには頼れる仲間がいるだろ？」

そう言うと映司は笑顔になる。

暁は、その笑顔と言葉を理解し、

暁

「はい！」

暁は元気にそう答えた。

ルカ

「それでは参りましょう」

映司

「はい！」

アंक

「チッ！ 仕方がねえ」

映司は元気な声で、アंकは仕方なさそうにそう言い、

ルカ

「では、皆さんごきげんよう」

映司

「暁君、何か困った事があればすぐこっちに来るから！」

暁

「はい！」

そういつて、三人は一瞬のうちに消えた。

inued.....

t o b e c o n t

第8話 『オーズ参上！！ 語られた秘密』（後書き）

暁「とりあえず、本人達でできたな」

作者「はい……」

暁「まあ、今後と言っても高校生編で又出てくるしね」

作者「ってネタバレダメでしょ！！」

暁「べつにいいじゃないか。減るもんじゃないし」

作者「そうはいつでもねー」

暁「あー、うるさい」

作者「うわー、自分でやった癖に逆切れですか」

暁「それは置いといて次回予告しないといけないんじゃないのか？」

作者「ぐっ、いつか酷い目にあわす。

ということで次回 第9話『京と小雪 二人の少女』（京編）
』で

また会いましょう！」

暁「うんじゃ、またな」

第9話 『京と小雪 二人の少女』（京編）『（前書き）』

という事で、京加入の話です。どうぞ

12 / 5 若干修正致しました。

第9話 『京と小雪 二人の少女（京編）』

あのヤミーとの闘いから数日後、

俺達はいつもの空き地に集まっていた。

翔一

「でも、暁。まさかお前があんなことではな—」

大和

「師匠、一つ聞きたんだけど？」

暁

「なんだ？」

大和

「師匠の色々物を出すやつ。あれって一体」

暁

「ああ、あれはな、創造の力だ」

岳人

「創造の力？」

ガクトが首を傾げる。

暁

「俺の頭の中には、ル力さんが管理している全てのセカイの知識と技術が詰め込まれているんで

大抵の物は作れるぞ。武器とか防具とか色々」

卓也

「す、すごいんだね（汗）」

卓也は、少し驚きながらもそう言った。

大和

「知識と技術、それとあの凄まじい戦闘力。師匠ってもしかしてバグキヤラ？」

暁

「ああ、否定はしないさ」

暁は、目を瞑りながらそう言った。

百代

「お前、本当に凄いんだな！！」

百代は笑いながらそう言った。

暁

「モモは、このまま修業していけば、瞬間回復もできるようになるぞ」

百代

「本当か！！ そいつは楽しみだ！」

なぜ、暁が百代を【モモ】と呼んでいるかというと

この前の鬪いの後、百代から

百代

「私の事は、百代さんじゃなくモモでいい」

と言われたからだ。

それとなぜかモモが最近俺を見る度に頬を赤くしているのは気のせいだろうか。

そんなやりとりをファミリーの面々していると

離れた場所から風間ファミリーを見ている少女が一人……

椎名 京である。

暁は、視線を感じ京のほうを向いた。

京

「！」

京は、暁と視線が合うと走り去って行った。

暁

「あの子は一体……」

大和

「どうしたの？ 師匠」

大和が訊ねると

暁

「ああ、さっきこつちを見ていた青い髪の女の子なんだけど」

岳人

「あー、椎名の事が……。あいつは止めておいた方がいいぜ」

ガクトが真剣な顔になってそう言った。

暁

「それはどういう事だ？」

ガクト

「そ、それは……」

ガクトは、ばつの悪そうな顔をしている。

暁

「いいから理由を言え」

暁は、何か感じ取ったのだろう。ガクトに詰め寄る。

大和

「ちよつと師匠！俺が説明するから！」

大和は、ガクトに詰め寄る暁をあわてて止める。

それから大和からあの少女の話を聞いた。

少女の名前は、椎名 京

風間ファミリーと同じ小学校に通っている。

京の母親は元来の男好きで、いろんな男性と

関係を持っているらしい。

それと京は、かなりおとなしい子のようにだ。

いつも教室で本を読んでいる。

無口で暗い性格で周りから不気味がられている。

その2つの要因ですつといじめを受けているらしい。

暁

「そんな事が……」

ガクト

「責めないのか？」

暁

「ガクトは、ワン子や他の仲間が虐めの対象である
あの子を助けて、そのいじめがファミリー全員に
及ぶかもしれないと思ったんだろ？
なら、責めはしないさ」

ガクトはそれを聞いて、ホッとしている。

暁はそう言った後、険しい表情になり、

暁

「しかし、親は親、子は子なんだがな……」

子供は残酷だ。

自分より弱い者を見つけると

自分が優位に立ちたい為、その者をいじめる。

虐めている本人はこれっぽちもなんの罪悪感を感じない。

かなり迷惑な存在だ。

後、それを見て見ぬ振りをする大人ってどうなんだ？

これは、やるしかないかな。

暁は、何か思いついたようで邪悪な笑みを浮かべた。

それを見ていた仲間達は、ガクガクと震えるのであった。

数日後、

大和のクラスの転校生がやってきた。

その人物とは……

暁

「川神城徳学園から転校してきました天錠 暁です、よろしくおね

がいます」

そう言って、お辞儀をした。

大和を除いてクラス全員が、暁に目を奪われた。

先生

「じゃ、何か質問ある人、挙手！」

クラスから手が挙がるが、暁は、先生を右手で制して、

暁

「一つクラス全員に言っていていいでしょうか？」

先生は、そう言われて戸惑っている。

先生

「どうぞ」

暁

「では、俺は虐めが嫌いだ、このクラスや他のクラスはたまた違う学年が、ある子を虐めてるそうですね」

それを聞いてクラス全員と先生は、黙ってしまった。

暁は続けて言う

暁

「親は関係ないだろ、親は。お前達は、下らない事でその子を虐めているようだが、はっきり言って

そんなお前達が哀れでならない。

だってそうだろう？

そう言う事でしか優位に立てないんだから」

クスクスと暁は、大和と京の以外を蔑んだようにみる。

暁

「後、先生。あんたも大人なんだから虐めから生徒を助けてあげないとね。はっきり言って無能ですよあんた」

暁は、先生に軽蔑の目を向ける。

京と大和以外のクラスメイトと先生は、今のやつを聞いて

怒りの表情を浮かべている。

しかし、暁はそれを気にせずに

暁

「じゃ、実際、自分達が虐めを体験すればわかるのかな？」

先生

「な、何を」

暁

「幻夢光！」

そう言う手と手で円を作るように重ね、その間から強烈な光が、

クラス全体を包む。

その強烈な光にクラス全員が目を瞑った。

無論、大和に事前に説明をし、幻夢光を使う前に京の目と塞ぎ、

大和も目を瞑っていたので、二人に関しては、この技は効いて

いない。

数秒後、京と大和を除くクラスメイト達及び先生の呻き声や叫び声が

教室中に響く。

京は、何が起こってるかわからなかった。

京

「……何これ？」

暁

「この技は、幻夢光。人に幻を見せる技さ。
はじめまして、椎名 京さん」

京

「……なんで、私の名前知ってるの？」

暁

「大和達から聞いた」

そう言って、暁は京を抱きしめる。

京

「な、何を……」

京は暁の行動に動揺している。

暁

「つらかっただろう？ 悲しかっただろう？ もう大丈夫だ。後は、俺や俺の仲間たちに任せろ！」

それを聞いて、京は

京

「なん……で？」

暁

「俺は、君と友達になりたいのさ」

そう言つて、京に微笑む

京

「ポッ／＼／ 私と……？」

暁

「ああ！」

そう言つと暁は京から離れ、京に手を差し出す。

京

「私……暗いし……面白くないし……一緒にいてもつまらないよ？」

それでもいいの？」

暁

「ああ！ 京と友達になりたい！」

満面の笑顔でそう言った。

ズキーン！！！！

あれ？ 今なんか撃ち抜かれた落としなかったか？

大和は、やれやれといった感じでそれを見ている。

そんな大和から京に視線を戻すと

潤んだ瞳に頬を赤くしてこれは……俺、惚れられた？

……まじか！！

今度は逆に俺が動揺した。

大和

「師匠、動揺するのはいいけど、そろそろクラスの皆や先生、解かなくいいの？」

暁

「あ」

技をかけて3分後の事だった。

暁は、技を解いたがどうやらかなりきつかったらしく、

クラスの雰囲気暗くかなり重かった。

それでも暁は、

暁

「どうだ？　自分がやった事が分かったか？」

そういつと技をかけられた全員がコクコクと頷いた。

暁

「二度と京をいじめるな！　今度虐めた場合は、
武力でお相手しよう」

そう言つて、寧猛な笑みを浮かべる。

先生・クラスメイト達

「ヒイヒイヒイ！！！」

みんなガクガクブルブル震えている。

暁

「そういえば、他のクラスとか他の学年のやつらも虐めてたんだっ
け……」

「うんじゃ、行くか」

暁が教室から出て行くこうすると

先生

「ど、どこへ？」

先生は、弱々しく暁聞いた。

暁はそれに満面の笑みで、

暁

「なぐに、軽いお灸をね」

そう言つて、教室から出た。

それから小学校の色々な場所から多くの叫び声が学校全体から消えた。

次の日、数多くのPTAの方々が怒りながら来られたが、

暁により全員心を折られた。

ということで、京の虐めはその日無くなり、暁には【川神小の大魔王】という二つ名が付いた。

京が虐められなくなった数日後、

俺と大和は、京を風間ファミリーの面々に紹介した。

一子

「あたし、岡本 一子、よろしくね!」

ワン子が元気に自己紹介をする。

翔一

「俺の名前は、風間 翔一。皆からキャップって言われてる、よろしくな!」

キャップは、満面の笑顔で自己紹介する。

ガクト

「俺様は、島津 岳人だ。師匠の弟子2号だ、まあーよろしくな!」

ガクトはポーズを取り、自己紹介する。

卓也

「僕は、師岡 卓也。よろしくね」

モロは、笑顔で自己紹介する。

百代

「川神 百代だ。よろしくな」

百代は凛々しく自己紹介する。

大和

「改めて俺は、直江 大和。師匠の弟子1号だ。このファミリーの中じゃ、

知力担当だ。よろしく！」

大和は、自信満々に自己紹介した。

そして最後に

京

「椎名 京です……。好きな物は読書と辛い物。よろしくお願いします……」

そう言っで、緊張しながらも皆に頭を下げた。

こうして、椎名 京は風間ファミリーの一員になった。

所変わってそれをかなり離れた所から見つめている少女が一人……

この子との出会いが、また新たな仲間ができるきっかけになるとは

風間ファミリーの面々はまだ知る由もなかった。

continued……

to be

第9話 『京と小雪 二人の少女（京編）』（後書き）

作者「ということで、京加入しました」

暁「パチパチパチ！！！」

作者「前作で京加入のとはかなり悩んだんで、今回こんな感じにしてみました」

暁「それはいいが、京のこの時の心情とかのやつは？ 前はあったら？」

作者「それは、後ほど外伝でやろうと思ってます」

暁「なるほど、で、次回は？」

作者「はい、不思議少女小雪ちゃんの登場です。では次回、

第10話『京と小雪 二人の少女（小雪編）』でまたお会いしましょう！」

暁「次回までまたな」

第10話 『京と小雪 二人の少女』（小雪編）（前書き）

不思議少女小雪ちゃん登場です。それではどうぞ

第10話 『京と小雪 二人の少女（小雪編）』

少女は、母親と暮らしていた。

父親は最初から一緒に住んでいなかった。

母親は、育児に疲れてしまい、そのストレスから

少女に暴力を奮っていた。俗に言う虐待だ。

少女の身体には、無数の痣と傷跡、服は薄汚れていた。

どうやらずっと同じ物を着ているようだった。

そのせいか、少女は周りから悪質な虐めを受けていた。

少女には、友達が一人もいなかった。

——少女side

今日も私は、隣町の空き地へ向かう。

その空き地には、いつも楽しそうに遊んでる私と同じくらいのグループがいる。

ボクは、その子達と友達になるべく、大好きなマシユマロを

いっぱい持って、あの子達にあげるんだ！

そうすればボクにも友達ができるよね？

母親に虐待を受け、周りからは虐められそれでも直、

希望を持って前進む少女のささやかな願い。

少女は希望に満ちあふれ表情で空き地へと走っていくのだった。

—— 少女 s i d e o u t

少女は空き地へ到着すると

目的のグループのメンバーの男の子に声をかけた。

少女

「……あ、あの」

大和

「ん？」

大和は少女に話しかけられ、振り向いた。

話しかけられた少女を大和はさりげなく観察すると、

この辺では見かけない少女だった。

大和

「（隣町から来たのだろうか？）」

服は汚れ、体は痩せ細り無数の痣や傷跡が見られた。

大和

「（虐め……いやもしかして虐待にあってるのか？）」

大和は途中からマジマジ少女を凝視してしまった為、少女は、

少女

「何かボクについてる？」

不思議そうに大和に近寄って顔を見る。

大和

「い、いや……／＼／」

顔も少し汚れているが、良く見るとかなり可愛い。

美少女に入る類の顔だ。

その顔でじいーと大和を見るものだから照れてしまった。

大和

「そ、それで何か用かな？」

大和は話題を変えようと少女にそう訊ねた。

少女

「ボ、ボクを仲間に入れてください!」

一生懸命さがわかる言葉だった。

大和は少し考え、

大和

「んー、俺一人が勝手に決めてもダメだから、メンバー全員に聞いてOKならいいよ。君はそれでいい?」

この作品の大和は、暁に調k y……もとい教育されている為、厨二病が治っております。

そう言うとき少女の顔がパーと明るくなった。

少女

「うん!」

少女は笑顔でそう言った。

大和

「俺は、直江 大和。君の名前は?」

大和が、少女の名前を訊ねると

少女

「柏木……柏木 小雪」

そう名乗った。

大和

「そっか、小雪か。よろしくな」

大和は笑顔でそう答えた。

小雪

「うん、よろしくね!」

少女は嬉しさのあまり、大和に抱きついてきた。

大和

「ちよっ!」

小雪

「っ」

慌てる大和にそんなことを気にしない小雪。

それを見た後から来たメンバー（特に岳人と百代）に冷やかされるのであった。

数分後、メンバー全員が集まり、

小雪をメンバーに入れるかどうか多数決をすることになった。

翔一

「俺は賛成！」

翔一は、大声でそう言った。

京

「賛成……」

どうやら小雪に同じ感覚をもつたらしく京は素直にそう言った。

一子

「私も賛成！」

ワン子は、表裏ない為、素直にそう元気に答えた。

百代

「私は賛成だ」

この頃からかわいい女の子が大好きなので百代はそう答えた。

卓也

「んー、僕は中立かな」

モロはどうやら賛成でも反対でもないらしくそう答えた。

岳人

「俺様は反対だ」

ガクトにそう言われて、小雪は大和の背に隠れる。

ガクトは、たぶん他の学校なので助けに行ける事が出来ないし、

小雪をいじめているやつに特にワン子やモロが虐められるのを

防ぐために反対と言ったのだろう。

大和

「俺は最初から賛成！ 師匠は？」

暁

「その前に大和、お前に聞きたい。小雪は他の学校だ。

虐められたとしてもすぐ助けに行けるわけじゃないんだぞ。

それどころか、小雪をいじめているやつからうちのメンバーに被害が

出るかもしれない。それでも小雪を仲間に入りたいか？」

一子

「どうしてそんな事を大和に言うの？ 暁！」

ワン子以外の他のメンバーは、暁が大和を試しているのだと感じた為、

口を出さないでくれた。

暁

「どうなんだ！ 大和！」

暁が語気を荒げて大和に問う。

大和

「俺は、小雪をファミリーの一員に迎えたい。でも、俺一人の力じ

やどうにもならない！

頼む皆、俺に力を貸してくれ！！」

大和は皆に土下座をして頼み込む。

暁はだまってそれを見て、ふと表情を柔らかくした。

暁

「フ、お前の真剣な言葉たしかに受け取った。皆はどうだ？」

翔一

「ああ、いいぜ！」

百代

「弟の頼みだ。当然だ！」

一子

「アタシも手伝っわ！」

卓也

「うん、何ができるか分からないけど力を貸すよ」

京

「私も手伝っよ」

他のメンバーは快く了承してくれた。

ガクトは頭を掻き篁り、

「あー！！ わかったよ。俺様も力を貸すぜ！」

そうぶつきらばうにいった。

大和

「みんな……ありがとう……」

大和が仲間達のその言葉に涙ぐんでいる。

すると小雪は心配そうに

小雪

「大和、大丈夫？」

大和は、服の袖で涙を拭き、

大和

「ああ、大丈夫だ！　小雪、君の話を聞かせてくれないか？」

小雪

「うん……」

それから小雪に話を聞いた。

それは想像以上の事だった。

暁

「親が、育児放棄と虐待だと……」

暁は、そう言って、怒りの表情で指の関節が白くなるくらい強い力で拳を握る。

大和

「それと周りからの虐め……小雪はつらくなかったの？」

小雪

「最初はつらかったけど、今は虐められても笑ってると相手もそれ以上やってこないし、

お母さんもたまにだけのご飯くれるし……」

それを聞いて、小雪を京は優しく抱き寄せる。

京

「この子は私、暁達に助けてもらっ前の私。暁、お願い……この子を助けて……」

京は、涙を流しながらそう言った。

暁

「ああ、必ず助ける。どんな手を使っても」

大和

「ああ、小雪、俺達が必ず今の生活から救い出す」

小雪

「大和……」

暁はそれを見て、

暁

「いるんでしょ？ 来夏さん！」

シユタ!!

暁がそう言つと暁の背後に一瞬にしてメイドの南雲 来夏が現れた。

来夏

「お呼びでしょうか? 暁様」

暁

「さっきの話を聞いてたよね? すぐに動いてもらえる」

来夏

「かしこまりました」

来夏は暁に一礼し、瞬く間に消えた。

大和

「今のは?」

暁

「うちのメイドの来夏さん」

岳人

「凄いメイドさんだな」

とガクトや他のメンバーは驚いている。

暁

「とりあえず、小雪、今日はうちに泊まりな」

小雪

「……いいの？」

暁

「ああ、皆もうちに泊まり来るか？」

風間ファミリー

「うん、行く行く!!」

そう言つて、風間ファミリーの面々は暁の家に泊まる為、一度家に帰るのだった。

暁

「さて、証拠が出ればいいが……」

数日後、

来夏から小雪の家に関する調査報告書が届き、警察と川神児童相談所の職員と一緒に

小雪の家に行き、小雪の母は、育児放棄及び虐待の罪で逮捕された。

どうやら母親は今回の事で親権を剥奪されるかもしれないそうだ。

それ程、長期にわたって虐待をしていたらしい。

俺は、警察にかけあって、小雪の母親に会い、話をした。

どこか目は虚ろで精神的に参ってたようだ。

俺は、母親に一応小雪を引き取る事を話し、母親が元の優しい状態になれば

会わせる約束をした。すると小雪の母親は泣いていた。

やはり、虐待はしていても小雪にまだ情はあったようだ。

俺は、自分の両親に小雪を紹介し引き取りたいとお願いすると

あっさり承諾した。

母曰く、「桜華はまだ小さいから、この年頃の女の子がほしかったの」と言っ

喜んでいる。

それから養子縁組やら転校手続きなどをし、晴れて、

柏木 小雪は、天錠 小雪になった。

後日談だが、どうやら小雪は大和を好きになったらしく、

猛アタックしているらしい。

この先一体どうなる事やら。

be continued.....

to

第10話 『京と小雪 二人の少女（小雪編）』（後書き）

作者「という事で、小雪編でした」

暁「おい、かなり前作と話変わってないか？」

作者「だって、京はお前に惚れてるし、やっぱり大和にも相手いるでしょ？」

暁「京のやつは気のせいじゃなかったのか」

作者「にやり」

暁「はあゝ、まじかよゝ」

作者「大真剣だw」

暁は、手にバットを持ち、

暁「殺す!!」

作者「なんの！」

チャラチャッチャッチャッチャ♪

作者「神の手！」

作者の手は大きくなり、暁を押しつぶす！

暁

「ふぎや!!」

作者「作者を殺そうとするからだ！」

暁「ち、畜生……」

作者「さて、次回予告 次回、第11話 『ワン子 川神 一子になる』でお会いしましょう」

暁「作者いつか殺す!!」

第11話 『ワン子 川神 一子になる』(前書き)

ワン子が川神院に引き取られるお話です。

第11話 『ワン子 川神 一子になる』

それは、小雪が暁の義妹になってから数日後のことだった。

一子

「うう……う……うううう」

ワン子が泣いている。

卓也

「よしよし、皆いるから大丈夫だよ」

それを慰めるモロ。

なぜ、ワン子が悲しんでいるかというと

岳人

「ワン子の里親が死ん……だ。そうか……」

ワン子を引き取ってた里親の岡本のお婆さんが亡くなったのだ。

百代

「優しい人だったな。和菓子も良くもらった」

百代は、空を遠い目で見てそう言った。

大和

「俺も少し泣いた……しかし問題が出てきた」

大和がそう言う

暁

「ワン子の、行く先が無い」

一子

「うううう……」

暁

「子供がいない人が、ワン子を引き取ってという感じだったからな……」

暁

「親戚関係もほとんどいないらしい」

暁がそう言うとなんとも言えない空気になる。

卓也

「（そっか……元々孤児だもんね）」

岳人

「じゃあ、このままだとワン子はどうなる？」

ガクトがうるたえている。

京

「施設……かな」

京がぼつりとつぶやいた。

それを聞いてワン子

一子

「そんなの嫌よう、皆とはなれたくなあい……」

小雪

「アキ兄い……なんとかならないの？」

暁

「うむ……」

小雪が懇願するが、暁は考えているのか唸っている。

卓也

「親戚も1人ぐらいはいるでしょ！」

モロが叫ぶ。

大和は、言いだしにくそうに

大和

「……うん、1人、遠縁の男が1人いるみたいで
その人から家に来るかい？　と言われてんだよな」

暁が泣いてるワン子にそう訊ねると

一子

「うん……でも」

ワン子が言い淀む。

京

「でも？」

大和は、重々しく口を開いた。

大和

「今日の通夜の時にチラッと見たが、ヤバイ奴だ」

大和

「明日の告別式にも来る。

ちよつと皆でそいつを見てくれ」

大和がそう言つと

暁

「俺は、行くところあるんで少し遅れる。

モモ、ちよつといいか？」

暁は百代を呼んで小さな声で何か言っている。

百代

「な！……それは」

暁は、黙って頷く。

百代

「はあ、わかった、ジジイには話しておく」

暁

「ああ、明日伺うとついでに伝えといてくれ」

百代

「分かった……」

——そして次の日の告別式。

遠縁の男

「おう、どうだい一子、俺の所くるかい？
おめえ……随分可愛いし（ジロジロ）」

男は、酒に酔ってる感じで一子をいやらしい目で全身を見ている。

遠縁の男

「おめーみてーのが来るとせいかつ楽しいそうだがへへ。
家事もやつてもらいてーしなあ。
明日ぐらいまでに決めとけよ」ヒック

男は、下卑た笑いをしながらそう言った。

大和達は、遠縁の男を見て、こいつは駄目だ。と思った。

大和

「な、駄目だろ。死んだ魚の目をしているだろ」

翔一

「くわえて手の震え、ありゃあアル中だろ」

京

「うん……あれに渡したら駄目……」

小雪

「うん、ワン子が酷い目にあっちゃう!」

大和は嫌そうな顔をして、

大和

「それにしても、世の中ああいうのばかりだな」

岳人

「まったくな、何が壊れちまってる気がするぜ」

大和の意見に同意する。

大和

「ワン子みたいに純真なのは特に汚い存在から
狙われやすいのかもしれない。」

——だから護らないとな、みんなで」

大和がそう言うのと全員頷いた。

岳人

「ああ、なんとかしないとよ、具体的にどうする?」

大和

「それなんだが、どうやら師匠が動いてるらしい」

岳人

「師匠が？」

岳人は首を傾げる。

するとタイミング良く暁と百代が大和達と合流した。

暁

「待たせたな」

大和

「師匠、今まで一体何してたんだ」

大和がそう訊ねると

暁

「ああ、ワン子を救う方法が見つかった」

それを聞いて風間ファミリーの表情がパツと明るくなる。

大和

「その方法って？」

すると百代が一步前に出て、

百代

「それに関しては、私がいれば即時解決だ」

京

「？ どういう事？」

大和

「！ ちょっとまさか腕ずくとか言っんじゃないか？」

百代

「それはせん。 まあ見てる解決編に進むぞ」

—— という事で解決編。

百代

「川神院^{うち}に來ないか、ワン子」

それは突然の申し出だった。

一子

「—— え？」

ワン子は驚いている。

百代

「私は、お前を妹のように思っているし……」

百代

「いっそ、真の家族になろうじゃないか」

そう言つて、ワン子に手を差し出した。

一子

「お姉様……」

そんな百代をワン子は不安そうな顔で見上げ、

百代

「川神　一子となれ、ワン子」

一子

「……………いいの……………」

百代

「既に許可を取った。時々遊びに来てジジイの顔とか知ってるだろう？」

百代

「あの娘なら喜んで歓迎だそうだ！　他の奴等もな」

一子

「……………！」

一子

「あ、アタシ…………アタシは…………」

絶対、そうしたい！！！！

皆と一緒にいたいし！！！！

あんな不気味そうな人の所、行きたくないっ！！」

百代の申し出にワン子は一生懸命に答えた。

京

「……………うん」

京も静かに頷く。

一子
「い、いーんだよね？」

暁
「当たり前だ」

卓也
「聞かずに分かりなよ、それぐらい

翔一
「むしろ俺がリーダーとして命令してやろつか？」

小雪
「私もワン子と一緒にいい!!」

一子
「みんな……」

百代
「決まりだな。妹よ。お姉様と呼べ」

一子
「うう……ううう……う!!!!」

ワン子は涙ぐみ、そして

一子
「うわゝゝん!!!!」

大声で泣き始めた。

一子

「お姉様……お姉様、ありがとうっ！……！」

百代

「ああ。可愛妹が出来て私も嬉しいぞ。
あとアキラにもお礼を言っておけ」

一子

「……へ？」

百代

「こいつも私と一緒にジジイに頼み込んでくれたんだ」

暁

「それは言わない約束だろ」

暁は困ったような顔でそう言った。

一子

「暁……ありがとう」

ワン子は暁にお礼を言うと

暁

「よかったな、ワン子」

そう言って、ワン子の頭を優しく撫でた。

ワン子は目を細めて幸せそうだ。そして幸せそうなワン子は感極まり、

一子

「暁、大好き!!」

そう言って、ワン子は暁に抱きついた。

百代

「ム!」

京

「ムム!!」

百代と京は、暁を殺す勢いで睨んでいる。

暁

「あれ?　なんか後ろの方から2つの物凄い殺気が」

暁は、幸せそうなワン子に抱きつかれ冷や汗をかきながら後ろを向くのをためらった。

他のメンバーは、それをヤレヤレといった感じで見ている。

こうして、ワン子は川神　一子になった。

後日談だが、ワン子を引き取ろうとした遠縁の男は、俺と鉄爺2人で脅したら

もう二度と近づかないと言って逃げて行ったのだった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第11話 『ワン子 川神 一子になる』（後書き）

作者「ということで、川神 一子誕生物語でした」

作者「竜舌蘭の話を書くときに一応この話書いとかないとなんか繋がらないような気がしたので、

この話を書きました」

暁「それはいいが、百代と京から偉い目に遭わされたぞ」

作者「ワン子に好きって言われたやつに俺は同情なんかしない」

暁「それ書いたのお前だろ！！」

作者「……まあね、これでワン子もヒロイン候補ですよ、ケッケッケ」

暁「なんて邪悪な笑みをして笑ってやがる」

作者「まあ、それは置いといて、次回予告するかね」

暁「置いとくのかよ」

作者「次回 外伝その1 『あの時どう思ったのか？（京編）』でまたお会いしましょう」

暁「次回は外伝か、うんじゃ、またな」

外伝その？ 『あの時どう思ったのか？（京編）』 （前書き）

第9話の京視点の物語です。どうぞ

外伝その？ 『あの時どう思ったのか？（京編）』

今日も私は、あの空き地へ行く。

いつもあの空き地で遊んでいる同級生のグループを見る為だ。

そう、ただ見るだけ……

友達になりたいとかそういうのはあるけど、私には無理だ。

なぜなら私は、幼い頃から周りに虐めや蔑みの目で見られていたからだ。

なぜ、私がそう言う目に遭ってきたかという私の母親に原因がある。

母親は、元来の男好きだ。

男と肌を合わさないと落ち着かない困った体質だ。

その為、多くの男性と関係を持っている。

その為、両親ともに仲が悪い。

事あるごとに喧嘩の毎日だ。

それと母親の事が噂になり、

周囲からは、親達が口々に「あの子の親は淫売だ」

など言うものだから、その子供達が、私を虐めの標的にするのも速かった。

子供は残酷だ。

弱い者には容赦なく自分が優位に立ちたいが為に

虐めをするのだ。

それに私は口数も少なく、いつも本を呼んでいる為、

性格が暗いと思われてるようだ。

それを原因の一つになってるのだろう。

私は、虐められる事にある種の諦めがあった。

そんな事もあり、私には友達がない。

というか作れない。

もし、私の友達になれば、その子達も虐めの被害を受けるからだ。

だから、私は人の輪に入る事が怖かった。

空き地から少し離れた所に着くと私は、あのグループをいつものように眺めていた。

すると私の視線に気付いたのか一人の髪が肩まで伸びているカッコいい男の子がこちらの

方を向いた。

京

「（！ 目があつた！ まずい）」

私は、その男の子と目が合い、咄嗟にその場から逃げだしていた。これが私と暁の最初の出会い。

次の出会いは、その日から数日たったある日の事。

私が忘れられない大切な日。

私を暗闇から助け出してくれた記念日。

そう、暁が私のクラスに転校してきた日だ。

天錠君は自己紹介すると先生が質問タイムを始めようとしたときに先生を制して

天錠君の行動に私は驚かされた。

まず、彼は、自分が虐めが嫌いである事、

クラスメイトが私にしている虐めに対しての苦言。

そして先生へのバッシング。

それを聞いて他のクラスメイト達と先生は怒っていたようだが、

暁は、その後信じられないような事をした。

大和

「ちょっと目を瞑っててくれよ。椎名」

直江君が、そう私にいい、私も半信半疑だったので戸惑っていると

直江君が私の目を手で塞いで見えないようにした。

暁

「じゃ、実際、自分達が虐めを体験すればわかるのかな？」

そう言って、

暁

『幻夢光！』

天錠君は何をしたのだろうか？

その時点で私は、分からなかった。

すると私と直江君以外のクラスメイト達や先生の呻き声や叫び声が教室中に響いた。

直江君が手を外して目を開けるとその光景だったので

私は思わず、

京

「……………何これ？」

すると

天錠君は、私に近づいてきて

技の説明と私の名前を言った。

すると彼は、私を優しく抱きしめた。

私はその行動に動揺してしまった。

暁

「つらかっただろう？ 悲しかっただろう？ もう大丈夫だ。
後は、俺や俺の仲間に任せろ！」

それを聞いて私はなんでここまでしてくれるのか分からなかった。

そして天錠君は、微笑みながらこう言ったのだ。

暁

「俺は、君と友達になりたいのさ（キラン）」

綺麗な白い歯を光らせて、誰もが惚れる笑顔でそう言われた私は、

天錠君……………いや、暁に一目惚れしてしまった。

こうして、私を虐めから救い出し、友達を作ってくれた私の英雄と^{ヒーロー}

の出会いは、

正に私にとっては運命いや必然だったのかもしれない。

私は、いつかこの人のこの恩を返そう。

そしてこの人をどんな事があっても一生愛そうと心に決めたのだ
た。

b e c o n t i n u e d

t o

外伝その？ 『あの時どう思ったのか？（京編）』（後書き）

作者「ということで、京のあのときの心情の物語でした」

作者「9話書いてこの話言れるとかなり長くなるので、
今回は、外伝という形で書かせてもらいました」

作者「ということで、次回から又本編へと戻ります」

作者「それでは次回、第12話『2人の少年』でまたお会いしましょう」

第12話 『二人の少年』（前書き）

今回は、冬馬、源さんとの出会いです。

第12話 『二人の少年』

ワン子が川神院の養女になった数日後、

俺は、珍しく一人だった。

キャップは親父さんと冒険へ

ガクトは俺が紹介した軍隊式戦闘術の専門家の所へ

モロは、おじいさんのお世話

モモとワン子は、鉄爺と一緒に山へ修業に

大和は、両親と旅行。

京は、父親と父親の実家へ

小雪は両親と妹に会いにLAへ

俺は、散歩がてら隣町へ行くことにした。

理由はなんとなくだが、それが新しい2つの出会いがあるとは思ってなかった。

20分かけて隣町へ着きぶらぶらしていると曲がり角で誰かとぶつかった。

暁

「すまない、大丈夫か？」

俺はすぐ様ぶつかった相手に駆け寄り、手を差し伸べる。

ぶつかった相手を見ると同じくらいのメガネをかけた少年だった。

少年の肌は、浅黒く、すっきりした目元・口元それでいて知的に見える顔の作り

実際そうなのだろう。

少年

「ええ、大丈夫です（ニコッ）」

少年は微笑んで俺の手を握り立ちあがった。

暁

「怪我とかはないか？」

少年

「ええ、大丈夫です」

暁

「本当にすまなかった。じゃ、俺はこれで」

そう言つて、暁が立ち去ろうとすると

少年

「ここでぶつかったのも何かの縁、少しお話しませんか？（ニコッ）」

「

少年は、暁を呼びとめた。

暁

「ふむ、わかった」

暁はすぐに返事をした。実際、先を急ぐほど忙しくなかったから。

二人は、歩きながらお互いの事を話した。

少年の名前は葵　冬馬。

後に暁の友達になる少年である。

暁

「へえ、冬馬はあの病院の院長の息子なのか」

冬馬

「そう言う暁君こそ、天錠コンツェルンの総帥の息子じゃないか」

暁

「俺の場合は、父親が凄いだけさ。俺はまだまだだ」

そう言うて謙遜すると

冬馬

「僕も父が凄いだけで全然だよ」

冬馬もそう言うて謙遜した。

二人は、その後何気ない話をしながら歩いていると河川敷に着いた。

暁は、ふと疑問に思っていた事を口にした。

暁

「葵君、君はなぜそんなに悲しそうなんだい？」

冬馬

「！」

冬馬は、その言葉に驚いている。

冬馬

「な、なぜ、そんな事を思ったのですか？」

暁

「んー、父親の話をしている時に本当に一瞬だが、悲しそうな表情をしたんでね」

冬馬は、凶星を突かれ黙っている。

暁

「よかったら、話してくれないか？」

冬馬

「……え？」

暁

「もし、話してくれれば力になれるかもしれない」

暁がそう言つと冬馬は一瞬考えたが、

冬馬

「じ、実は――」

冬馬は淡々と話し始めた。

冬馬の家は、葵紋病院という川神で一二を争う大病院だ。

その院長つまり冬馬の父親と副院長が裏で、

医療ミスの揉み消し、臓器売買、医療機メーカーとの癒着などなど

かなり悪どい事をしているらしい。

冬馬が言い終わると暁は訊ねる。

暁

「冬馬はどうしたい？」

冬馬

「僕は……父さんに警察に自首してほしい。

だけど、証拠がない。それに子供だからと言って

警察は相手にしてくれない。

今の僕にはどうする事もできない――」

冬馬は、悔しそうに目に涙を浮かべ、拳をかなり強く握っている。

それを聞いた暁は、

暁

「冬馬の気持ちは分かった。あと一つ質問いいか？」

冬馬

「何でしょう……」

暁

「冬馬の父親が警察に捕まった場合、君は、犯罪者の子供という烙印を

世間から付けられるだろう。それでも父親の不正を正したいかい？」

暁は真剣な目で冬馬に答えを求める。

冬馬

「私は……世間から冷たく見られようとも人から非難されようとも私は、正しい道を歩きたい」

暁は、その言葉を聞き、ニイーと口の端を上げ、

暁

「分かった、力を貸そう」

そう言って、暁は冬馬に手を差し出した。

すると冬馬を呼ぶ声が、

？

「若」

一人の少年が冬馬を呼びながら近づいてくる。

暁

「それでは、時が来たら連絡する。それじゃまた」

そう言つて家の電話番号を冬馬に渡し、暁はその場から立ち去つていた。

？

「若、今の誰だ？」

冬馬を【若】と呼んだ少年が冬馬に訊ねると

冬馬

「協力者いえ——友達ですよ、最高の」

冬馬は、暁が去つていた方向を嬉しそうな表情をしてそう言った。

？

「？」

少年はその言葉に首を傾げている。

冬馬

「やはり、話しかけて良かった……」

少年に聞こえない声で冬馬は呟いた。

？

「なんか言つたか？ 若」

冬馬

「いえ、何も……では参りましょうか、準」

そう言つて、冬馬と準と呼ばれた少年は家に帰つて行つたのだつた。

それから数日後、葵紋病院の院長と副院長が、色々な罪で警察にかまつてた。

その裏である少年が、動いていた事を一部の関係者しか知らなかった。

こうして、葵紋病院の経営難となり潰れることになった。

冬馬達と母親達は、天錠家が裏で色々やり、普通に暮らせそうだが、しばらくは世間からの目が厳しいだろうけど、彼らなら大丈夫だろう。

暁は次の日も一人だつた。

まだみんな自分の用事で帰ってきてなかったり、手が離せなかったりしてたからだ。

今日は、繁華街に足を伸ばした。

ちょうど繁華街に入つてすぐの路地裏の横を通ろうとすると

ヤンキーA

「ふざけんなよ、ガキ!!」

ヤンキーのうるさい声が聞こえた。

暁は、その路地裏に向かい様子を見ると

一人の少年が、数人のヤンキーに囲まれて因縁をつけられていた。

ヤンキーB

「調子こくんじゃね〜ぞ、このクソガキ!!」

ヤンキーC

「ボッコボコにしてやるうか？」

少年

「ただぶつかっただけだろうが、ちゃんと謝ったる」

少年は、鋭い目つきでヤンキー達を睨み、ぶっきらぼつに言った。

少年を観察すると浅黒の肌に短めの髪型。鋭い眼光でぶっきらぼつな物の言い方。

以前、ワン子から聞いていたある人物の特徴とその少年の特徴が見事に合致した。

暁

「まさか、あれが……」

そう、あの少年こそが後に風間ファミリーの一員になる源 忠勝、
通称、源さんだ。

ヤンキーD

「お前、なんかムカつくんだよ!!」

そういうと持っていたバットで忠勝を殴ろうとした。

しかし、忠勝は相手の股間を蹴り、相手が悶絶して下を向いた瞬間、
頭を蹴り飛ばした。

ヤンキーDは、股間の強烈な痛みと頭を蹴り飛ばされ、意識を失い、
地面に倒れた。

ヤンキーB

「この野郎!! よくもやってくれたな」

そういうとチェーンを振り回し、忠勝に襲いかかった。

忠勝は、ヤンキーDが持っていたバットも持ち、チェーンをバット
で絡め捕り、

ヤンキーBをバットで殴った。

ヤンキーB

「グハッ!!」

ヤンキーBがやられた時に出来たわずかな隙に残りの全員のヤンキ
ーが襲いかかってきた。

忠勝

「チィ、数が多すぎる」

その瞬間、忠勝とヤンキー達の間に見知らぬ少年が現れる。

暁

「子供一人、大人数で。お前ら恥ずかしくないのか？」

少年は不敵に笑いながら、ヤンキー達を挑発する。

ヤンキーC

「お前は、誰だ？」

暁

「通りすがりのただの代行者^{エージェント}さ」

そついうと目にも止まらぬ速さでヤンキー達を拳で地面に沈めた。

忠勝

「強え……」

暁の圧倒的な強さに忠勝は驚いている。すると、

ヤンキーの一人が、

ヤンキーE

「こ、こいつもしかして川神小の魔王じゃねーか？

弟から聞いた事がある。あの川神院でも一目置かれるという」

すると違うヤンキーが

ヤンキーF

「小学生にして人類最強、あわわわ（汗）」

ヤンキー達は震えだした。

暁

「おい、あんたら復讐とか言ってこいつに因縁つけたら次は――」

そこまで言って、ヤンキー達は

ヤンキー達

「ヒイヒイヒイ！！！！もう二度と貴方様にもそちらのガキにも関わりません、すいませんでした」

そう言って、地面に倒れてる仲間を連れてヤンキー達はどこかへ逃げて行った。

ヤンキー達が去った後、

忠勝

「礼は言わねーぜ」

ぶっきらぼうに忠勝がそう言つと

暁

「別に礼がほしくて助けたわけじゃないさ、
一つ聞きたい事がある」

忠勝
「？」

暁
「岡本 一子って知ってるか？」

忠勝はその質問に

忠勝
「！　なんで、一子の事知ってるんだおまえ」

忠勝は驚いた顔で暁に訊ねる。

暁
「一子は、俺の友達なんだ、君は”タツちゃん”で合ってるかい？」

忠勝
「ああ、合ってるがその呼び名で呼ぶな！　俺の名前は源　忠勝だ」

暁
「なら、忠勝と呼ばせてもらおう」

忠勝
「ああ、かまわねえ、それより一子は今何してる？
引き取った婆さんが死んだとか聞いたが……」

暁
「……じゃ、なんだから場所を変えよう」

そう言って、多馬川の河川敷にやってきた。

それから俺は、忠勝に一子の事を話した。

忠勝

「そうか、川神院に引き取られたのか……よかった」

暁

「今は、鉄爺…川神 鉄心と義姉の川神 百代と門下生達と山に修業にいつてる」

それを聞いて忠勝は、ホッとしているようだ。

忠勝は、おもむろに暁に頭を下げた。

忠勝

「一子が川神院で引き取ってもらえるように頼んでくれた事、礼を言うぜ」

暁

「頭を上げなよ。友達を救う事は当たり前前のだ。お礼を言われる必要はないよ」

忠勝

「いや、お前達のおかげでワン子をロクデナシの所へ行かせずに済んだ。

本当にありがとう」

それを聞いて暁は、

暁

「義理堅いんだな、おまえ」

忠勝は、

忠勝

「勘違いするなよ。俺が礼を言わないと気が済まないからだ」

そう言ってそっぽを向く。どうやら照れてるらしい。

暁

「あ、そうだ。今度一子に会わせようか？」

暁は忠勝にそう言ったが、

忠勝

「いや、いい。あいつが幸せならそれで」

やはり忠勝は、小学生だが漢おとこという字が良く似合う。

暁

「わかった。会いたくなったら知らせてくれ」

そう言っつと自分の電話番号と住所を書いた紙を渡した。

忠勝

「ああ、そういえば、お前の名前聞いてなかったな。聞かせてくれないか？」

暁

「天錠 暁。それが俺の名だ」

これが忠勝との最初の出会いだった。

c o n t i n u e d

t
o
b
e

第12話 『二人の少年』（後書き）

作者「ということで、いかがだったでしょうか？」

暁「みんな、準と冬馬と思ってたんじゃないかな、この話のタイトル見て」

作者「たぶん、そうだろうね。だからあえてその予想を裏切りましたw」

暁「まあ、いいじゃないの？」

作者「何、その軽い感じ（・-・）」

暁「それしか言いようがないぞ」

作者「たしかにそうだけどさ」

暁「拗ねるな、拗ねるな、次回予告しないと」

作者「そうだった。次回で第1章完結です。ということで、

次回、第13話『竜舌蘭を護れ、風間ファミリー誕生！』でまた会いましょう」

暁「では、次回までまたな」

第13話 『竜舌蘭を護れ、風間ファミリー誕生!』（前書き）

第1章最後のお話です。ということで竜舌蘭エピソードです。

第13話 『竜舌蘭を護れ、風間ファミリー誕生!』

翔一

「この縄張り、土管がいい味だしてるよなー!」

小雪

「そうだね、ボクもこの空き地好きだな」

一子

「なんといつても広いわ」

卓也

「でも他には何もないけどね」

岳人

「十分だ」

居心地はよいが、さほど特色もない普通の空き地。

でもそのいつもの空き地で、

俺達は奇妙な植物を発見した。

翔一

「なあおかしくねーか、この草大きくなりすぎ」

一子

「あーそう言われれば」

翔一

「今まで2メートルぐらいだったのに」

卓也

「うん、今は3メートルぐらいありそうだね。背伸びてるね」

小雪

「夏だから成長してるんじゃない？」

一子

「アタシも、成長しているわ」

岳人

「はは、そうかあ？ ちんちくりんじゃねーか」

一子

「ガクトがどんどん高くなっていくんでしょ！」

小雪

「そーだ、そーだ」

卓也

「ワン子も言い返すようになったねえ」

百代

「私の妹だから当然だ」

ワン子は、百代のカッコよさに惹かれ弟子になっていた。

一子

「うん、アタシ強くなる！」

百代

「よしよしその意気だ（頭なでなで）」

暁

「なんか、主人と飼い犬って感じだな」

一子

「ムウゝ暁ヒドイ」

暁

「はは、冗談だ」

卓也

「まあそれはおいとしてこの草は成長期ってことで」

岳人

「俺様もこれぐらい高くなりたいぜ」

それから――2ヶ月後、季節は真夏。

準

「オイオイこの草もう5メートルこしてるぜ!？」

岳人

「実は妙な生き物じゃね。ある日ワン子の姿が消えた
…するとこの植物はワン子の身長分背が伸びていた」

一子

「怖いでしょうが！」

翔一

「ある日、ガクトの姿が消えた。するとこの植物が花をつけた時、そこにガクトの顔が！」

一子・小雪

「キヤー！気持ち悪いー！！」

ワン子と小雪がごろごろとのたうつ。

百代

「ぬぬ……だが物理的に殴れるなら化け物も平気だ」

暁

「あれ、モモ、ひょっとしてお化け苦手？」

百代

「ふん、うるさいな……ちょっとだけ、本当にちょっとだけだぞ」

どうやら図星のようだ。

大和

「まあ確かに殴れないモンね、ああいう類は」

暁

「俺は出来るけどな」

全員

「な、なんだって……！！！」

百代

「ほ、本当か？」

暁

「ああ」

大和

「師匠……本当に何でもありだな（汗）」

大和は、呆れていた。

卓也

「なんか驚きすぎて……」

モロは、なんか少し暁に引いていた。

そんな話をしていると岳人の母親の島津 麗子さんがやってきた。

麗子

「こらガクト！ 学校の先生からちゃんと宿題させるようにって電話来ちゃったじゃ……」

暁

「あ、ガクト君のお母さん。丁度いいや。聞いてみよう」

暁は、麗子に事情を説明した。

麗子

「この草はアレだよ、竜舌蘭じゃないのかい」

卓也

「リュウゼツ……ラン？」

麗子

「そうさ。こんなレアな植物がこんな空き地にねえ」

大和

「へえー。これが竜舌蘭だったのか」

岳人

「なんだその漫画の敵キャラのような名前は」

暁

「気候にもよるが…数十年に1度しか咲かない花だな」

大和の代わりに暁が答えた。

麗子

「あんたら本当に小学生かい暁ちゃん」

暁

「フフ。俺が高校生だったら貴方を口説いていました」

麗子

「そういうお世辞を言うにはまだ早いよ暁ちゃん」

そう呆れて言った。

麗子

「まあ百代ちゃんのお爺ちゃんがもつと詳しいんじゃない？」

百代

「では呼んでみよう。くくすっー！」

百代が息を吸い込んだ。

俺達は反射的に耳を指で塞いでいた。

百代

「ボケはじめてのブルセラじじい!!!!!!!!!!!!!!」

バビューン

風と共に川神 鉄心が現れた。

どこまで地獄耳なんだこの人……。

鉄心

「モモ！ お前いい度胸しとるのうー！」

卓也

「一瞬で来ちゃったよ。この一族は全く……」

モロは川神一族のデタラメさに呆れてた。

百代は、鉄心に事情を説明した。

鉄心

「なるほど、こりゃまさに竜舌蘭じゃのう」

鉄心は思い出すように

鉄心

「ありゃたしか50年前かのう。確かに咲いotta」

百代

「人間50年と同じ年数か。壮大だな」

鉄心

「この花はその子供って所かの。咲いて枯死する前に小株を根元近くに作り残すと聞いたが、よくはわからん」

暁

「わからないとは？」

鉄心

「この花は個体変異が大きくて、変種も多い為分類は難しいんじゃない。咲く年期も花によって違うし」

鉄心

「まあ、明後日には黄色い花が咲きそうじゃの」

鉄心

「おっと、ルーと将棋の途中じゃったわい」

そう言った刹那、鉄心はその場から消えていた。

一子

「明後日開花かあ。楽しみよねえ」

小雪

「うん！　楽しみ」

百代

「まあな。粹なイベントがやってきたもんだ」

暁

「皆で写真撮るのもいいな」

翔一

「その場合、ガクトが写真撮影する係な」

岳人

「ちょっとまで、俺様が写らない事をどうするつもりだ」

一子

「あはは、卒業アルバムの欠席者みたいに上に」

岳人

「そんなネタ的に美味しいのはキャップにまわすぜ」

翔一

「確かに美味しいな」

卓也

「そこ考える所なんだ……」

大和

「でも写真かゝ、悪くないね」

京

「私も花が咲くの楽しみ」

暁

「ああ、楽しみだ」

そんな話をして俺達は竜舌蘭が咲くのを楽しみしながら各々家に戻って行った。

家に帰りつき、ふと暁は思いついた。

暁

「ちょうどいい。あいつらも誘うか」

小雪

「あいつら？」

暁

「ああ、この前友達になったんだ」

あいつらというのは、葵 冬馬と源 忠勝の事だ。

まだ、皆に紹介してなかったし、ちょうどいい。

そう言って、俺は、2人に電話をかけるのだった。

そして、いよいよ花が咲こうとしたその前夜。

強烈な台風15号が関東に上陸した。

キャンプから招集がかかる。

俺達は、家のメイド達に黙って、竜舌蘭のある空き地に向かった。

翔一

「花がきちんと咲けるように保護するぞ！」

大和

「……全く、この台風の中ムチャクチャだ！」

小雪

「アハハハハハ」

暁

「それでもきたお前も相当なものだと思っぞ」

暁は、笑いながらそう言った。

大和

「そういう師匠こそ、人の事言えないじゃないか」

暁

「まあな、それにあの花が咲くのを皆で見たいしな」

翔一

「そつだあの花は、あの花だけなんだ、代わりなんてねえ。」

俺も暁と同じく皆で見たいんだ」

一子

「アタシも!」

京

「うん、皆同じ気持ちだね」

京がそう言つと皆が頷いた。

大和

「うんじゃ、覚悟を決めて師匠、姉さんよろしく」

百代

「ああ、私達が皆を守る。必ずな、そうだろ、アキラ?」

暁

「ああ!」

岳人

「ん?だれか来るぞ?」

そついうと空き地の入り口から浅黒の髪の短い少年がやってくる。

暁

「あれは……」

一子

「タっちゃん!?!」

ワン子は驚いている。

百代

「知り合いか、ワン子？」

一子

「うん、同じ孤児院に居た男の子」

暁

「忠勝！ どうしてここに？」

忠勝

「勘違いすんな、たまたま通りがかっただけだ」

相変わらずのシンデレっぷりである。

暁は苦笑し、

暁

「ありがとくな、忠勝」

忠勝

「気にすんな。それと一子、久しぶりだな」

一子

「タっちゃん、久しぶりだね」

ワン子は笑顔で忠勝との再会を喜んでいる。

大和

「タっちゃんという事は、ワん子の話に出てくるあの?」

忠勝

「……どんな話か気になるが、タっちゃんは、止める。
俺の名前は源 忠勝だ」

翔一

「源……みなもとじゃあ、源さんげんだな」

忠勝は諦めたように

忠勝

「ああ、それでいい」

そうぶっきらぼうに言った。

翔一

「よろしくな、源さん。一緒に竜舌蘭まもうぜ!」

忠勝は、一瞬呆気にとられたが、すぐに

忠勝

「ああ!」

そう言って、忠勝と他のメンバーが交流を温めていると

また別の人達が空き地にやってきた。

冬馬

「暁。 私たちも竜舌蘭をまもるのを手伝わせて下さい」

それは冬馬達だった。

暁

「冬馬、それに準。お前達まで！」

準

「若が行くって聞かねえもんだからな。一緒に来た」

大和

「師匠、その二人は？」

暁

「紹介がまだだったな、こちらの眼鏡をかけているほうが、葵冬馬。」

で、そのとなりが井上 準」

大和

「葵って、この前潰れたあの？」

そついうと冬馬達の顔に暗くなる。

暁

「一応、言っとくが、親は親。子は子だ」

暁がそう言つと皆納得して、

大和

「俺、直江 大和、よろしく」

そう言つて、大和は冬馬に手を差し出す。

一瞬、差し出された手に驚いていた冬馬だったが、
すぐに笑顔になり、

冬馬

「葵 冬馬です。よろしくおねがいします（ニコッ）」

大和の手を握り返し、握手をする。

暁

「それじゃ、みんなで竜舌蘭まもるぞ!!」

全員

「おお!!」

内側に一子・京・小雪・卓也・冬馬、外側に忠勝・岳人・翔一・準・
大和
そして前方に暁・百代という配置で花を囲んだ。

暁

「じゃあ、いくぞ、『四方結界』!」

全員を囲うように周囲500mに結界を張った。

冬馬

「暁。これは一体!？」

京

「暁。こんなこともできるんだ、すごい……」

百代

「こんなのは序の口だろう、何せ暁は、私を倒したんだからな」

なぜか百代は自慢そうに胸を張る。

大和

「なんで、姉さんが自慢げなんだ？」

小雪

「アキ兄、凄い」

準

「おいおい、凄すぎだろ……」

卓也

「いつもの事だから。気にしないほうがいいよ」

忠勝

「改めて、お前が出鱈目だと言う事を確認出来たよ」

暁

「この結界があればどんな障害物が着ても大丈夫だ」

全員

「おお」

全員それを聞いて感心している。

暁

「それじゃ、花を護るぞみんな」

全員

「おお！」

先程より風と雨が一段を厳しくなってきた。

前から鉄板が来るが結界がある為、違う方向に跳ね返った。

それから数十分後、だんだん風と雨がかなり激しくなってきた。

暁

「仕方ない」

そういうと暁は、結界の外に出て行った。

そして目を閉じ、精神を集中させる。

暁

「（台風の中心はと、ここから——南西100kmってところか）」

そして目を開き、

暁

「よし——」

そして、暁は、手と手を重ね、その重ねた手を後ろにやり中腰に構える。

百代

「ま、まさか!!」

翔一

「おいおい!!」

冬馬

「一体?」

準

「おい、あの構えって……」

一子

「おお!!」

小雪

「いつけ、アキ兄」

大和

「師匠、ちょ、ちょっと!!」

岳人

「真剣でいけるのかよ……」

全員から驚きや歓喜の声が聞こえるが、暁は集中しているため、聞いている。

暁

「かゝめゝはゝめゝ 波あああああ！……………」

バシュー……………

青い氣功砲が、台風を中心の方向に向かって飛んでいく。

数多く雲を突き抜けて数秒後台風の中心部に到達、周りの雲を吹き飛ばし、

台風を消滅させてしまった。

空き地を覆っていた雲の隙間から光が差し込む。

数分後、今までが嘘だったように青空が広がっている。

準

「た、台風消えたぞ……………」

モロは、無言で準の肩に手を置き、左右に顔を振り、

卓也

「あれがいつもの暁だよ」

準

「まじかよ……………」

冬馬

「あ、ははは……本当に凄いですね」

冬馬も若干顔を引き攣っている。

こうして、竜舌蘭を無事台風から救う事が出来た。

その後、家に帰った全員が、無断で家を出た件で、こっぴどく怒られたのは言つまでもない。

—— 次の日。 竜舌蘭の花は見事に黄色く咲いていた。

竜舌蘭を守るのを手伝ってくれた冬馬達と忠勝を呼んで
今みんなで竜舌蘭を見ている。

一子

「わーわー。これが50年に1度なのねっ」

岳人に肩車してもらったワン子のはしゃぐ。

岳人

「おいおいあんまり暴れるな小娘。 ったく」

岳人も含め、皆ワン子には甘かった。

百代

「……正直待たせるわりには凄く綺麗な花でもないな」

大和

「俺も思った」

準

「まあ、50年に1度なら感慨深いかもな」

小雪

「見た目とか手触りとか、普通の草なのにね」

卓也

「あんまり触るとかぶれるかもよ」

小雪

「えー、マジで？」

準

「コラア！俺になすりつけるな！」

翔一

「俺が護った花だ！放っておいても自力で咲けたなんて考えはこの際ナシで！」

冬馬

「図々しいですが、そっちの方が楽しいですね」

岳人

「ハハ、冬馬の言う通りだな」

忠勝

「そっだな」

麗子

「ったく、本当仲いいねえあんなら」

麗子

「ほら、写真撮るんだろ。パシャリといくわよ」

翔一

「よし、お前ら、集合！！ 写真だ写真！！」

忠勝

「俺らも本当にいいのか？」

暁

「何言ってるんだ、もう俺達仲間だろ？ なあ、皆！」

全員笑顔で頷いた。

冬馬

「ありがとうございます」

そっいつて、笑顔で冬馬は皆にお礼を言った。

準

「よかったな、若。うんじゃこれからよろしくな」

忠勝

「ちっ、まあ仕方なねえな」

忠勝はぶつきらぼくに言うが、まんざらでもなかった。

それからキャップの号令で、皆が一か所に集まる。

竜舌蘭を背に後ろから岳人・暁・百代、
真ん中に翔一・準・冬馬・大和・忠勝、
手前に一子・小雪・卓也・京の順に並んだ。

麗子

「さぁとるよー はいチーズ」

カシャリ

その後、俺達はその花を見ながら話した。

大和

「資料の色より、真っ黄色だなこの竜舌蘭」

翔一

「竜舌蘭の仲でも変わり種っぱいよな」

小雪

「そだね」

目に焼きつくような、純然たる黄色の花弁だ。

花の形はさほどではないが、色は美しい。

一子

「ね、またこの花を見るとしたら50年後？」

百代

「だな。私達は60歳ぐらいだぞ」

岳人

「じーさんだなあ」

百代

「私は壮絶な修業により、若々しいままだろうが」

卓也

「この人の場合本当にそうなりそうなんだよね…」

一子

「また皆で一緒に写真とりたいな」

百代

「はは、面白いな。50年前の今と同じポーズだな」

翔一

「俺ギックリ腰になってたりして」

それを聞いて全員笑った。

50年後また皆で、この花と一緒に写真をとる。

とても簡単な事だとそのときの大和達は思っていた。

しかし、一人浮かない顔をしている人物がいる事を大和達はこのとき、気付いてなかった。

それから数日たったある日、ふとキャップが、

翔一

「思っただけだよー、俺の軍団って無敵じゃね？」

そう言い始めた。

翔一

「大和と冬馬だけなら策はあっても暴力が足りないが
モモ先輩やガクト・源さんそれにアキラがいる」

翔一

「モロと準だけだとゲームに偏りがちな知識が
暁と京がいる事で文芸系もカバー」

翔一

「わりと大人びた俺達だが、ワン子と小雪の純粋さは天然記念物モ
ノだ」

翔一

「そしてこの俺が皆をまとめる事により1つになる」

百代

「なるほど、確かに私達が揃えば無敵だ」

岳人

「おう何でも出来るな。…だが修正したい点が1つ」

百代

「ああそれは私も同感だ、誰がお前の軍団だっ！」

ゴッソッ！！

翔一の頭に百代の拳骨が落ちる。

翔一

「いてえ！！！」

百代

「どう考えても、リーダーは暁だろうっ！！」

岳人

「そうだぜ、師匠に決まってる！！」

暁

「俺は、キャップがリーダーだと思うぞ？」

岳人・百代

「なんで！？」

暁

「ここぞというときの行動力。後、仲間に対しての気遣い。後、適切な判断力。

キャップはリーダーとしての資質を持ってる」

翔一

「暁、そう言ってくれるのはお前だけだぜ」

それを聞いても岳人と百代は納得してなかったが、

暁

「とりあえず、このグループの名前を決めるか」

一子

「グループ名？」

暁

「ああ、俺は『風間ファミリー』がいいと思う」

冬馬

「なぜ、その名前なんですか？」

暁

「理由は二つ。まず最初にあの空き地に秘密基地を作ったのはキャップなんだ。」

それにリーダーはキャップだからな。

二つ目は、俺達は家族みたいなもんだ、誰一人欠けちゃいけないそれくらい大切な仲間だ」

暁がそう言つと

一子

「アタシ、その名前でいい！」

卓也

「うん、僕も賛成」

大和

「俺も賛成」

京

「……私も」

冬馬

「なるほど、私もその名前で賛成です」

準

「俺も賛成、理由が気に言っただけだから」

忠勝

「俺もそれでいい」

百代

「ぐぬぬ……アキラがそういうのならそれでいい」

岳人

「わかったよ、俺もそれでいいぜ」

小雪

「ボクも賛成！」

暁

「うんじゃ、キャップ名乗り上げよろしく」

翔一

「よし、今日から俺達は、『風間ファミリー』だ！」

こうして、風間ファミリーが誕生したのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第13話 『竜舌蘭を護れ、風間ファミリー誕生!』（後書き）

作者「ということで、この竜舌蘭及び風間ファミリー誕生エピソードでした」

暁「これで、小学生編は終わりか？」

作者「ああ、次回から第2章の始まりだ」

暁「一体、俺はどうなるんだ？」

作者「それは次回のお楽しみ」

作者「では次回 第2章 第1話『暁、旅に出る』」

暁「ええええ!!!! 俺、旅にでるのお？」

作者「うん」

暁「ちよつとまって」

作者「ではまた次回」

オリキャラプロフィールその？（前書き）

今回は、Prologue及び第1章に登場したオリジナルキャラクタを紹介します。

オリキャラプロフィールその？

名 前： 天錠 暁

フリガナ： テンジヨウ アキラ

CVイメージ： 近藤 隆（生徒会の一存の杉崎 鍵役）

年 齢： 9歳（第1章時）

実 年 齢： 21歳

身 長： 136.0cm

血 液 型： A

誕 生 日： 4月2日

一 人 称： 俺

あ だ 名： 暁、アキラ

容 姿： FF？のセフィロス（通常時は、黒眼黒髪、魔法・魔術使用時は赤眼金髪）

武 器： 拳を含む武器全般及び気巧術・魔術・魔法

職 業： 川神小学校2 - 1 天錠家長男 跡取り

家 庭：父母妹二人健在。義妹の小雪と同居。
父母実妹は、LA在住。

好きな食べ物：エビチリ

好きな飲み物：烏龍茶

趣味：技研究 読書 鍛練 料理 アクセサリー作り
etc.

特技：何でも得意

大切な物：仲間 家族 友人

苦手な物：人の心を踏みにじる行為 外道 紫蘇

尊敬する人：父親

セカイを護る代理^{エージェント}人の一人。

風間ファミリー内では、全てのメンバーの補佐役及びお目付け役。
困っている人を見過ごせないいい意味でいい人。悪い意味でお人よし。
どんなに困難でも諦めない粘り強い性格。

ちなみに恋に関しては鈍感ではなく、気付くのだが、
自分は人間を越えてしまったモノと認識しており、
気付かない振りをしている。

神からもらった能力のおかげで、何でも得意。

過去に両親を大規模なテロで亡くしたとおもっていたが、
まじこいのセカイに到着した直後に両親の生存を知る。

そして、両親を死に追いやった敵の存在もその時知った。
それとアキラにはまだ自身も知らない秘密がある。

CVイメージ：加藤 英美里（まどかマギカ キュウベえ役）

年 齢：不明

身 長：110.7cm

血 液 型：不明

誕 生 日：不明

一 人 称：私

あ だ 名：イナバ

容 姿：西○屋のロゴ

武 器：不明

職 業：神の従者

家 庭：不明

好きな食べ物：不明

好きな飲み物：不明

趣 味：不明

特 技：どんなときでも礼儀正しい

誕生日：6月5日

一人称：俺私

あだ名：ソウイチ

容姿：スーパーロボット大戦OGのキョウスケ「ナンプ」
（黒眼黒髪）

武器：ビジネスの手腕

職業：天錠グループ総帥 暁、桜華の父親 小雪の養父

家庭：嫁息子娘二人健在。嫁と娘とLAで同居。
息子と養女は川神在住。

好きな食べ物：肉

好きな飲み物：酒全般

趣味：味：ボトルシップ

特技：技：どこでも寝れる

大切な物：家族 友人 会社の社員及びその家族

苦手な物：人の心を踏みにじる行為 外道

尊敬する人：嫁

あだ名：ユイカ

容姿：ああっ女神さまっのベルダンディー（茶眼黒髪）

武器：ナイフさばき

職業：天錠 総一の妻。暁・桜華の母親。小雪の養母。

家
庭：旦那息子娘二人健在。旦那と娘とL Aで同居。
息子と養女は川神在住。

好きな食べ物：辛い物

好きな飲み物：アッサム

趣味：ナイフ集め

特技：ピアノ

大切な物：家族とその友人

苦手な物：人の心を踏みにじる行為 外道

尊敬する人：旦那

元・最強の代行者のパートナー。
エージェント

前の世界で傷ついた人々と息子を助ける為に旦那と同じく力を使い
息絶えたが、
ルカによりまじこいのセカイに転生。

今は、天錠グループのトップの妻及び輸入雑貨の商売をしている。
力を失ったことにより旦那と同じく息子のサポートに回った。
性格は、温和で穏やか。旦那や子供達を愛しており、旦那達の敵に
なるものには、
非情な修羅と化す。

オリキャラプロフィールその？（後書き）

作者「プロフィールはどんどん追加していきます」

作者「また第2章の1話目と新作は、今日の夜に投稿しますのでそちらもお楽しみに」

オリキャラプロフィールその？（前書き）

前回に引き続き、Prologue及び第1章に登場したオリジナルキャラクター

残り二人を紹介します。

オリキャラプロフィールその？

名 前： 冴場 涼香

フリガナ：サエバリョウカ

CVイメージ：原田 ひとみ（マケン姫っ！の二条 秋）

年 齢：18歳（Prologue時）、22歳（第1章時）

身 長：168.0cm

3 サイズ：103 58 92

血 液 型：A

誕 生 日：6月10日

一 人 称：私

あ だ 名：涼香

容 姿：マケン姫っ！の二条 秋（黒眼黒髪）

武 器：棒術

職 業：天錠家メイド隊 第2部隊『フルーラ』メイド長

家 庭：両親ともに子供の時に死別。親戚なし。

○●

名 前：南雲 来夏

フリガナ：南雲 来夏

cVイメージ：日笠 陽子（ISの篠ノ之 箒役）

年 齢：21歳（第1章時）

身 長：172.0cm

3 サイズ：90 56 89

血 液 型：B

誕 生 日：7月20日

一 人 称：私 アタシ

あ だ 名：来夏

容 姿：めだかボックスの鰐塚 処理をもう少し大人にした
感じ

（左眼が黒、右眼が赤 普段は右に十字架の紋章が描
かれた眼帯をしている。藍髪）

武 器：刀

職 業：天錠家メイド隊 第2部隊『フルーラ』メイド序列

第2位

家 庭：祖父のみ。両親ともに生まれて間もなく死亡。

好きな食べ物：鍋

好きな飲み物：ビール

趣 味：ぬいぐるみ作り 鍛練

特 技：人に気づかれず行動する事

大切な物：暁 天錠家の人々及びその家族 祖父

苦手な物：黒い悪魔

尊敬する人：祖父

天錠家のメイドの一人。

氣と剣を融合させた南雲流剣術の第17代目伝承者。

普段は、暁の護衛役として影から見守っているが、

暁から指令が下ると監視から悪人退治まで何でもする影の実行者の存在。

性格は物静かで人と少し感覚がズレている。

過去に暁の父に助けられた事があり、それが縁で天錠家で働いている。

又、それまで恋など興味なかったが、暁と会った瞬間、一目惚れしており、

影から暁を支えている。親友の涼香も暁を密かに好いている事を知ってる為、

自分もなかなか言い出せずにいる。
涼香の武器は、最上位大業物14工の一人初代虎徹の一振り。

オリキャラプロフィールその？（後書き）

作者「ということで、残りの二人の紹介でした、真、天錠　桜華は、第3章で大々的に

でてくるので、そのときに」

作者「オリジナル敵はまた別途作成しますのでもう少しお待ちを」

第1話 『暁、旅に出る』(前書き)

という事で、第2章スタートです！

第1話 『暁、旅に出る』

あれから月日は流れ、俺達は小学校を卒業し、中学に上がった。

俺達はこのままずっと一緒だと思っていたが、突然の出来事が起きた。

京の両親が離婚し、父親のほうに引き取られた京が静岡に引っ越し、することになった。

一子

「うわーん、ざびじいーよー」

小雪

「さみしいー、あーーん」

ワン子と小雪は大泣きだ。

他のメンバーも表情が暗い。

しかし、京は、

京

「週に一度、土曜にはこっちに顔出すから、泣かないでワン子、小雪」

京はワン子と小雪を慰めるように言った。

大和

「大丈夫なのか……京？」

大和が心配そうに言うと

京

「大丈夫。私には皆がいる。遠く離れててもそれは変わらない
ただ、暁にいつでも会えなくなるのはさみしいけど……」

そう言つて、暁を上目使いで悲しそうに見る。

暁

「静岡ならいつでも会いに行けるさ、さみしくなったら連絡しろよ。
すぐ会いに行ってやる」

暁がそう言つと

京

「本当？ 暁も私がいないとさみしい？」

京のその質問に

暁

「ああ、さみしい」

その言葉を聞いて、頬を染めてうつとりと暁を見る京。

暁

「ん？ どうしたんだ京？」

暁のその言葉にファミリー全員やれやれといった感じのポーズを取

る。

暁

「ん〜？」

暁は全く分かってないようだ。

翔一

「うんじゃ、盛大に見送ってやるぜ!!」

キャンプのその言葉に京以外のファミリー全員が

ファミリー全員

「ああ!!」

と、元気良く頷いた。

——— 次の日

京の引っ越しの日、京と京の父親を見送る為、ファミリー全員で川神駅へ向かった。

暁

「京お〜!!!!」

駅の改札前で京達を見つけ、暁が声をかけファミリー全員、京に駆け寄る。

京

「みんな」

京は嬉しそうだった。

京の父親からまだ時間があると言われたので、全員、京を見送る言葉を言つて、

最後に暁の番となった。

暁

「京、悲しい事、辛い事あればすぐに俺たちに連絡しろ。
必ず京の元へ駆けつける」

京

「うん」

暁

「京、まだ人と関わるの怖いかな？」

暁の質問に

京

「ううん、大丈夫。みんなのおかげで私、人と話すの怖く無くなつたよ」

京をいじめから救った後から俺達は、色々な人と交流できるようにリハビリをして、京の対人恐怖症は直っていた。

暁

「じゃ、向こうでも友達作れそうかな？」

京

「うん、難しいけど頑張ってみる」

京から決意のようなまなざしが見てとれた。

暁

「俺も時々、お前の様子見に行くからな」

京

「うん！ 私もときどきこっちに遊びに来るね」

翔一

「おう！ 待ってるぜ！！」

皆も嬉しそうに頷いた。

京

「あ、そうだ。みんな約束しよう？」

暁

「約束？」

京

「私、高校は川神学園にする。だから」

それを聞いてファミリー全員が

ファミリー全員

大和とガクトが動揺している。

翔一

「旅か、いいな、でどこ行くんか？」

暁

「世界」

キャップは能天気そう言い、暁も即答する。

百代

「ちよつと待て、私との試合はどうなる。まだ一度も勝ってないんだぞ！」

百代との試合は、100勝0敗と暁の一人勝ちだった。

卓也

「なんだか、急だね」

冬馬

「そうですね、なぜ急に？」

暁

「急じゃないさ、教育委員会とか学校とか政府とか黙らすのに時間がかかったんだから」

それにちよいちよいこつち帰ってくるぞ？」

準

「今、俺の耳がおかしい事聞いたんだが、教育委員会とか政府とか」

暁

「ああ、本来やるべき義務教育の全過程全部終わらせる代わりに早めに卒業証書くれと言ったんだ」

暁は、あっけらんとそう言った。

ファミリー全員

「は〜いい？」

当然の反応である。

暁

「一応、全過程終わらせたんで、定期的にテストするからそれで手を打たれた」

ファミリー全員

「……………」

ファミリー全員、口が開いたままポカーンとしている。

翔一

「で、いつなんだ、出発？」

暁

「明日」

……………

ファミリー全員

「ええええ~~~~!!!!!!」

それからバタバタ俺の送別会をしてくれた。

そして次の日俺は仲間たちに見送られ、旅に出た。

最初の目的地は北陸・加賀。

暁

「うんじゃ、行きますか」

そう言って、俺は歩き出した。

continued.....

to be

第1話 『暁、旅に出る』（後書き）

作者「ということで、第2章スタートしました」

暁「わー」

作者「ということで京の精神改造してしまった」

暁「原作の面影ないわ」

作者「まあ、いいじゃないか。京には色々人と関わってほしいのだよ」

暁「ふむ」

作者「それにオリジナルの友達も出てくるようにしましたしね」

暁「お」

作者「という事でお楽しみに！」

暁「うんじゃ、次回予告、北陸・加賀にやってきた俺は、人見知りで極度の緊張持ちの女の子と

知り合うことになるのだが、次回、第2話 『剣聖の娘』でまた会おうぜ！」

作者「最後にお知らせです。本日よりA・O・G 2nd Project

A・O・G - Agent Of God - 十ジェント 代行者と

『三国の恋姫たち』がスタートしました。

こちらの第1話と一緒にPrologueを投稿しておりますので
そちらもよかったらどうぞ。

アドレスはこちら↓
<http://ncode.syosetu.com/n2406z/>

作者「次回までまた」

PVアクセス50000突破記念 アンケート

ということで、読者の皆様のおかげでPVアクセスが50000越えました〜！

それを記念してここでアンケートを取りたいと思います。

今後、出してほしいキャラは、次のうち誰？

- 1．鉄 乙女
- 2．橘 天衣
- 3．南雲 慶一郎 （リアルバウトハイスクール）
- 4．草？ 静馬 （リアルバウトハイスクール）
- 5．バルバトス・ゲートティア （テイルズ オブ デスティニー2）

この中で票が多かった1位、2位までのキャラを今後小説に出したいと思います。

一人投票二人までとさせていただきます。

期間は、12/16の19：00までとさせていただきます。

皆さまご協力お願いいたします。

又、ご意見・ご感想ありましたら随時受け付けておりますのでそち

らもよろしく願います。

後、なるべくソフトに願います。結構打たれ弱いので（
ー
ー
；

第2話 『剣聖の娘』（前書き）

ということ、舞台は川神市から変わって北陸・加賀へと移ります。
それではどうぞ

第2話 『剣聖の娘』

暁

「さてと……ここが、剣聖黨十一段の家か」

俺は、今北陸・加賀に來ている。

目的は、今後、風間ファミリーに入ることになる黨 由紀江に会う事だ。

俺は、黨家のインターホンを押し、

暁

「御免下さい」

数秒後、

女性

「はい」

穏やかな声でそう返事があり、一人の女性が玄関を開け、こちらにやってきた。

暁

わたくし

「私、天錠 暁と申します。黨十一段は御在宅でしょうか？」

暁がそう言つて頭を下げると

女性

「まあ！　あなたが、総一さん所の息子さんね。」

暁は少し驚いて、

暁

「父を知っているのですか？」

暁がそう訊ねると女性は、微笑みながら

女性

「ええ、うちの旦那様と総一さん、親友だから」

暁

「（まさか黨十一段と知り合いとはうちの父親どれだけ友人居るんだ？）」

暁がそんな事を思っていると

女性が、

女性

「旦那様ならいますので、どうぞ暁君」

暁

「はい、おじやまします……　えーと、失礼ながらお名前は？」

女性

「自己紹介がまだだったわね、私の名前は、まゆずみ黨時乃。
よろしくね、暁君」

暁

「はい、よろしくお願いします」

二人は自己紹介の挨拶を交わし、家の中に入った。

暁が通されたのは、広い純和風な客間だった。

数分後、客間の襖が開き、一人の男性が入ってくる。

男性

「お待ちせして済まない。私が、まゆずみはじめ 創だ。

君が、総一の息子さんかい？」

創と名乗った男性は、暁にそう訊ねた。

暁

「はい、天錠 暁と申します、以後お見知りおきを」

そう言つて、正座しながら頭を下げた。

創

「ははは、そう肩に力を入れなくていいよ、楽にして、楽にして」

暁は、創を観察する様に見た。

見た目、優男だが、腕や肩を見る限り、よくしまつて程良くいい筋肉が付いている。

顔も性格からして優しさがにじみ出る感じた。

創

「ははは、どうだい？ お眼鏡にかなったかい？」

創は暁にそう言うと暁は一瞬びっくりして、すぐに

暁

「はい！」

創

「はは、そうかい」

優しい笑顔でそう答えた。

暁

「（この人……強い）」

力に関しては暁のほうが上だが、精神面に関しては、創のほうが上である事を

直感的に暁は感じた。

創

「それで、こちらに来た要件というのは？」

暁

「ここで、修業させてもらえませんか？」

由紀江に会う事もあったが、暁には、もう一つ目的があった。

ここで、自分の剣術を完成させる事。

これからのネガ・マリス及びイレギュラーとの闘いには、拳だけでは心許ない。

漫画とかアニメの技とかは覚えているが、素早く出すためには、

自分なりのコンビネーションを開発しなければならない。

そう考えた時、ここの情報が頭に出てきたからだ。

創

「それはなぜだね？」

暁は、創から真剣な表情でそう訊ねられると

暁

「私は、ある理由で闘わねばなりません。

その闘いで私の大切な物が傷つけられるかもしれない。

だから、自分の剣技を完成させなければならない」

創

「……………」

創は、暁の言葉を黙って聞いている。

創

「その大切な物とは何かな？」

暁

「自分が関わった人達や仲間・友達・家族達……それとセカイです」

創は自分の質問の答えを暁から聞き、

創

「いいでしょう。ここでの修業を認めます」

そう、にっこりと微笑んで暁に修業の許可を言った。

暁

「ありがとうございますっ!!」

暁は創に頭を下げ、元気よくそう言った。

すると玄関から

ガラガラガラ〜!

????

「ただいま、戻りました〜」

誰か帰ってきたようだ。声からすると俺と同じくらいの女の子のようだ。

暁

「（もしかして……）」

創

「ちょうどよかった。母さん、由紀江をこちらに」

時乃

「はい、由紀江」

時乃さんがそう呼ぶと

一人の女の子がやってくる。

???

「……！！！！／／／／（赤面）」

俺を見るや否や時乃さんの後ろに隠れてそこから顔を少しだしこつちを見ている。

創

「ははは！　しょうがないな、由紀江、挨拶を」

創さんに促され、恥ずかしそうに由紀江と呼ばれた少女が、

由紀江

「ま、黛い……由紀江……です／／／／（赤面）」

暁

「俺の名前は、天錠　暁、よろしくね、由紀江ちゃん（ニコッ）」

暁は、笑顔で由紀江に自己紹介した。

由紀江

「はう！　／／／／（赤面）」

由紀江は、赤面し、また時乃さんに後ろに隠れた。

これが、天錠 暁と黛 由紀江の最初の出会いだった。

b e c o n t i n u e d

t
o

第2話 『剣聖の娘』（後書き）

作者「ということでも、由紀江登場です」

暁「思い切り人見知りだな、由紀江は」

作者「うん、とりあえず、あの子の人見知りと刀所持を直さねえとなということでも」

主人公がんばれ」

暁「おーい、丸投げかー!!」

作者「うん、とりあえず、がんばれ（、＊）dグッ!」

暁「サムズアップすんじゃね（怒）」

作者「まあまあまあ、落ち着いて」

暁「落ち着けるか!」

作者「怒ってる主人公はさておき「さて置くな!!」 黨家の人達の名前についての説明」

暁「ん？ オリジナルだっけ？」

作者「うん、話書くときに必要だったんで勝手に着けちゃいました。まだでてこない妹もオリジナルで付けようと思いますが、まじこいSが出た時に黨家の人達の名前出てきたら、そっちに修正します」

暁「ふむふむ」

作者「まあ、とりあえず、次回予告、暁よろしく」

暁「うんじゃ、黨家で修業することになった俺事、天錠 暁は、由紀江と友達になるべく

色々やるのだが……、次回、第3話 『友達になろう』でまた会おうぜ!」

作者「暁サックス!! ではまた会いましょう」

第3話 『友達になろう』（前書き）

引き続き、由紀江の家を舞台に話が続きます。それではどうぞ

第3話 『友達になるっ』

暁 side

剣の修業の為、由紀江の家に御厄介になって3日がたった。

創さん指導の元、由紀江と一緒に剣の修業をしているのだが、

由紀江が、あの通り、恥ずかしがり屋の緊張持ちなんで、

なかなか話をする事はできない。

俺はさてどうしたものかと悩むのだった。

暁 side out

創さんとの稽古が終わった後、

創さんから呼び止められた。

創

「暁君、ちょっといいかな？」

暁

「はい、なんでしょう？」

創

「由紀江の事なんだが……」

暁

「はあ……」

創

「由紀江はあの通り、人見知りが激しくてね。友達も一人もいないんだ。よかったらあの子の友達になつてくれないか？」

暁

「はい、それはもちろん。ですが、俺の前だとすぐ赤くなつて話をする前に逃げてしまふのですが……」

創

「ほほう、そんな反応初めてだな……」

創は何かを感じ取ったのか声色が低くなり、目を光らせる。

暁は、創の雰囲気冷や汗をかきながら、

暁

「とりあえず、友達になれるようがんばってみます」

創

「それはよかった。頼んだよ暁君。ただし、おともだちだからね」

ニコニコしながら目が笑つてない創さんを見て、

暁は黙つて縦に頷くことしかできなかった。

—— 一方その事

由紀江 side

あゝ、ど、どうしよう！

どうやって声掛ければいいかわからないよ

由紀江は心の中で叫んでいた。

3日前から私の家に修業にやってきた私の一つ上の男の人。

天錠 暁さん。

私はこの性格と激しい人見知りのせい、いままで友達ができなかった。

私は人と接するのが怖い。

でも、今回は違った。

暁さんを一目見た時、

この人と友達になりたいと思ったのだ。

だけど、いざ話しかけると

私は何を言っているかわからず、

この3日間でかなりの回数、暁さんの目の前から

逃げ出してしまっている。

これでは友達になるところか嫌われてしまう。

うつ…、なんとかしないと……

そんな事を考えながら、由紀江はどうすればいいか悩むのであった。

由紀江 s i d e o u t

それからまた2日過ぎた――

相変わらず、暁が話しかけると由紀江は逃げの繰り返しで、なかなか仲良くなるきっかけを暁と由紀江は掴めずにいた。

暁は、縁側に一人座り、ため息をついている。

暁

「はあ〜、ここまで仲良くなるのが難しいとは……俺、挫折しそう」

暁は肩落とし、凹んでいる。

すると物陰から見ていた由紀江は、

肩落としている暁を見て、ありったけの勇気を振り絞って、

由紀江

「あ、あのー!!」

暁は後ろから由紀江の声が聞こえ、びっくりした表情で声の下方向を見る。

暁

「ゆ、由紀江ちゃん？」

由紀江

「は、はい!」

由紀江は緊張している。

その姿を見て、暁はクスリと笑い、

暁

「よかったら、こっちに来ない？」

由紀江

「い、いいんですか……?」

消えそうな声で由紀江が訊ねると

暁

「ああ、いいよ」

と優しく答えた。

すると、暁からかなり離れて横に座った。

暁

「それで由紀江ちゃん、俺に用？」

暁がそう由紀江に訊ねると

由紀江

「ああああののの！！」

暁

「とりあえず、落ち着いてゆっくりでいいよ」

暁は優しく由紀江に言った。

由紀江

「はい……」

すると由紀江は落ち込んでしまった。

暁は、由紀江が落ち込んでしまった事に動揺し、

暁

「俺、なんかまずい事言っただろ！？」

由紀江は、暁のその動揺っぷりに

由紀江

「あ、あの違っんです！　これは暁さんのせいではなくて……」

それを聞くと暁は

暁

「じゃ、なんで落ち込んだんだい？」

暁のその質問に由紀江は暗い表情でぽつぽつと話し始めた。

由紀江

「私……人一倍、人見知りで人の前に立つとすぐ動揺してしまって

……

私口下手だから友達できなくて……ヒクッ……ヒクッ……」

そう言うと、由紀江の両方の目から涙が、

それを見た暁は、たまらず由紀江に近づき、優しく抱きしめた。

由紀江

「ああああ暁さんんんん！！！！！！／／／／／（赤面）」

由紀江は、暁に抱かれてかなり顔を真っ赤にしている。

暁

「俺が友達じゃダメか？」

由紀江

「——え？」

由紀江は、暁の言葉が一瞬意味が分からなかった。

暁

「俺が、由紀江ちゃんの友達第1号になるよ」

由紀江

「……………本当に？」

由紀江は信じられないという顔で暁の顔を見ると

暁は、笑顔で

暁

「ああ、もちろん！」

そう元気に言った。

由紀江の顔が泣き顔から満面の笑みに変わる。

由紀江

「なんだか夢のようで信じられません……………」

暁

「じゃ、どうすればいい？」

暁が訊ねると

由紀江

「私の事を『由紀江』と呼び捨てにしてください……………」

暁

「分かった……………じゃ、俺の事も『暁』と呼び捨てで構わない」

由紀江

「じゃ、あ、暁　／／／／（テレ）」

由紀江は、恥ずかしそうに呼んだ。

暁

「なんだい？　由紀江」

それを聞いて、

由紀江

「はうう……」

かなり照れる由紀江。

それを見て暁は苦笑し、

暁

「由紀江、もっと友達ほしいか？」

暁がそう訊ねると

由紀江

「と、友達いっぱいほしいです！」

そう大きな声で言った。

暁

「うんじゃ、今日からその人見知りと緊張直す特訓しよう！」

由紀江

「ええええ!!! 無理です、無理」

暁

「ははは!! 人間無理なんかない！
やる前から諦めてどうするよ！」

由紀江はそれを聞いて

由紀江

「でも……」

由紀江は自信がないのか顔を下に背ける。

暁

「大丈夫！ 俺がついてる。一緒に頑張ろうぜ！」

と元気な声で由紀江を励ました。

由紀江は少し考え、

由紀江

「じゃあ……頑張ってみます！」

暁

「おう！」

暁は嬉しそうにそう答えた。

こうして、その日から由紀江の特訓が始まったのだった……。

e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

t
o
b

第3話 『友達になるっ』（後書き）

作者「ということで、由紀江との特訓がはじまります」

暁「そういえば、松風は？」

作者「あー、あれね。原作とは違う登場の仕方するのでこうご期待」

暁「へえ」

作者「読者の人もたぶんお気づきだろうが、由紀江とか風間ファミリーの面々

この小説だと性格が結構違います。大和がひねくれてなかったり、

モモ先輩が、戦闘狂じゃなかったりと」

暁「じゃ、後から出てくるクリス達も？」

作者「はい、いい方向で暁の介入があります」

暁「ほほう」

作者「あ、そうそう。Prologueで書いた通り、これから色々なキャラでできます。

敵だったり、味方だったり」

暁「ん？ それって今取っているアンケートの結果も関係あるの？」

作者「はい、アンケートの結果で、次に出てくる二人のキャラもレ

ギョラー化予定です」

暁「まじで!!」

作者「ということで、今現在アンケートを取っています。

アンケートの詳細は、『PVアクセス50000突破記念アンケート』に

書いてますので、そちら参照で」

暁「ほむほむ」

作者「12/13頃に中間発表しますので楽しみに」

暁「ほほう、で締め切りは？」

作者「12/16の19:00までです。まだ間に合いますので奮
つて

投票お願いします」

暁「宣伝も終わったし、それでは次回予告を——」

百代「次回は話を少し戻して暁とオーズがヤミー達と闘った後、風
間ファミリーの面々が

ある事を決意する……。次回、外伝その? 『風間ファミリ
ー、修業する』

でまた会おうな!」

暁「も、モモ。びっくりした」

百代「次回はお前出ないからな。私が出てきたんだ」

暁「そうなの？」

作者・百代「うん、ということで、また次回」

暁「知らなかったの俺だけかよ……」

外伝その？ 『風間ファミリー、修業する』（前書き）

今回は外伝です。それではどうぞ

外伝その？ 『風間ファミリー、修業する』

これは、暁とオーズがヤミー達を撃退した数日後のお話……

いつもの空き地に暁以外の風間ファミリー全員が集まっていた。

大和

「なんだい、キャップ。話って？」

翔一

「話というのは他でもない暁の事だ」

一子

「暁の？」

ワン子は小首を傾げる。

卓也

「あのヤミーとかいう化け物達と闘ったことだね？」

モロは、すぐに理由がわかったようだ。

翔一

「ああ、その通りだ。俺達は、暁を護ると約束した！

だけど、今のままじゃ俺達はいいつの心やあいつ自身を護れない
！」

キャップはみんなに大声でそう言った。

岳人

「しかし、モモ先輩とワン子はいいけど、俺達はどうすればいいか皆目見当もつかないぜ？」

百代

「たしかに私とワン子は、川神院で鍛えればいいしな」

大和

「そうだな、誰か俺達を鍛えてくれる人を探さないとな」

卓也

「怖いけど、暁の……仲間の為だものね」

モロは、決意したまなざしでそう言った。

翔一

「しかし、どうすればいいんだ？」

全員

「ん——」

全員、頭を捻って考えている。

翔一は、空き地の入り口をふと見ると

そこに執事服をきた凛々しい感じの女性が歩いている。

翔一

「なあ、あれって……」

大和

「あー、師匠のところのメイドさん、名前はたしか楠くすのき柳子さん」

翔一はそれを聞いて、何か思いついたようだ。

翔一

「いい事思いついた……ちょっと待ってる」

翔一は、走って、柳子さんを追いかけ、

翔一

「すいません〜」

柳子は、キャップの呼び声を聞き、後ろを振り向いた。

柳子

「なんだい、少年……おや、君は、暁様の」

翔一

「俺を知ってるんですか？」

柳子

「ああ、暁様の友人は全員覚えてるよ、それで私に何か用かい？」

柳子が訊ねると

キャップは、土下座して

翔一

「お願いします！ 俺たちに力を貸して下さい！」

そう、一生懸命大きな声で柳子に頭を下げた。

柳子

「……何か理由があるようだね、話を聞かせてもらえるかな？」

それからキャップは、柳子をみんなの所へ連れて行き、

柳子に説明をした。

柳子

「なるほど……暁様の為か」

風間ファミリー

「はい」

柳子

「しかし、暁様は君たちが傷つく事を良しとしないと思うよ」

柳子にそう言われ、

大和

「でもこのまま見ているわけにはいかないんです。

師匠は、あのまま闘い続けられ、いつか心に大きな負担が来ると
思っています。

だから俺達は師匠の支えになって少しでもその負担を取り除きた
いんです！」

翔一

「お願いします！ 俺たちに力を貸して下さい！」

翔一以外のファミリー全員

「お願いします！」

柳子

「……わかった。力を貸そう。ただし……

私が無理と判断したらすぐに力を貸すのを止めるよ、いいね？」

柳子は、風間ファミリーの面々に微笑みながらそう言った。

大和

「それと……師匠……暁には、内緒にしてもらえますか？」

柳子

「なぜだい？」

大和

「それは、俺達が修業するのを絶対止めると思いますから」

柳子

「わかった。では、今から川神院に行こう」

百代

「うちに？」

柳子

「屋敷のほうだとすぐバレてしまうからね」

大和

「なるほど……」

それから、風間ファミリーと柳子は川神院に行き、鉄心にこの修練場の使用許可と

暁にこの事を内密にしてもらう様お願いした。

すると鉄心は、二つ返事で承し、こうして風間ファミリーの面々の修業がスタートした。

まず、キャップには、天錠家執事でCQCの達人の楠 柳子。

大和には、暁のメイドの作戦指揮系担当のコマンドサンボの達人、
叢雲 静流。
むらくも しずる

モロには、電子系担当で截拳道ジークンドーの達人の秋原 双葉。
あきはら ふたば

ガクトには、警護担当のガンカタの使い手、紫藤 雪緒。
しどう ゆきお

ワン子には、川神院師範代ルーイーと釈迦堂 刑部。

百代は、川神院総代『武神』川神 鉄心が鍛える事になった。

それから京・小雪・冬馬・準・忠勝にも大和達に今までの事を話をし、後から入ってきた5人も

京

「……うん、わかった。今度は私が暁を助ける番」

小雪

「うん！ ボクもアキ兄助けるぞ」

冬馬

「当然です。暁は私にとって恩人ですから……」

準

「俺もいいぜ！」

忠勝

「ったく……あいついつも背負いすぎなんだよ。しょうがねえから助けてやるよ」

みんな考える事は同じだった。

それから5人も修業を始めた。

京の師匠は、遠距離系武器のスペシャリストのメイド長、冴場 涼香。

小雪の師匠には、天錠家執事長で第17代陸奥天聖流継承者 陸奥^{むつ}大河^{たいが}。

冬馬の師匠は大和と同じ叢雲 静流。

準の師匠は、天錠家執事 裏ボクシング界の死神 篁^{たかむらりよう}了。

忠勝の師匠には、同じく天錠家執事の鉄流拳法^{くろがね}の使い手、甲賀^{こうが} 昌^{まさ}宗^{むね}がなった。

風間ファミリーは暁を支える事を目標に各々《おのおの》の修業の日々を過ごすのだった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

外伝その？ 『風間ファミリー、修業する』（後書き）

作者「うんじゃ、今日も反省猫道場はじまるよ！」

百代「なんだ、そのテンションは……」

作者「テンションも上がるさ、みんなを魔改造できるんだからw」

百代「まあ、他のやつらが強くなっていくのは私も嬉しいしな。

なんせ、闘える相手が増える！」

作者「はいはい、よかったね〜これだから戦闘狂は」

百代「駄作者……私に喧嘩売ってるのか？」

作者「いいのかい？ そんな反抗的で」

百代「ほう、随分余裕だな」

作者は百代に近寄り、ある事を耳打ちする。

百代「なっ……、卑怯だぞ駄作者!!」

作者「ははは！ 卑怯で結構」

百代「くそ〜!! あーむかつく!!」

作者「おいおい、近くの人に当たるなよ」

百代「これが当たらずにいられるか〜！」

作者「まあ、落ちつけ……言っ事を聞けば考えるから」

百代「ほ、本当か!〜！」

作者「ういっい、ということで、次回予告よろしく〜」

百代「わかった、次回 第4話 『完成! これが俺の剣術だ!〜!』
でまた会おう!〜」

作者「(本当に暁ネタで百代おちよくるのはおもしろいな、ケケケケケw)」

百代「ムッ……今、ム力つく事かんがえなかったか?〜」

作者「いや別に……(ヤベ〜、とりあえずあまりいじらないでおこう、本気になったら俺死ぬし)」

第4話 『完成！ これが俺の剣術だ！』 (前書き)

ということだ、ついに暁のオリジナル剣術完成です！

俺はこの修業に入る前に氣と魔力を封印した。

理由は素の力だけで強くなりたかったからだ。

そしてやっと完成した俺だけの【剣術】を。

創

「暁君。とうとう完成させたんだね」

暁

「はい……」

創の問いに暁は静かに答える。

創

「では、私と一度仕合してもらえないだろうか？」

暁

「なぜ？」

創さんは、かなり温厚な性格で率先して闘うような人ではない。

創

「君の作った【剣術】がどんなものか。

私も一剣士としてかなり興味あるのだよ」

暁は少し考え、

暁

「わかりました。ただし条件があります」

創

「なんだい？」

暁

「由紀江にもこの仕合を見せてください」

創

「それはなぜだい？」

暁

「由紀江に一度真剣勝負とは何か、見せたほうがいいと思います。それに彼女には才能があります。いつかあの【涅槃寂靜】を会得できる素質を持つてる」

創

「なぜ、それを？」

涅槃寂靜とは、黨の剣の中でも最高位の技。

歴代の継承者達でも会得不可能と言われる正に【武】の極み。

暁

「うちの家は、いろんな武術の知識を持っています。その中に黨の剣も書かれていた物があつたのです」

これは、暁の嘘である。暁がルカにもらった知識に黨の剣の事があり、

実際に黨の剣がかかれた書物など存在しない。

創

「しかし、黛の剣は一子相伝。外部に漏れる事はないはずだが……」

暁

「私もかなり昔の事なんで真実は知りません。

それにその書物は火事で燃えてしまいましたから」

天錠家では昔、ボヤ程度だが火事があった。

その事を創は知っていたので勘違いしてくれた。

創

「——そうか、それは残念だ」

暁

「すいません、こちらの不注意で」

創

「いや何、むしろ燃えてくれてよかったのかもしれない」

暁は心が痛んだが、心の中であやまって、

暁

「……そうですね」

そう言うしかなかった。

創

「では、早速で悪いのだが、いいかね？」

暁

「はい、こちらはいつでも」

そついつて、創と暁は居間から道場へ移動した。

—— 数分後

由紀江を道場に呼び、

暁と創は、道場の中央で相対す。

由紀江も二人の試合に神妙な面持ちで正座して見ている。

創

「それでは、相手が降参もしくは気絶したら終わりという事でいいかな？」

暁

「はい、それでかまいません」

暁と創は木刀を構え、

創

「いざ、尋常に——」

暁

「勝負！！！！」

二人の闘いの幕が開いた。

先に攻撃を仕掛けたのは、創のほうだった。

創は、疾風の如く速い斬撃で暁を斬ろう向かってくる。

しかし、暁はまったく臆することなく、自分に襲いかかってくる全ての斬撃を

木刀で受け流す。

創

「ほう、ならこれはどうだ！」

そう言うのと先程の斬撃よりかなり速い言うなれば雷光の如く鋭く速い突きを繰り出してくる。

それでも暁はなんなく木刀の背の部分で受け流して行く。

創

「これなら！」

そういうと創の両手が常人には見えないくらいの速さで斬撃を放った。

暁

「（これは！ 神速の八連撃！ でも……）」

暁は、その斬撃全てを木刀一閃で薙ぎ払った。

創

「なっ！」

暁

「俺には遅い……」

そう言つて暁は、中段の構えから木刀を腰に差し居合の構えを取る。

暁

「……すいません、これで終わらせてます。

あと、防御しっかりしててくださいね。

たぶん——死にますから」

そう言つた瞬間、暁から凄まじい殺氣が放たれる。

由紀江

「あわわわわ……」

由紀江は、暁の殺氣に当てられてガクガクと震えている。

創も殺氣に当てられて一瞬動けなくなるが、氣を振り絞りなんとか耐えて

防御の構えを取つた。

暁

「では——『はさいじん ひゃっきごく破砕刃・百鬼哭』！」

暁の姿が消え、創のすぐ後ろに木刀を抜いた状態で後ろ向き立っている。

創

「君は何をやって――」

そう言った、次の瞬間、創の持っていた木刀の刃の部分が
ピシピシ音を立てて、粉々に砕かれた。

創

「っ……！」

創は、呆然となる。

創

「い、いまのは……まさか！」

暁

「いえ、あれは涅槃寂静ではありません。その上です」

暁の言葉に創は驚愕の表情を浮かべる。

創

「涅槃寂静の上だって……」

暁

「驚くのも無理はありません。なぜなら、涅槃寂静はたしかに理論
上不可能な速さの技ですが、
それは一般的な認識です。俺の場合は、涅槃寂静以上速さも可能
なんですよ」

創

「暁君……君は一体……」

暁

「ただの代行者エージェントですよ……それ以上も以下でもないね」

創はそれを聞いて納得したようだ。

創

「なるほど、君もあいつと同じか。この試合、私の負けだ」

そういつて、創は自身の敗北を告げた。

こうして、暁と創の仕合は幕を閉じた。

創

「どうだった、由紀江」

創は由紀江にこの仕合の感想を聞いた。

由紀江

「はい、凄かったです！ 暁さんの斬撃も最初の一撃は見たのですが……」

それを聞いて、暁と創は顔を見合わせる。

暁

「由紀江は、あれが見えたのかい？」

由紀江

「はい、最初の一撃ですけど……それが何か」

それを聞いた途端、暁が笑いだす。

暁

「アッハハハ！」

いきなり笑いだした暁に由紀江は驚き、

由紀江

「なんで、笑ってるんですか？」

本人はどうやらわかってないらしい。

暁

「創さん……由紀江は物凄い剣士になりそうですよ、ハッハッハ！」

創はその言葉に嬉しいそうに

創

「そうだね、ふふふ」

笑いながら答える。

由紀江

「なんで、お父様も笑ってるんですか？」

まるでわからないとばかりに小首を傾げる。

その後5分間、2人の笑い声が道場内にこだましたのだった。

n
t
i
n
n
u
e
d
.....

第4話 『完成！　これが俺の剣術だ！』』（後書き）

作者「由紀江は、未恐ろしいな」

暁「本当だね、良く見えたなと思っぜ俺の本気の斬撃」

作者「さすが、黨十一段を超える娘だね」

暁「ああ」

作者「ということで、次回で加賀編も終わりです」

暁「そうなのか？」

作者「うむ、ということで次回予告よろしく」

暁「今回は、由紀江に友達作りをして俺は加賀を去る話だ。

次回 第5話 『松風誕生！　友達100人計画スタート！』
でまた会おうぜ！」

松風「やっと俺っちの出番だぜ！」

アンケート 中間発表

前回の『PVアクセス50000突破記念 アンケート』の中間結果を発表したいと思います。

アンケート内容：今後、この小説にでてきてほしいキャラは誰という事で、

今現在の一位は、鉄 乙女 5票

正に不動の人気です乙女さん！

続いて第二位がなんと二人。

第二位 橘 天衣 2票

もう一人の第二位は、な、なんとまさかのバルバトス。同じく2票

やはりあのキャラとア。ゴボイスがよかったのか。

続いて四位に召喚教師リアルバウトハイスクールの草？ 静馬 1票

まあ、かなり古い小説ですからねえ、分からない人多いかな。

まあ古本屋行けばあるかもしれないので、もし見つけたら読んでみてね。

ということで、まだまだ投票受け付けてますので、感想のところに投票してくださいね。

1人2キャラまでOKです。

ということでも中間発表でした。

第5話 『松風誕生！ 友達100人計画スタート！』（前書き）

ということで、みなさんお待ちせしました松風登場です。

第5話 『松風誕生！ 友達100人計画スタート！』

暁は、そろそろ黨家での修業を終え、一旦家に帰ろうと準備をしていた。

すると

由紀江

「あ、あの！ 暁さん！」

暁

「どうした、由紀江？」

由紀江

「今日、私に暁さん以外の友達ができました！」

暁

「お、やったじゃん！」

暁はそのことに喜んだ。

由紀江

「はい、暁さんの特訓のおかげです！」

暁

「で、その友達って言うのは？」

由紀江

「同じクラスのかぜはや
加瀬迅 実里ちゃんです。」

勇気を持って言ったら、友達になってくれました」

暁

「そっか、そっか、よかったな由紀江」

そういつて、頭を優しく撫でる。

由紀江

「あう……」

暁は由紀江の対人特訓を思い出していた。

まず、由紀江が笑う時、人前だとうまく笑えず、かなり怖い。

それを由紀江に見せた時かなり落ち込んでたな

そして、人前に出ても笑える練習や人前に出ても緊張しない練習や

色々やったな。

そのおかげで由紀江は、人並にできるようになった。

まだ若干緊張もあるが、そこまでひどくなくなった。

第一、普通に人前で笑えるようになった由紀江の笑顔は可愛い。

それと刀をいつも持ち歩いている癖も徐々に持っていていなくてもいいように

慣らせ、いまでは持っていていなくても平気になった。

まあ緊急時もあるので、俺が創造の力で作ったリストバンドを由紀江に

誕生日プレゼントにあげた。

このリストバンドは、見た目普通だが、何でも入る優れたものだ。

しかも、物が入っているのに重くならない。

正に身につけるのに最適な物なのだ。

それと例の馬のストラップ『松風』だが、

俺は、あれに超高性能人工知能を埋め込み、

自我を持たせた。

由紀江が腹話術しなくてもしゃべれる物凄く変なストラップと化してしまっただが、

まあ由紀江の相談相手にはぴったりだろう。

やはり由紀江と松風はペアだし。

でも、人前で松風としゃべるなとくぎを刺してある。

由紀江も前はどうしてかわかってなかったが、

人前でしゃべると引かれる事を経験した為、松風とは人前ではしゃ

べらなくなつた。

暁

「友達は出来たからもつこの特訓終わるか？」

暁がそう訊ねると

由紀江

「い、いえ、まだまだ人前に出ると上がるので特訓は続けたいです」

松風

「暁っち、まゆっちはこう言ってるけどどうする？」

暁

「んー、じゃ、目標決めよう」

由紀江

「目標？」

そう言つて、小首を傾げる。

暁

「なんでもいいぞ」

由紀江

「じゃ、歌でもあるじゃないですか、友達１００人……」

暁

「友達１００人か。それはいい目標だな」

松風

「まゆつち、チャレンジャーだな」

由紀江

「はい！ 私の目標は『友達100人作る事』を目指します」

暁

「お、いいね」

由紀江

「はい！ 今、暁さんと実里ちゃんだけだから残り98人ですね」

松風

「まゆつち、俺も付いてるぜ！」

由紀江

「ありがとう、松風」

暁

「おう、がんばれ！ またこつち来たら経過報告おねがいな」

それを聞いて、由紀江の顔が暗くなる。

由紀江

「そつか……明後日で暁さん家に帰るんですね」

由紀江がそう呟く。

暁

「又必ず遊びに来るよ。あ、そうだ。もし、川神に来たら俺の仲間

を紹介するよ」

由紀江

「暁さんの仲間ですか？」

暁

「ああ、結構おもしろいやつらだぜ」

そう楽しそうに言う。

由紀江

「どんな方たちなんですか？」

暁

「そうだな――」

それから暁の仲間たちの話をしながら夜は更けていった。

そして、2日後

暁は、創さんの運転で駅まで連れてきてもらった。

創

「また、遊びに来なさい。家族全員待ってるから」

暁

「はい！ 本当にお世話になりました」

暁は創に頭を下げた。

創

「では、元気だね」

暁

「はい、創さん達もお元気で」

由紀江

「あ、あの！ 暁さんお弁当作ったので電車の中で食べてください」

由紀江はそう言つと暁に弁当を渡す。

暁

「これ、由紀江の手作り？」

由紀江

「はい／＼／＼」

由紀江は顔を真っ赤にしながらそう言つた。

暁

「ありがとう、ありがたくいただくよ
では、また」

そう言つて、手を上げて、暁は改札に入つて行つた。

暁が行つた後、

創

「また、会えるさ」

由紀江

「はい……でも、今度は私が会いに行きます」

創はその言葉にうれしそうに

創

「暁くんだったらお前のお嬢さんにいいのにな」

それを聞いて由紀江の顔が真っ赤になる。

由紀江

「お、お父様！／＼／＼／」

創は娘のその様子に笑っているのだった。

松風

「やれやれだぜ……」

松風が呆れたようにつぶやいた。

こうして暁は加賀の地を出発し、一路、家へと帰るのであった。

e c o n t i n u e d ……

t o b

第5話 『松風誕生！ 友達100人計画スタート！』（後書き）

作者「ということで、由紀江がかなり進歩しましたねー」

松風「おい、駄作者！ 俺の名前が題名に入ってるのに会話少ししかねえじゃねーか」

作者「だって、一応顔出し程度だしおまえ」

松風「ガン！！！！ そいつはないぜ大将！」

作者「誰が大将だ！ ということで、次回からまた川神市を舞台にお送りします」

松風「次回、第6話 『暁帰省！ 板垣四兄弟登場！』 でまた会おうぜー！」

作者「またねー」

第6話 『暁帰省！ 板垣四兄弟登場！』（前書き）

今回は、板垣四兄弟でできます。

亜巳ですが、かなり性格変わりますので本家のほう好きな方はご注意ください。

第6話 『暁帰省！ 板垣四兄弟登場！』

暁が石川から帰ってきて2日後から今回の話は始まる。

—— 暁の部屋

暁

「—— 例の件はどうだい、柳子さん？」

椅子に座り、執事の楠 柳子に訊ねる。

柳子

「—— はい、今、全部の配置が終わりました」

そう静かに暁に告げる。

暁

「では、ミッション・スタート作戦開始……」

暁が柳子にそう言った。

柳子

「ハッ！」

そう言つて、柳子は、部屋から姿を消した。

暁は、椅子から立ち上がり、窓を見る。

暁

「—— あんな事をするやつらを生かしてはおけない……」

そう呟いた。

——翌日。

超大型シンジケートの各地の拠点壊滅およびボス並びに構成員が、全員捕まった事が大々的に今日のトップニュースとして新聞およびテレビで流れている。

暁は、川神市の工業地帯近辺に向かう。

ここは、ゴロツキなど一般に社会不適合者の吹き溜まりになっている。

暁は、旅に立つ前にここに一度来ていた。

その話については、今度話すでしょう。

通りを歩いて行き、目的地のアパートのある一室に着く。

コン…… コン……

暁はドアを叩くと

??

「は〜い」

一人の背の高い少女がドアから出てくる。

暁

「よお！ 辰子」

暁は手を上げて辰子と呼んだ少女に挨拶をした。

辰子

「あゝ、暁くんだゝ」

辰子は嬉しそうにそう言った。

??

「お！ 暁じゃねえーか！ 久しぶりだなゝ！！」

辰子の妹の板垣いたがき 天使だ。えんじえる

暁

「天使！ 久しぶりだなゝ」

暁も嬉しそうに天使に声をかける。

天使

「どうしたんだ、今日は？」

暁

「ああ、亜巳さんと竜は？」

辰子

「竜ならそろそろ帰ってくると思うよ、姉さんは病院の方に行ってる」

暁

「おじさんとおばさんのかい？」

辰子

「うん！」

暁

「じゃ、待たしてもらっていいかな？」

天使

「ああ！ いいぜ！ 暁、ゲームしながら待とうぜ！」

天使は根っからのゲーム好きだ。

暁

「いいね、うんじゃおじゃましますっ」と

辰子

「あいあい〜」

暁は、板垣家に入り、天使と格ゲーをしていると

ドアが開く音をする。

ガチャ！

辰子

「帰ってきたみたいだよ」

すると竜兵と一緒に亜巳が帰ってきた。

竜兵

「暁じゃねーか、どうした？　とうとう俺の物に——ムガッ！」

竜兵が言い終わる前に亜巳が竜兵の頬にストレートを入れた。

竜兵

「なにすんだよ！　亜巳姉ー！！」

亜巳

「あんたが、あほな事言うからだよ！　（小声）それに暁は私の……ものだよ……」

暁

「あははは……」

暁は、竜兵と亜巳のやりとりに苦笑いをした。

亜巳は、暁の方に向き、

亜巳

「暁、——ニュースの事だろ？」

暁

「ああ……やっと終わったよ」

暁のその言葉に亜巳は安堵の顔をして、

亜巳

「これで、父さんと母さんも報われる……」

暁

「亜巳さん……」

亜巳

「……ところで用事はそれだけかい？」

暁

「いや、亜巳さん働き口探していたよね？」

亜巳

「ああ、それがどうかしたのかい？」

暁

「うちでメイドとして働かないかい？」

亜巳

「——へ？」

亜巳は暁の言葉に一瞬意味が分からなかった。

亜巳

「あんたのどこって…… えっ、天錠家で？ 無理無理無理無理！
！」

亜巳は顔を左右素早く動かし手を左右に素早く振った。

暁

「無理じゃない。うちは一から指導するから大丈夫！
それに御給金も」

そう言って、暁は懷から電卓を出し、

給料の金額を提示する。

その給料の額に、

亜巳

「え……桁がおかしいかい？」

暁

「それ見習の御給金ね」

亜巳

「はい!？」

亜巳はかなり驚いた表情で暁を見る。

天使

「すっげえー……」

竜兵

「まじかよ……」

辰子

「ZZZ……」

天使と竜兵は驚いているが、辰子は寝ていた。

暁

「で、どうするの?」

亜巳は、少し考え、

亜巳

「わかった……暁のところで世話になるよ」

亜巳は笑顔でそう言った。

暁

「そうか、よかった。あと、全員、家経営のマンションに引っ越してもらおうから」

引っ越しの代金とかは家持ちだから心配しないで、マンションの家賃も格安にしているから

大丈夫だよ」

それを聞いて亜巳は呆気にとられてた感じで

亜巳

「そ、そうかい? じゃ、お願いね」

暁

「まかせてよ!」

そう言って、暁は胸をドンと鳴らした。

こうして、板垣四兄弟は、暁の所に世話になることになった。

長女の亜巳は、暁のメイド見習いとして、暁の川神の方の屋敷で働き、指導役として

天錠メイド第2部隊No.2の南雲 来夏の元、一人前のメイドになる為、修業中だ。

次女の辰子と長男の竜兵と三女の天使は、俺と一緒に学校に行くことになり、

辰子と竜兵は俺と同学年。天使は一学年下だ。

風間ファミリーの面々に彼らを紹介し、彼らを仲間達が受け入れてくれて、

今では、3人とも風間ファミリーの一員だ。

辰子は、大和がお気に入りらしくよく小雪と取り合いをしている。

竜兵は、冬馬に一目惚れし、告白するも振られるがまだあきらめてないらしい。

又、ガクトとはいい喧嘩友達みたいだ。

二人でよく筋トレしているし。

天使は、モロとゲーム仲間になり良くつるんでいる。

それと3人も俺に内緒でどうやら武術を習っているようだ。

辰子と天使は、川神院の門下生となり、釈迦堂さんが稽古をつけている。

竜兵は、警備部担当の八極拳の使い手、黄^{こっ}烈堂^{れつどう}に師事する事になったようだ。

他のメンバーも結構強くなっているようだし先が楽しみだ。

ちなみにみんな俺が知らないと思っているが、実はみんなが修業している事は知っているのである。

たまたま、川神院に行った時に鉄爺が口を滑らしたのだ。

俺の為って言うのが分かってるから言えないんだけどね。

それはそれとしてこれで後会ってないのはあの人達か……。

さて次はどこに行こうかな？

c o n t i n u e d

t o b e

第6話 『暁帰省！ 板垣四兄弟登場！』（後書き）

作者「ということで、板垣家を暁陣営に取り込みましたな」

暁「取り込んだなんて人聞きの悪い……」

作者「まあ、今回は、ちょっとわからない点が多い感じになってしまいました」

暁「そういえば、そうだな」

作者「まあ次の話でこの話の分からない点がわかるようになります」

暁「という事は、俺と板垣四兄弟との出会いの話か？」

作者「そうです。では次回予告よろしく」

暁「次回、第7話 『暁激怒！ 龍をぶっ潰せ！』でまた会おう！
って

龍ロウ「ってなんだ？」

作者「それは次回わかります」

第7話 『暁激怒！ 龍へロンをぶっ潰せ！』（前書き）

今回は、前回の話の発端になった板垣四姉弟と初めて出会おうお話です。

第7話 『暁激怒！ 龍へロン』をぶっ潰せ！』

今回の話は、俺が旅に出る数日前まで遡る。

その日、俺は商店街の裏通りを1人で歩いていると

ある女性とぶつかった。

ドンッ！

暁

「つとと……すみません」

暁がぶつかった女性に謝ると

??

「こちらこそ、すまないねえ」

そう女性が暁に謝る。

女性は見た所、俺より年上で見た所高校生くらいだろうか

でもしゃべり方は大人びており色気を感じさせる雰囲気を持っている。

前髪は左だけ目の部分にかかっており、目は鋭いがかなりの美人だった。

??

「じゃあ、これで……」

そう言うとは女性はそそくさと暁と反対方向へ歩いて行った。

暁も歩き出そうとしたがすぐに異変に気付く。

暁

「財布が——ない!」

そう言つて、先程の女性が歩いて言つた方向を振り向くと

暁は、

暁

『追跡者の目!』
チエイサー・アイ

暁は、先程のぶつかった女性の特徴を鮮明に思い出し、追跡者の如く、目で

先程の女性を追う。

暁

「……いた!」

ここから5kmくらい離れた工業地帯に先程の女性が入って行くのが見えた。

暁は、周りに人がいないのを確認し、女性が入った工業地帯の入り口をイメージし、

左手の人差し指と中指を自分の眉間に置き、目を瞑ったその瞬間、その場から暁が消える。

そして女性が入っていた工業地帯の入り口に一瞬にして暁は到着した。

そう、週間移動を使っただ。

暁は、工業地帯に足を踏み入れると数分後、ゴロツキ達が、行く手を阻む。

ゴロツキ1

「おいおい、坊主、ここはお前のようなガキが来るところじゃねぞ？」

ゴロツキ2

「帰って、ママのおっぱいでもしゃぶってな、ギャハハ！」

ゴロツキ達は暁をバカにしたような口振りでそう言った。

暁

「はあ〜……どけ」

ゴロツキ3

「……ああ？」

暁

「聞こえなかったか？ どけと言っている」

ゴロツキ1

「なんだと！ このガキア！」

ゴロツキが拳を暁に振りかざそうとした時、

ドクンッ！

暁の目が大きく開いたするとゴロツキ達が次々と倒れて行った。

暁はゴロツキ達を道の端にやるとそのまま歩きはじめた。

そのとき、

??

「待ちやがれ……そこのお前」

黒髪で短髪の暁と同じくらいの少年が暁を呼び止める。

暁

「……なんだ？」

暁が振り向くと

呼び止めた少年は獰猛な笑みを浮かべ、

??

「お前、強いな。俺とタイマンしないか？」

暁

「俺にはお前と戦う理由がないが？」

??

「俺の手下がやられたんだ、頭の俺がここでお前を見逃すわけにはいかねえ」

曉

「ふむ、お前名前は？俺は天錠 暁」

??

「板垣 竜兵だ。よろしく……なああ！」

そう言って、
暁に殴りかかってくる。

暁は、竜兵から繰り出される一撃必殺の拳を軽々避け、

竜兵に強烈なボディブローを喰らわせた。

ドンッ！！

竜兵

「グハッ！」

竜兵は、暁のボディブローを喰らいその場に沈んだ。

[illegible]

10分後、竜兵が目を覚ます。

竜兵

「……イツツ、ここは………そうだ！ あの野郎と」

竜兵が目覚めそう呟くと

暁

「目覚めたみたいだな」

竜兵のすぐ横に暁がいた。

竜兵

「てめえ……」

竜兵は暁を鋭い目つきで睨む。

暁

「さて、目を覚ましたし、さっきの女性を探すか……」

暁がそう呟いて背を向けた瞬間、

竜兵

「待てよ……もう一度名前教えてくれ」

暁

「天錠 暁……」

それを聞いて

竜兵

「暁か……惚れたぜ」

正気に戻った竜兵が暁に訊ねる。

竜兵

「その女つてのはたしかにここに入ってきたんだよね？」

竜兵の左眼には立派な青あざができていた。

暁

「……ああ、間違いない」

それを聞いて、竜兵が苦虫を噛んだような顔になった。

竜兵

「……もしかなくてもうちの姉貴だな、それ」

暁

「どついう事だ？」

暁は竜兵がそういう理由を聞いた。

なんでも数年前、両親が竜兵を含める4人を置いて失踪。

以降、一番上の姉の板垣 亜巳が家計を支えていた。

今までは真面目に働いていたのだが、勤めていた先が倒産し、家族全員路頭に迷うのは避けるために、今回の突拍子もない行動に出たのだろうと竜兵は言う。

暁

「ふむ……竜兵、頼みがある。その亜巳さんに会わせてくれないか？」

竜兵

「……いいけど、まさか警察に連れて行くってんじゃないか」

暁

「いや、ちょっと気になる事があつてね。もちろん俺の財布の事もあるが、

警察には連れて行かないさ」

それを聞いて竜兵はホッと胸を撫でおろす。

竜兵

「わかった。こっちだ。着いてきな！」

そう言つて、二人は一路、竜兵の家に行くことになった。

竜兵たちの住むアパートは木造の2階建てで建ってからかなり立つのだろう。

それくらい古かった。

竜兵の住む部屋は、2階の201号室だ。

部屋の玄関の前に着くと竜兵が玄関を叩いた。

ドンドン！ ドンドン！

竜兵

「俺だ、誰かいるか？」

竜兵が呼び声を上げると

??

「は~~~~い」

間の抜けたような感じの女の子の声がする。

すると青髪のどこか眠そうな背の高い女の子が玄関を開けて出てくる。

竜兵

「辰姉、亜巳姉帰ってきてるか？」

辰子

「うん、帰ってきてるよー。で、隣の子は誰？」

竜兵

「ああ、俺のこ「違います！」チッ！」

舌打ちしやがった。

暁は気を取り直して、

暁

「天錠 暁と云います」

辰子

「板垣 辰子だよー」

辰子は、にへらと笑いそう答えた。

??

「辰ー！ 誰か客でも着てるのか……いい！」

部屋の奥から出てきた亜巳は、暁の顔をみてヤバいといった表情を浮かべた。

その後、中に通された暁が亜巳に

暁

「先程はどうも。すいませんが、財布だけ返してもらえませんか？」

それを聞いて亜巳が怪訝な表情を取る。

亜巳

「ん？ お金はいいのかい？」

暁

「はい、お金より財布のほうが大切なんで」

亜巳

「へえ、そんなに高いものなのかい？ 財布の中身も結構入ってたし」

暁

「いえ、それは妹からの贈り物なので」

そう聞いて、亜巳はバツの悪い顔をして、

財布を曉に投げた。

亜巳

「そら！ これで用は無くなっただろう？ さっさとお帰り、
ここはあんたみたいなボンボンの来るところじゃないよ」

そつづきらばつに言つと

曉

「心配してくれるんですね……」

亜巳

「はあ？ ば、ばかなこと言っんじゃないよ！
ただのきまぐれだよ」

あきらかに動揺した口調で亜巳が否定をする。

曉

「ははっ！」

その姿がおかしくて笑ってしまった。

亜巳

「な、何笑ってんだい！」

曉

「怖い人かなと思ったんですが、結構可愛いんですね」

亜巳

「なっ／＼／＼／（赤面）」

その言葉に亜巳の顔が赤くなる。

暁

「本当にかわいい……」

その瞬間、亜巳の顔がボン！と湯気が出そうなくらい真っ赤になる。

亜巳

「おちよくるのも大概にしておきよ！」

暁

「おちよくってませんよ、事実を言ってるのに」

亜巳

「なっ／＼／＼／」

亜巳は当等固まってしまった。

着信音【水。黄門のテーマ】

すると暁の携帯の着信音が部屋全体に響いた。

暁

「失礼」

そう言って、携帯に出る。

暁

「もしもし、来夏さん？　！　それで！
フンフンフン……場所は……わかった。
じゃ、すぐ連れて行くよ」

そう言って、携帯を切った。

暁

「亜巳さん達、今から外出れる？」

それを聞いて、亜巳が怪訝そうな顔になる。

亜巳

「まさか、警察に行くんじゃないだろうね？」

そう言って、暁を睨む。

暁

「違う違う、ちょっと違う場所にね」

そう言つと玄関のドアが開く音がする。

??

「ただいま、あーつかれた」

そう言つて赤毛ツインテールの少女が家に入ってくる。

辰子

「天、お帰り」

天使

「ただいま〜って誰だこいつ？」

竜兵

「俺のこい「違っつて！」チツ！」

暁

「天錠 暁です。よろしく」

そう言つて、天と呼ばれた少女に微笑む。

天使

「！ よ、よろしくな／＼／＼／＼（なんて言う顔してやがる！）」

暁の微笑みは誰もが見惚れます。

亜巳

「帰ってきたね、天。暁だっけ？ この子の名前は板垣 天使^{えんじえる}」

天使は、それを聞いて仏頂面になる。

暁

「天だっけ？ 自分の名前嫌いかな？」

それを聞いた天使は、

天使

「ああ！ 嫌いだね、誰がこんな恥ずかしい名前好きなもんか！」

それを聞いた暁は、

暁

「いい名前だと思うぞ！ 天かわいいし」

天使

「なっ！／＼／＼／ ば、バカヤロウ！ そんな心にもない事を言うんじゃない！」

暁

「天はかわいいぜ、俺が保証する」

暁がそう言つと天の顔は、真っ赤になり、先程の亜巳みたいな状態になった。

亜巳

「で、どこに連れていくんだい？ 私たちを」

暁

「それは着いてからお楽しみ」

そう言つて、暁と板垣家の4人は、家から出たのだった。

工業地帯の入り口から数十メートル先に黒塗りの1台のリムジンが止まっている。

暁に気付いた運転手が、運転席から降り、後ろのドアを開けて待っている。

暁

「いつも御苦労さん、藤原さん」

暁がそう言つと藤原という運転手が顔を上げ、

拓海

「いえ……」

その光景に板垣家の4人は驚いている。

天使

「すげー長い車だ」

辰子

「ZZZ……」

竜兵

「こりゃ、豪勢だな」

亜巳

「暁、あんたって一体……」

亜巳がそう聞くと

暁は、肩目を瞑り、口到人差し指を当てて、

暁

「ただの代行者^{エージェント}さ」

と言つた。

亜巳

「これはどういう事だい！　なぜ、私たちを捨てた親がここにいるんだ！」

辰子

「お父さん……　お母さん……」

竜兵

「どついう事だよ、一体よ！　答えろ、暁！」

暁

「わかった、説明する」

暁は、亜巳達の両親がなぜこんな状態になって寝ているのか説明した。

亜巳達の両親は、亜巳の高校受験や子供達の育成費を稼ぐため、

ある高収入の仕事をする事になった。

その仕事内容とは新薬のモニターだったが、

実際行ってみるとこの仕事に集まった人の臓器を取り出し、

裏で高額で売りさばく為のウソの仕事だったのだ。

それで両親たちは、睡眠薬で眠らされている間に、

身体から臓器という臓器を取り出され、

取り出すものが無くなった為に証拠隠滅の為に殺されそうになっていた所を

暁と従者部隊の面々が保護したのだ。

それを聞いた亜巳達は茫然となる。

亜巳

「な……何かい？　じゃ、父さんや母さんは私たちを捨てたんじゃなくて……」

暁は、黙ったまま頷き、

暁

「帰れなかったただけだ……それにこれを……」

暁の手には、ぐしゃぐしゃになった手紙と所々破れているプレゼントの箱があった。

亜巳は、それを受け取り、ぐしゃぐしゃになった手紙を開けて、読み始めた。

亜巳へ

高校入学おめでとう。

いつも苦勞をかけてすまないな。

これは、高校入学のお祝いだ。

気にいってくればいいが、

これからも苦勞かけれると思うが、

一緒に頑張ろうな

父より

それは短い手紙だった。

亜巳は、プレゼントの箱を開けてみると女性用の腕時計が入っていた。

ポタツ……ポタツ……

手紙の上に涙が落ちる。

亜巳

「ご、ごめんね……ごめんね……疑ったりして……」

そのあと、病室からは板垣家4人の泣き声が響き渡った。

暁は、それを見て、病室に出た。すると、

柳子さんが、病室の外で待っていた。

暁

「どこのやつらかかったかい？」

柳子

「あれをやったのは、【龍^{ロン}】のやつらです」

暁

「龍？」

柳子

「全世界の裏を牛耳る超大型のシンジケートの一つです」

暁

「そうか……」

そう言っていると暁の氣が一気に高まる。

握った拳もかなり強く握っているようで、手から血が出ている。

暁

「こんなむごい事をするやつらを見逃しちゃいけないよね」

柳子

「……はい」

暁

「従者隊、全員に通達！ 【龍】狩りだ！」

柳子

「ハッ！」

そう言っていると柳子は、その場から消えるようにいなくなった。

暁

「俺を怒らせたんだ。その罪あがなってもらうぞ【龍】よ」

その後、龍は、暁と従者隊によって、壊滅させられた。

【龍】のボスとその部下およそ40000人は捕まった翌日、

死ぬ事よりも辛い事を経験し、今は、刑務所に入って、真面目に罪を償っているらしい。

【龍】の幹部だった男はこう語る。

『金色の魔王が来る！』と……

o n t i n u e d ……

t o b e c

第7話 『暁激怒！ 龍へロン』をぶっ潰せ！』（後書き）

作者「ということで、シンジケート1つ潰しちゃったよ……」

お前らただけムチャクチャなんだ」

暁「そうは言ってもな、書いてるのお前だし」

作者「まあそうなんだが、とりあえず、スレてない亜巳姉って素敵
！」

暁「お前、Sだからな。同じSは苦手か？」

作者「かなり苦手だドンドコドン！」

暁「とりあえず、これで板垣編が終わったな。次はどこ行けない
んだ？」

作者「えーと、次は京都に行ってもらおうか！」

暁「京都？ 誰かいるのか？」

作者「あい！ 当等あの我儘娘登場です」

暁「次回、第8話 『暁、雅な我儘娘を教育する』でまた会おうぜ」

？「やっとな此方の出番かのう」

作者「お楽しみに」

第8話 『暁、雅な我儘娘を教育する』（前書き）

ということ、まじこい最強ヘタレクイーンのあの人が登場です。
今回はどうなることやら……それではどうぞ！

使用人の案内により暁は、ある客間に通される。

数分後、家主の不死川ふしかわ 流石ながれが客間に入ってきた。

暁

「はじめまして、天錠 暁と申します」

流石

「不死川 流石だ。君が、総一殿のご子息かね？」

暁

「はい、父とはお知り合いだとか」

流石

「幼馴染のようなものだ。総一殿は元気かね？」

暁

「はい、今はL Aで仕事をこなしていますが」

流石

「息災なら何よりだ。それより総一殿から聞いたと思うが、うちの娘の心の事なんだがね、それはそれはかわいくてね——」

流石は、それから娘の心の自慢話を延々としゃべり続け、

暁が内心呆れた感じでそれを聞く事約30分たった頃に

流石

「おっと、いかな。本題からそれってしまった……実は、そのかわいい心

なんだが、私たちが蝶よあれよとかわいがりしすぎたせいか。
少々人を見下すような考えのよく言う選民思想を持ってしまっ
てねー

それを直す為に総一殿にお願いしたわけだ」

暁は、流石の話を聞き、暁は内心ガッツポーズを取る。

なぜなら、暁が神の代行者になる前にこのまじこいをプレイしてい
て、

心のへたれっぷりが好きだったのだ。

暁

「……わかりました。引き受けましょう。

お嬢さんはいまどちらに？」

流石

「今の時間だとちょうど家の道場で柔道の稽古をしているはずだ」

暁

「分かりました……案内お願いしますか？」

暁がそう言つと流石は、手を2回たたき、使用人を呼んで、

暁を道場に案内させた。

道場に着くと、ちょうど柔道の稽古が終わったようだった。

暁が道場に足を入れると

心

「……ん？ お主は誰じゃ？」

道場に入ってきた暁に心が訊ねる。

暁

「今日からあなたの教育係としてやってきました天錠 暁です」

そう言つて、暁はいつもの微笑みをした。

心

「／／／／（赤面）そ、そうか。此方は、不死川 心じゃ」

心は、顔を赤くし、照れた感じ暁に自分の名前を告げた。

これが、二人の初めての出会いであつた……。

その日から暁による不死川 心のちょうきょ……もとい教育が始まつた。

バシンッ！

心

「なぜ、頭をハリセンで此方が叩かれなきゃならんのじゃ！」

暁

「それは、心さんが、人を見下す発言をしたからです」

心

「此方は選ばれた雅な存在じゃ。庶民の事など知らん」

バシンッ！

再び、心の頭を暁はハリセンで叩いた。

心

「い、痛いじゃ！」

暁

「まず今の心さんは雅でもなんでもありません。
ただの我儘娘です」

心

「なっ……！」

暁

「雅とは上品で優美なこと。または、そのさまを差します」

心

「此方にびったりではないか！」

怒鳴る心がそう言つと

暁はその言葉に呆れた表情で

暁

「いいですか？ 上品で優美ですよ？

どう見たら心さんがそんな感じなんですか？

いつも人を見下し我儘放題いつてるあなたのどこが、
雅なんですか？」

心

「ぐぬっ！」

心は暁の言葉を悔しそうな表情で聞き、暁が正論を言ってるので言い返す事が出来ない。

暁

「もし本当に自分が選ばれた雅な存在と言いたいのなら、その考えを捨てて、本当に雅で優雅な心の広い人になりなさい！」
暁がそう強く言うとは心は驚いた表情をし、すぐに落ち込んだ顔になる。

そして心が口を開いた。

心

「……此方も本当に雅で優雅な心の広い人になれるかのう？」

それを聞いて、暁は微笑み、心の頭を優しく撫で、

暁

「大丈夫、俺が教えますから……ね？」

暁は沈んだ心の顔を覗きこみ、笑顔で

暁

「ね？」

暁

「それなんだが、俺も色々回らないといけないんでまた遊びに来るから」

そう言って心の頭を優しく撫でる。

心は納得言ってなかったがしびしび、

心

「むう……。絶対じゃぞ！」

暁

「あ、そっだ！」

暁は、ある事を思い出し、

心

「な、なんじゃ？」

いきなり声を上げた暁を驚いた表情で訊ねる。

暁

「よかったら、俺と友達にならないか？」

心

「へ？ 友達？」

暁は心の言葉に頷く。

暁

「そう、友達だ！」

心は、それを聞いて内心嬉しい気持ちだったが、テレが勝ってしま
い、

心

「ふ、ふん！　そこまで暁が此方と友達になりたいならし、仕方な
いのう」

こうして暁と心は友達になり、高校に上がる時は、川神学園で再会
しよう

という約束をしたのだった。

心とそんな約束をしていた頃、

—— 川神市

百代

「！　なんか、暁にまた女の影を感じる！」

一子

「わたしも感じたわ！」

修業中にその気配を感じた川神姉妹。

—— 静岡

京

「む……！　また暁が女の子のフラグを立てような気が……」

バキッ！

手に持っていたシャーペンを握りつぶして黒いオーラを出している京。

周りの同級生及び友達は京のその雰囲気にはガクガクブルブル震えるのだった。

——石川

由紀江

「はう……。暁さんに又新しいお友達が……」

松風

「相変わらず天然の誑しだな。暁はー」

——暁の屋敷

涼香・来夏・亜巳

「……！！ 暁様に女の気配が」

柳子

「……やれやれ」

感じ取ったメイド三人と呆れる執事が一人。

——そして再び伏見

暁

「ハックシユン！」

心

「暁、風邪かう？」

暁

「？　？　？」

暁は、暁の知り合いからの強い念を一瞬感じたが、

気のせいだと首を振って、再び心の教育を再開するのだった。

t o b e c o n

t i n u e d

第8話 『暁、雅な我儘娘を教育する』（後書き）

作者「ということで、心、ゲットだぜ！」

暁「なにポ。モンゲットだぜ！つて的な事言ってるんだ駄作者」

作者「いやー、心、ヘタ可愛いし。作者もテンションかなり上がってます」

暁「それはいいとして、アンケートそろそろ×切りだな」

作者「明日（12/17）の19時までだね」

作者「ということで、後3話くらい後にアンケートの上位1位と2位のキャラが登場します」

作者「また、今後出してほしいというキャラいましたら、キャラ名とどの作品のやつなのかを

書いて、感想の所までお送りください。また、普通の感想もお待ちしております」

暁「とりあえず、次回 第9話『納豆小町現る!!』 まじこいSのあの方達登場だ」

作者「では、次回までさよならー！」

第9話『納豆小町現る!!』(前書き)

まじこいSのあの親子が登場です。
それではどうぞ

第9話『納豆小町現る!!』

不死川邸を後にした暁は、帰りの車を断わり、

徒歩で近くの駅に向かう途中、人だかりが出来ているのを目にした。

暁

「なんだ？」

暁は人だかりの方へ歩いていくと人だかりができている原因がすぐにわかった。

30台前半の男性と暁と同じくらいか少し上くらいの少女が、大道芸をしていた。

男性

「はいはい、こちらにご注目う。取りだしますは、一つのリング。

このリングを私の頭の上に置き、横にいる女の子が、この小刀でリングを狙います。見事リングに命中し成功したならば、

ご喝采とこちらの松永印の美味しい納豆を買ってくださいませ」

そう言って、二人は観客にお辞儀をする。

男性は、そこから300m程離れ、頭の上にリングを置き、目隠しをする。

少女も、小刀1本いや……10本両手に構え、真剣な表情になり、

少女

「行くよ、おとん！」

そう言つて、リング目掛けて小刀10本を投げた。

投げられた小刀は、絶妙のコントロールで目標に10本とも突き刺さる。

ザクザクザクザクザク……！

見事リングに小刀を命中させ、少女は満面の笑みでポーズを取った。

その瞬間、人だかりから歓声と拍手が起こる。

歓声

「ワアアアアア……！！！」

パチパチパチパチ……！

暁

「なかなかやるもんだな」

暁は素直に感心し周囲と同じく拍手をした。

少女

「はい、納豆を買いたい方は、こちらにどうぞ」

すると少女の目の前に観客の列ができる。

男性

「ご試食もあるので、よかったですらどうぞ」

暁

「納豆か。食べてみるか」

暁も列に並ぶ。

そして数分後、やっと暁の順番になった。

暁

「すみません、試食いいですか？」

男性

「はい、どうぞ」

小さな容器に粒のそろった綺麗な納豆を男性から渡された。

暁

「どれ。……うまい！」

暁は満面の笑みでそう叫んだ。

食べた瞬間、深みとコク、それと大豆本来の豊かな味わい。

そして、混ぜた時に香る納豆独特の匂い。

これをご飯と一緒に食べたら最高だろうなと暁は思った。

暁

「これ、自宅で毎日朝食食べたいな」

男性

「本当ですか。そりゃよかった。」

全国配送もしてるのでよかったらどうですか？」

男性の言葉に暁は頷き、

暁

「ぜひ、送ってください！」

男性

「じゃ、配送の手続きなどありますので、少し待ってもらえますか？」

暁

「はい、それはもちろん！」

暁は、他の購買客がいなくなるまで待つことになった。

40分後――

男性

「いやー、おまたせして申し訳ない」

悪びれた様子もなく笑顔で男性は暁に言った。

暁

「いえ、大丈夫ですから」

男性

「配送の手続きとかその他もろもろあるんで、うちの店に来てもらえますか？」

暁

「はい、わかりました」

暁は、男性達に着いていき、先程の場所から10分の所にある店の前に辿り着いた。

店には、【松永商店】という看板がかかっていた。

カチャ！ ガラガラガラ……

男性

「どうぞー。中へ」

男性が店の鍵を開け、引き戸を引いて暁を店の中へ招き入れた。

男性

「それではいらっしやいませ。ここの店主の松永 久信です。それでは、自宅に送られる納豆の個数などをこの用紙に書いてくださいね」

店主の久信から注文書を受け取り、暁は注文書に記入していく。

記入が終わると久信に注文書を渡し、久信が注文書の内容を確認する。

久信

「納豆100個を毎月定期的に……って100個！」

少女

「おおー、久々の大口だね、おとん！」

少女は注文書を見て喜んでいる。

暁

「うちは、納豆好きが多いので、1カ月にそれくらいないと
すぐなくなるんですよ」

久信

「へえー。えーつと送り先が川神市。。。の天錠……ん？」

天錠く？ 天錠って……君のお父さんの名前は総一かい？」

久信が驚いた顔で暁を見る。

暁

「はい、父ですけど……それが何か？」

久信

「な、なんだって!!」

久信は、驚愕の表情で叫んだ。

少女

「ど、どうしたのさ、おとん」

久信

「燕ちゃん。彼……君の許婚」

おもいつきり頭を叩く。

バシン！！

久信は、頭を押さえながらうつずくまり、

久信

「燕ちゃん、い、いきなり親を叩くなんてひどいじゃないか」

少女

「ひどいのはどっちよ！ 私も許婚いるとか初耳だよ！」

久信

「あ……言っの忘れてた……」

少女

「……殺す！」

少女は、般若の形相で久信を睨み、久信をぼっこぼこにした。

ガスバキボコバキガスボコ！！

それを苦笑いしていた暁は、携帯電話で自分の両親に連絡を取る。

P u r r u r r u r r u r r u ……！

ガチャ

総一

「暁か？ どうしたこんな夜更けに」

暁

「なあー、父さん。俺に許婚とかいるか？」

総一

「ああ！ いるぞ。松永 燕ちゃんと言ってな。お前より1つ年上の女の子だ」

暁

「……今日の前に本人とその親御さんいるんだが」

暁は、額に手を当ててそう言った。

総一

「おー、久坊いるのか！ じゃ、替わってくれないか？」

暁

「久信さん。父が話したいそうです……」

そう言つて、娘に殴られている久信に携帯を渡した。

久信

「お、総ちゃん元気ー！」

久信は、楽しそうに携帯で総一と話してる。

暁は、とりあえず、燕に歩み寄り、

暁

「お互い苦労しますねー」

燕

「本当にねー」

暁・燕

「はあ~~~~~……」

二人盛大にため息をついたのだった……。

燕

「私、松永 燕って言うんだ。君の名前は？」

暁

「俺は天錠 暁って言います。よろしくお願いします、燕さん」

燕

「あはは！ 燕でいいよ」

暁

「いや、俺の方が年下なんで」

燕

「え、そうなの？ でも呼び捨てでいいよ。
私も暁って呼び捨てにするし」

暁

「分かった。じゃ、燕で」

燕

「よろしくね、暁」

燕はウィンクしてそう言った。

暁

「でも、驚いたな、まさか俺に許婚いるとは……」

燕

「私も驚いたよ。聞いてなかったし」

暁

「それより、燕は何かやってるの？」

燕

「……どうしてそう思うの？」

暁

「自然体に見えて、実は隙がなかったりとか、さっきの大道芸の動作とか見てると相当武器関係の鍛錬積んでるとかね」

それを聞いて燕がびっくりした表情で

燕

「少し見ただけでそんなに分かっちゃうんだね、それに暁の方こそ、私より隙がないよ？」

暁

「鍛えてますから」

それを聞いて

燕

「あはは！ 私、暁の事気にいったよ！」

燕は笑いながら暁にそう言った。

久信

「おやおや、燕ちゃんがすぐ気に入るなんてめずらしいね」

いつの間にか電話が終わったらしい久信も会話に参加する。

燕

「あれ？ おとん、暁のお父さんと話してたんじゃないの？」

久信

「ああ、さっき話終わったよ。暁君、近々総ちゃん、川神の方の家に
行くからそのときにこの話を……って言ってたよ」

暁

「あ、そうですか。わかりました」

久信

「でも、世間って意外に狭いね」

暁

「本当ですね。びっくりしました」

燕

「私もびっくりだよ」

久信

「とりあえず、注文の納豆は、後日、君の家に送らせてもらつてよ」

暁

「わかりました。ありがとうございます」

そう言つて、暁は久信にお辞儀する。

燕

「そういえば、暁って私より1つ下だよね？ 学校は？」

暁

「それはね――」

暁は、今までの事を話した。

燕

「へえ」。暁って頭いいんだね」

暁

「いや、そんなんじゃないよ」

燕

「でもまさか黨十一段と知り合いとか川神院と知り合いとか
暁君って意外にすごいんだね」

暁

「いやいや、俺なんかまだまださ」

燕

「そんなに謙遜しなくてもいいのに」

久信

「それにしても川神院と黛かー。仕合とかしたの？」

暁

「はい、しましたよ。川神院では、鉄爺……川神 鉄心の孫の川神百代と師範代の釈迦堂さん
黛十一段とも仕合しました」

燕

「仕合はどうだったの？」

燕は身を乗り出して暁に訊ねる。

暁

「……全部、俺の勝ちです」

燕

「へ？」

久信

「は？」

松永親子の目が点になる。

そして次の瞬間……

燕・久信

「はiiiiiiiiiiiiiiii!？」

二人の声が店中に響いた。

久信

「……き、君は、どれだけ強いんだい？」

久信が、顔を引き攣りながらそう訊ねると

暁

「たぶん、このセカイで一番強いかと」

燕

「またまた〜！ 冗談でしょう？」

暁

「まあ、冗談じゃないんだけど」

燕

「うーん、信じられないな〜。

そつだ！ 暁、私と仕合しない？」

暁

「仕合？」

燕

「うん、そしたらウソかどうかわかるし」

暁

「……仕方ないか。いいよ」

暁の返答に燕は満面の笑みで、

燕

「じゃ、こっちに来てね」

そういうと燕は、暁の手を握り、店の外へ連れて行った。

久信

「……久しぶりの強敵か！。燕ちゃん張り切ってるね。
それにしても暁君、全く隙がないね。
これは燕ちゃん危ないかもね」

そう呟いて、燕達の後を追いかけて行った。

燕に手を引かれ、ただ広い原っぱに到着した。

燕

「ここで仕合しょ！」

暁

「わかった、じゃ、始めようか……」

暁がそう言った瞬間、

その場の空間が揺らぎ、空間が歪む。

燕

「え？ 何何？」

燕は突然の事態に慌てふためく。

暁は何かを感じ、拳を構える。

空間の歪みが元に戻った瞬間、突然、人がその場に現れた。

暁

「！あの羽織は！？」

袖口に山形の模様（ダンドラ模様）を白く染め抜いた浅葱色（水色）の羽織。

それは、その昔『誠』という文字が入れられた隊旗を靡かせ、

維新志士から恐れられた幕末最強の集団【新撰組】の隊服。

その羽織を羽織っているのは、暁と同じくらいの黒髪の少年だった。

少年

「ここは……どこだ？」

少年はキョロキョロと辺りを見回している。

暁は、構えをとき、突然現れた少年に話しかけた。

暁

「君は一体……」

少年は、暁の声に気付き、二人に近寄ってきた。

少年

「すまないが、ここはどこだい？ 俺の名前は、沖田 総司ってんだ」

少年が自分の名前を名乗った瞬間、

暁達は驚いた。

そうこの少年こそ、【新撰組】で最も強く恐れられた1番隊組長、“天才” 沖田 総司だった……

o b e c o n t i n u e d ……

t

第9話『納豆小町現る!!』（後書き）

作者「ということで松永親子登場でした」

暁「ちよつと待ってえええええ!!! スル―をするな!」

作者「いやだつて、出したかったんだもの。沖田」

暁「というかこれは俺も予想外だったからどう反応していいかわからないんだが」

作者「俺も一瞬やつちまったかなと思つたが、今は後悔してない!」

暁「とりあえず、なんとなくいやな予感するんだが……（――;）
」

作者「ふっふっふ! その予感は当たつてゐる。ということで次回、
第10話『暁VSやってきた天才!』でまた会いましょう
!」

暁「やっぱりかあ!!!!!!」

作者「まあ、仕方ないじゃん、お前主人公だし（-_-）」

暁「はあ~~~~、まじかよ」

アンケート終了のお知らせ

というわけでアンケート終了のお知らせです。

結果は、明日の20時頃に発表したいと思います。

投票して下さった皆さま、心より感謝いたします。

直、1位と2位のキャラは、それぞれ別の話で書く予定です。

今書いている話が終わり次第、第2位のキャラ、その次が第1位と
いった感じで、

登場させたいと思います。

それと第1位と第2位のキャラは、レギュラーに入りますのでお楽しみ

また今後、第2回アンケートも考えておりますので、皆さまよろしく
お願いします。

アンケート結果発表

ということ、昨日まで投票をお願いしていましたアンケートの結果発表を死体と思います。

Q・今後でてきてほしいキャラは、この中のキャラで誰がいいか。
(1人2キャラまで)

といった感じでアンケート取ってました。

それでは、栄光の第1位は……………鉄 乙女合計7票

これは、予想通りというか感じではないでしょうか？

作者も乙女さんは大好きです。

続いて、第2位……………橘 天衣合計4票

これは、作者も予想外でした。やはりアニメの影響かな？

真、他の順位は以下の通りです。

第3位バルバトス(テイルズ オブ デイスティニー2) 合計2票

第4位草？ 静馬(召喚教師リアルバウトハイスクール) 合計1票

第5位南雲 慶一郎(召喚教師リアルバウトハイスクール) 合計0票

第3位のバルバトスは、結構敵キャラとしては好きなキャラでした。

第4位と5位はやはり古い小説のキャラなので、分からない人多かったのかな〜というのが

あったと思います。

ということでアンケート結果により、第2位の橘 天衣は、3話先の話から登場、

乙女さんについては、天衣の後となるので楽しみに。

真、第2回アンケートも取りますのでよろしく願いします。

第10話 『暁VSやってきた天才!』（前書き）

PV100000突破しました。この作品を読んでいた皆さん様本当に心より感謝します。
ということで、近日またアンケートを実施しますので楽しみに。

第10話 『暁VSやってきた天才!』

当然、二人の前に現れた少年は、

少年

「すまないが、ここはどこだい？ 俺の名前は、沖田 総司ってんだ」

暁

「はい？」

燕

「え？」

総司

「俺、おかしいこと言ったか？」

そう言つて、驚いている二人を見ながら首を傾げる。

暁

「沖田 総司ってあの？」

燕

「新撰組1番隊組長である幕末志士達に恐れられた剣の天才で有名なあの？」

総司

「お、俺そついわれてるのか。照れるな」

そういつて、恥ずかしそうに照れている。

暁はそんな沖田 総司と名乗った少年にある違和感を感じる。

暁

「……一つ聞いてもいいか？ お前、男だね？」

それを聞いて総司の表情が変わる。

総司

「……今、なんて言った？」

総司は般若の顔になり威圧感が半端ない。

暁は、自分の失言に今気づき、額から冷汗をダラダラ流し始めた。

総司

「私は……女だあ！！！！」

そう言つて、持っていた刀の鞘で暁の顎をおもいつき天に突き上げた。

暁

「ぐはあ！！」

燕

「私はすぐ気付いたよ、アハハ！」

燕は、ケタケタと笑いながら言った。

暁は、顎を痛そうに摩り、恨めしそうな表情で燕に

暁

「イテテッ……わかってたなら、教えててくれよ、燕」

燕

「だって、教えないほうがおもしろそうだったから」

そうなのである。

この沖田 総司はれっきとした女性なのである。

一瞬美少年に間違われそうなキリッとした目と顔立ち。胸は控えめ、

しかも一人称が俺、これでは

大半の人が勘違いするのは無理もなかった。

総司

「おまえ、失礼なやつだな。俺は女だぞ」

まだカンカンに怒っている総司に暁は

暁

「勘違いして済まなかった。その事に関しては謝罪しよう」

そう言つて、礼儀正しく総司に頭を下げた。

総司

「へえー。素直に自分の非を認めるか。こちらで訂正するよ。」

失礼と言つて済まなかつた」

そう言つて、総司も素直に頭を下げる。

暁

「いやいや、俺が悪かつたわけだし。それよりも俺の名前は、天錠 暁だ。こっちは松永 燕」

燕

「松永 燕だよ。よろしくね」

総司

「改めて、沖田 総司だ。とりあえず、ここはどこだ？」

暁

「それなんだが、実は――」

暁は、総司に説明をした。

すると総司は驚き、

総司

「ここは、137年後の京だと!？」

暁

「ああ、間違いない」

総司

「たしかに暁達の格好も見た事無いものだな」

暁

「あとはおいおい、教えるよ」

総司

「それにしても俺は確か病で倒れて死んだハズなんだが……
なぜか姿も幼くなってるし……」

暁

「たしかにおかしいな20代で亡くなっただって聞いてたからな」

燕

「そつえば、そつだよね」

暁達は、首を捻って考えるが、

総司

「とりあえず、生きてるんだからいいじゃないか？」

燕

「それでいいの？」

総司

「まあ、考えてもわからないしな」

暁

「とりあえず、精密検査だけしとこうぜ。病気だったんだろ？」

総司

「精密検査？」

暁

「病院、総司に分かりやすく言うつと診療所のでかい版だな。そこで、全身くまなく調べてもらうんだ」

総司

「なるほど。診療所か」

そういつと暁が携帯を出し、ある人物に連絡をする。

総司

「それは？」

総司が暁の携帯を指さすと

燕

「あれは携帯電話といって、遠くの相手とお話ができる道具だよ」

総司

「なんと！ それはすごい！」

総司は素直に驚いている。

暁

「あ、柳子さん？ 暁だけちょっと頼みたい事が……」

そう言つて、暁は執事の柳子に事情を話し、天錠家がいつもお世話になっている

ある病院に総司の精密検査の予約をしてもらった。

暁は、柳子と携帯で話し終えると総司を見て、

暁

「話は済んだよ。燕、総司、一緒に来てもらえるかな？」

燕

「精密検査できるようになったの？」

暁

「ああ、ということで」

暁は、燕と総司の肩に手を置くと

暁

「『テレポート』!!」

そついつて、今までいた原っぱから一瞬にして病院の横の草むらに到着した。

燕

「え？ え？ 暁今何やったの？」

総司

「なんと面妖な！ 暁は妖術使いか？」

暁

「いや、あれは超能力さ。いわゆる瞬間移動」

燕

「え、そんな力あるの？」

暁はわかりやすく総司に銃刀法違反とかの法律を教えると

総司

「なるほど、今はもう侍というのはいないんだな……」

物凄く落ち込んだ感じでそう総司が呟いた。

暁

「とりあえず、総司、家に来るか？」

総司

「……そうだな、元の時代には帰れないし行く宛てもないしな。すまないが、お願いできるか？」

暁

「ああ、いいぜ！ 燕も家に来るか？」

燕

「うん……家まで帰るのにかなりかかるしね（汗）」

燕は苦笑いをしてそう言った。

暁

「じゃ、決まりだな」

こうして、暁達は、暁の家に帰ったのだが、

待っていたのは、鬼の形相をした百代・ワン子・涼香・来夏・亜巳達だった。

暁

「なっ……」

燕

「暁、この人達は？」

百代

「暁……その女達は誰だ？」

暁

「こっちは、松永 燕さんでそっちが沖田 総司」

燕

「暁の許嫁の松永 燕です、よろしくね」

ピシッ！

空間に亀裂が入ったような音がした。

暁

「っ、燕さん、何言ってるのかな」

暁は、ギギギッと音がしそうな感じで燕の方を向く。

燕

「燕さんって他人行儀な、いつもの燕でいいよ」

そういつて、暁の左腕に自分の手をからませ、体を暁にピタとひっつけた。

一子

「ふーーーーーん……随分、楽しそうだね」

暁

「ワン子……いや、一子さん？」

涼香

「暁様……これは一体どういう事ですか？」

来夏

「答えによつては……わかってますね、暁様」

亜巳

「どういつ事が聞かせてもらえない、ねえー暁」

涼香は、笑顔だが目が笑つてなく、

来夏は、手にナイフを構え、

亜巳は、モップを構えたまま蔑みの目で暁を見る。

暁

「み、みなさん落ち着いて……」

全員の嫉妬のオーラに押され、暁は後ろに1歩下がる。

百代

「とりあえず、お前が誰のものか、そろそろはつきりさせないとな」

来夏

「私はてつきり、またライバルが……ごほんごほん！ な、何でもありません」

亜巳

「すぐに説明してくればよかったのに」

亜巳がそついうと

暁

「説明しようとしたら君達が襲いかかってきたんじゃないか！」

百代

「済んだ事をぐちぐち言うな。男が下がるぞ」

暁

「はあ……、まあいいけど」

一子

「それにしても本物の沖田 総司なんだよね」

ワン子は、総司をじーと見てそつ言った。

百代

「それにしても、女だとわな、流石の私も驚いた」

総司

「それはいいが……なぜこの格好なんだ？」

そう、今総司が着ている格好は、隊服ではなく、白のタイトスカートに黒のシャツ

長い髪も白のリボンで束ねてポニーテールになっている。

それに眉とかも整えられてうっすらと化粧もしている。

最初にあった頃と全然違い、正に女の子って感じになっている。

総司

「スカートといったか。なんか慣れないんだが」

燕

「でも淒く可愛いよ、ねえー暁」

暁

「ああ、淒く可愛い」

暁が褒めると総司は照れて、

総司

「そ、そうか……／＼／＼／」

百代

「む……！」

一子

「む！」

涼香

「……………（怒）」

来夏

「……………」

カチャ……

来夏は無言でナイフを取り出す。

亜巳

「む……………」

暁

「あ、そくだ！　モモ、頼みがある」

百代

「頼み？」

百代は怪訝そうな顔で答える。

暁

「ああ、試合場を貸してほしいんだ」

百代

「ん？　試合場を？　誰かと仕合するのか？」

暁

「ああ、俺と燕がな」

燕

「そういえば、そうだったね」

百代

「ふーん、おもしろそうだな、わかった、ジジイにかけあってやる、そのあとで私とも勝負だ！」

それ聞いていた一人が、それに異を唱える。

総司

「すまないが、先に俺と仕合してくれないか、暁？」

総司である。

暁

「総司？」

燕

「いいよ！ 先に総司が暁と仕合しても」

燕

「いいのか？」

燕

「うん！ だってあの沖田 総司だよ！

剣の天才だよ、その仕合を見たと思うのは当然じゃない！」

百代

「私も構わないぞ！ 私も見たいしな、今現在世界最強のお前と天才、沖田 総司の仕合を」

こうして、暁と総司の仕合が決定し、

鉄心も二つ返事で了承し、観客は風間ファミリーの面々、川神院の師範代二人、

そして天錠従者部隊の面々といった感じで、今、暁と総司は、試合場の中央で

向かい合っていた。

鉄心

「武器は、齒を潰した物を使用し、勝敗は、相手が降参するか、気絶されるかという条件で良いかな？」

暁

「ああ！」

総司

「あい、わかった！」

暁と総司の武器は両者共に刀を選択、そして

鉄心

「それでは、東方！ 天錠 暁！」

暁

「おう！」

鉄心

「西方！ 沖田 総司！」

総司

「おう！」

鉄心

「それでは、はじめい！！」

神の代行者と幕末最強の剣士が時を越えて今、激突する！！！！

t o b e c o n t i n u e d

第10話 『暁VSやってきた天才!』（後書き）

百代「ということで、今日の後書きは私達が乗っ取った!」

一子「流石ね、お姉様!」

涼香「まったくあの駄作者さんには、ポンポンポンヒロイン候補しまり

してくれちゃってねー、ふふふふふふふふふふ!」

来夏「涼香、落ちついて。あの駄作者にはまだ利用価値がある」

亜巳「そうさね、あの駄作者に私と暁のハッピーエンドを……」

ゴスッ!

亜巳「痛っ、誰だい! 私の頭を殴った……のは……」

涼香「何いっちゃってるのこの子は……ふふふふふふふふ……」

亜巳「涼香さん、お、落ちついて、ね?」冗談ですから（汗9」

涼香「そうか、冗談なの……ふふふふふふふふ……」

百代「な……んだと……なんだこの圧倒的な殺気は……」

来夏「（暁様絡んだ涼香は怖いからな、だまっておこう）」

一子「と、とりあえず、次回の予告しないと（汗）」

涼香「うふふふ……次回、第11話『死闘・前編』でまた会い
ましょう」

全員「涼香さんだけは、敵に回さないでおう……」

第11話 『死闘・前編』（前書き）

という事で、今回から沖田戦のお送りします。
それではどうぞ

第11話 『死闘・前編』

鉄心

「それでは、はじめい！」

ヒュ！ ヒュ！ ヒュ！

鉄心の開始の合図を聞くや否や総司が、常人では目視不可な剣速で、

暁の額・両肩に鋭い突きを繰り出した。

暁

「チイ！」

カキン！ カキン！ カキン！

暁は、総司の突きを刀で受け流し、総司を横一閃に斬りつけるが、

総司は後方に飛び、それを避け、今度は、先ほどよりも遥かに速い

剣速で、唐竹・袈裟・小手・逆小手・逆袈裟の順に暁を斬りつけた。

暁

「ぐはあー!!」

暁が斬られた瞬間、斬られた部分の服が着れ、斬られた部分はかなり赤くなっている。

総司

「ふうん、やるな、暁」

総司がそういつと総司の着ている服の肩の部分が斬られてその隙間から

ブラジャーの紐が見えている。

暁

「さすがは、幕末最強の剣士の呼び声名高い沖田 総司だ。
一瞬、刀が見えなかったぜ……」

総司

「そついう、暁こそ、よくあの技を受けて反撃できたなあ」

総司は感心した表情をして言った。

暁

「ああ、俺は特別頑丈なもんでね、模造刀で斬られようが、
あんま効かないのさ」

総司

「……へえ、じゃ、これはどうかな？」

そう言つて、総司は、刀を両手で持ち、横に構えると、

総司

「……無双三段！」

総司がそう呟いた瞬間、暁が後方にふっ飛ばされ、東門の横の壁に
激突する。

ドゴオオン！

暁

「があ……げはあ！」

暁は口から大量の血を吐く。

鉄心

「な、なんじゃ今は……」

百代

「暁……！」

パラパラパラ……

壁にめり込んだ暁は、

暁

「い……今は……」

そういつて、自分の身体を確認すると両肩は、内出血を起こし、額からは血が流れている。

暁

「そう……いうことが……」

沖田は、先ほど繰り出した神速の5連撃よりも剣速の早い超神速と呼ばれる速度で

暁の額と両肩を模造刀の剣先で着いたのだ。

総司

「これが俺のとおっておきの一つ、『無双三段』だ」

総司が得意げにそう答えた。

暁

「なるほど……やっぱり強いな……フン!!」

暁がさういうと壁から出て、試合場にジャンプして戻った。

そして、暁の身体の傷がみるみる回復し、傷が無くなる。

総司

「なっ……」

それを見ていた百代驚いた表情で、

百代

「『瞬間回復』か!」

暁

「沖田 総司、お礼に俺もとおっておきの一つをお見せしよう……」

そついう瞬間、総司の後ろに暁が後ろ向きに立っている。

総司

「な……なんだ?」

そして、総司の着ていた服が一気に破け、総司が空中に投げだされる。

暁

「……瞬歩冥道」
しゅんぽめいどう

総司

「ぐはあああー!!」

総司の口から血が吐き出される。

鉄心

「またしても見えなかったじゃと……」

百代

「私は、かろうじて見えたぞ」

鉄心

「なんじゃと!? 暁は何をしたんじゃ?」

百代

「暁は、一瞬にして沖田との間合いを詰めて100回斬って通り過ぎたんだ」

鉄心

「まったく恐ろしいやつじゃわい」

百代

「ああ……やはり暁は強くなくてはな」

百代は、うつとりとした表情でそう言った。

暁

「総司、いつまで寝てる気だ？」

暁が総司にそういうと

総司

「……たしかに凄い技だね、俺の服がバラバラだ」

総司は、自分の姿を見て困った顔でそう言った。

そう、総司の今の姿は、着ていた服が無くなり、下着姿になっていた。

暁

「とりあえず、着替えてこい、その格好だと俺も他の皆も目のやり場に困る」

暁のその言葉に百代だけ「沖田がその格好でも別にいいぞー」と聞こえたが、無視した。

だって、俺も一人の男なわけで、

ただでさえスタイルがいい沖田の下着姿なんか見たときにゃあんた……このあとはお察しください。

総司

「じゃあ、お言葉に甘えて、悪いな！ ちょっと着替えてくる」

ということで、総司が着替える為、仕合は一時中断となった。

数分後――

着替え終わった総司が試合場にやってくると

暁を含めみんなの目が点になる。

暁

「総司……なんで、メイド服なんだ？」

総司

「これしか着替えがないと涼香殿が」

暁

「涼香さん……」

暁が呆れた顔で涼香の顔を見ると涼香は満足そうにニコニコしている。

涼香

「うふふ、似合いますでしょう、総司さん」

暁

「あ、ああ……とりあえず、仕合再開するか」

総司

「ああ！」

紺と白を基調にしたメイド服を着た総司を見て、やはり可愛いなと

思ったが、

すぐに顔を引き締め、暁は戦闘態勢に入った。

そして、第2Rが始まり、両者は自分の刀を構えた。

周りの観客も息を吞んで、その仕合を見守る。

鉄心

「それでは、試合再開じゃ！ はじめい！！」

暁

「はああああ！！！！」

総司

「はああああ！！！！」

鉄心の試合の掛け声と同時に、両者は激突した。

o n t i n u e d

t o b e c

第11話 『死闘・前編』（後書き）

作者「ということで、暁と総司の仕合がはじまりました」

大和「……というか俺達今回見てるだけで一言もしゃべってないんだが……」

作者「まあ、それは次回だね」

大和「それならいいが……」

作者「それにしても大和、小雪と辰子とはどうなってるんだ？」

大和「い、いやそのあの……」

作者「おお、動揺しとる動揺しとる」

大和「俺の反応で遊ぶな」

作者「だって、暁居らんし、いじれるやつ他にいないんだもの」

大和「そんなんではいじられるのは迷惑だ」

作者「まあ、それは置いていて「置いとくなよ！」次回予告よろしく」

大和「……チイ、仕方ないな。次回、第12話 『死闘・中編』をお楽しみ」

第12話 『死闘・中編』（前書き）

初の三話連続続き物の二話目です。それではどうぞ！

第12話 『死闘・中編』

暁

「はああああ！！！！！」

総司

「はああああ！！！！！」

シャキン！ シャキン！

暁と総司の刀と刀ぶつかり合う！

- audience side -

燕

「凄いね……二人共」

大和

「すげえ……」

岳人

「ああ……スゲエ……」

三人は呆然と暁と総司の仕合と見てそう呟いた。

翔一

「すっげえ〜な！ 暁、前よりも強くなったじゃねーか」

卓也

「うんうん、凄いよね」

冬馬

「それにしても暁は、本当に女性と縁があるようですね」

準

「たしかに……それにしても今度は沖田 総司とは……
一体どうすればいいいあそこまで女性を惹きつけるんだか」

忠勝

「にしても、暁はあの強さで本当に同じ歳かと疑いたくなるぜ」

天使

「でもよー。あの沖田とかいう奴も暁並スゲーぞ」

竜兵

「ああ、あの暁と真っ向からやって負けてないんだからな
大したもんだぜ！」

小雪

「アキ兄、がんばれ」

辰子

「zzzz……暁がんばれ」

一子

「辰子、寝ながら応援してるわ（汗）」

京

「私が静岡に行ってる間にまた他の女の子拾ってくるとは……あとで

O H A N A S H Iしないかねー、うふふふふ」

京は、どす黒いオーラを纏って目を光らせてそう言った。

それを見て、百代以外は苦笑するしかなかったという。

涼香

「にしても、暁様、本気になってないわね」

来夏

「ああ、そういえばそうだな」

亜巳

「え？ あれが本気じゃないのかい来夏さん！？」

来夏

「一応真剣で戦ってはいるが本気ではないな、その証拠に髪の色と眼の色が変化してない」

亜巳

「変化？」

涼香

「ええ、暁様が本気になると黒髪黒眼から金髪赤眼になるから」

亜巳は、それを聞き、繰り広げられている仕合再度見始めた。

一方師範代サイドでは……

釈迦堂

「けっ、あの野郎。腕上げやがって！」

ルー

「あの子の成長は異常ネ。あれが代行者の力なのかネー」

釈迦堂

「それもあるだろうが、あいつの修行の賜物だ。大半を修行に当ててたからなあいつ」

そういうと釈迦堂は少し嬉しそうな顔をする。

ルー

「嬉しそつだネ、釈迦堂」

釈迦堂

「おう！ アイツは俺のライバルだからな、次に手合わせするのが楽しみだ」

ルーは、釈迦堂のその言葉を聞き、嬉しそつだった。

ルー

「私も今以上に精進するヨー」

釈迦堂

「ああ……お前が強くなんねえと練習相手いなくなるからよー」

そんな事を言ってるが、最近ルーも釈迦堂並みに強くなってきたおり、

ライバルが増えて戦いに餓える事がなくなった釈迦堂の顔はどこか

清々しかった。

- audience side out -

試合場では、暁と総司の激戦がまだ続いていた。

総司

「楽しいけど、そろそろ終わりにしようか、暁」

戦いの最中にそう言い出した総司から物凄い殺気が出てくる。

暁

「じゃ、俺も本気になるか」

そういつて、両者は、後方に瞬時に下がり、一定の距離を取った。

暁

「とりあえず、Seal release《封印解放》!!」

その言い放った瞬間、暁の髪と眼が変化する。

髪は黒から金色へ眼の色は、黒から赤へと変わる。

総司

「はあああああ!!」

総司が全身と刀に覇気を纏わせる。

暁

「へえー、総司も覇気を使えたのか」

総司を見た暁は感心したようにそう言った。

総司

「暁こそ、いきなり髪と眼の色が変わったじゃないか。それが真の姿かい？」

暁

「いや、これは、神との契約の証さ。そうだな、この状態は【代行者形態《agent mode》】というべきか」

総司

「代行者形態《agent mode》か。なんとなく理解したよ。今まで不透明だった暁の全力の強さを感じる」

そう言うと刀を構える。

暁

「ああ、この状態になった以上、一つ言っておくことがある」

総司

「なんだい？」

暁

『死ぬなよ……』

総司

「なっ……」

暁がそれを云うや否や暁の気配が消え、目の前から忽然と消えた……。

次の瞬間、総司の刀に重い衝撃が来る。

ガキイイイイン……！！

総司

「ぐっ……！！」

暁

「ほおー、これを防ぐか……なら！」

暁の姿がすぐ目の前に現れると暁から見えない斬撃が連続して放たれる。

総司は、それを辛うじて刀で防ぐが、

暁

「はあ！」

バキッ！

暁が会心の一撃を放つと総司の刀が折れた。

総司

「何!？」

そう、暁はずっと総司の刀を破壊するべく、ずっと刀の刃の同じ箇所

連続して攻撃していたのだ。

暁

「刀は折れたがどうする総司？」

暁はそう言って、刀を総司の喉の当たりに突き立ててた。

総司

「くっ……」

総司が口惜しそうにしていると総司の頭の中で声がする。

?????

「（力が欲しいか?）」

総司

「（ほしい! ……このままでは引くに引けない!）」

?????

「（ならば、力を与えよう!! 受け取れ!!）」

その声がそう言った瞬間、総司の身体に異変が起こる。

「蛇退治ならこれだ！」

ガキン！

スネークロードの刀を天羽々斬で受け止める。

スネークロードの身体から複数の蛇が出てきて、

暁に噛み付き、毒を暁に流し込むが、暁には状態変化系は効かないので、

暁

「そんなもの効かない！」

暁は、噛み付いている蛇たちの頭を斬つてた。

ブシャアアアアアアアア！！！！

斬られた蛇の頭から黒いモヤが出てくる。

暁

「（あれは！）」

その黒いモヤの隙間から総司の顔が見える。

暁

「総司イイイイ！！！！！！」

暁は、スネークロードとなっている総司に叫び、近づいていくと

ズシャア！！！！

一子

「きゃああああ！！！！！！！！」

暁の体に何者かの腕が貫通する。

釈迦堂

「アイツは……！！」

百代

「なっ！ 暁！！！」

暁

「ゴフッ！ これは一体…… なっ……お前は！」

暁がゆっくり後ろを向くとそこには、見知ったある男が立っていた。

マンモン

「よう……久しぶりだな、元気だったか？」

暁

「マンモンㇿグリード！」

マンモン

「ここまで計画が上手くいくとはなあ……」

ズシャア！！！！

マンモンは、暁の体から腕を抜くと邪悪な笑みを浮かべ、

暁の血のついた手を舐めた。

マンモン

「お前の血はうまいな、さすが神の代行者だけの事はあるか？ハッハッハ！」

暁

「計…画…だ…と」

マンモン

「ああ、お前が隙ができるのを待っていたのさ。
こいつの影に潜んでな」

暁

「何！？　という事は総司を生き返らせてこの時代に連れてきたのは！」

マンモン

「ああ、俺さ！　なかなかいい趣向だろ？　ハッハッハ！」

暁

「悪…趣…味…な奴…だ」

マンモン

「お褒めに預かり恐悦至極ってか？」

暁

「褒めてねえよ……」

マンモン

「そうそう、お前の『瞬間回復』使用不可能にしてるから
傷の回復は無理だぜ？」

暁

「なん……だと……」

暁が苦しそうにマンモンを睨みながらそう言つと

マンモン

「とりあえず、死んでくれや………殺れ」

マンモンから支持を受けたスネークロードは、刀を振り落とした。

百代

「暁アアアアアアア！！！！！！」

百代の叫びが会場に響き渡った。

t o b e c o n t i n u e d ……

第12話 『死闘・中編』（後書き）

作者「暁ピンチ！！　そしてマンモン再び登場！！」

燕「あわわ、暁大丈夫なんだろうね？」

作者「それは次回のお楽しみ」

燕「ああ、心配だわ」

作者「おやおや、やはり許嫁の事が心配かい？」

燕「そ、それは／＼／＼／」

作者「まあ、良き哉良き哉。とりあえず、他にも暁を好きな子いるから

がんばれよ」

燕「うん、がんばる……………って違うから！！」

作者「ということで、次回でこの戦いに決着が付きます。

暁の運命や以下に。次回 第13話 『死闘・後編』でまたお会いしましょう！」

燕「暁が無事でありますように……………」

第13話 『死闘・後編』（前書き）

マンモンの策により負傷した暁。それを追い討ちするようにつに迫るスネークロードの

凶刃。暁の運命や如何に！？ ということで続きをどうぞ！

第13話 『死闘・後編』

暁に迫るスネークロードの凶刃。

百代

「暁アアアアアアア！！」

鉄心

「『川神流・無双白刃取り！』」

暁に振り下ろされる寸前に鉄心が、スネークロードの刀の刃を両手で挟み取った。

マンモン

「じじい！ 邪魔だ！」

マンモンが鉄心を殴ろうとしたが、暁が行く手を挟む。

マンモン

「貴様！ 動けないはずじゃ！」

しかも驚いた事にあれ程重症だった暁の傷がすっかり無くなっていた。

暁

「鉄爺のおかげで、少し時間ができたからね。その間に魔法で傷を直したのさ」

マンモン

「チィ！ 貴様、魔法も使えるのか！」

暁

「ああ、こんなこともできるぞ！ 解放・固定！！！！ 『千の雷』
！！！！」

暁の手から聖なる光球が現れ、それを暁は握りつぶした。

暁

「掌握！！」

マンモン

「なんだそれは！！」

暁

「術式兵装『雷天大壮』！！！！」

その瞬間、暁が雷化する。

めしっ…

マンモン

「な…」

マンモンの顔に暁の拳が突き刺さり、吹っ飛ばれ、壁をぶち破りマンモンが吹っ飛ばされる。

ガラガラガラ…

マンモン

マンモン

「ぐぎやああああ！！！！」

暁

「『千磐破雷』！！！！」
チハヤブルイカズチ

ガカアアアンッ！！！

千の雷が千本の刀に当たり、マンモンが塵と化した。

マンモンを倒した暁はスネークロードの方を向いた。

暁

「総司、今助けてやる」

そう言うとき暁は一気にスネークロードとの間を詰めて、

暁

「救済の掌！！！！」
サーパーション・ハンド

スネークロードの腹に暁は掌を当て、

スネークロードと総司を分離させた。

それを確認して、

暁

「消滅の拳！！！！」
エクステンクシオン・ナックル

スネークロードを思い切り殴り、スネークロードは消えていった。

暁

「ふう……」

暁がため息を着いた瞬間、倒したはずのマンモンの声が周囲から聞こえてきた。

マンモンの声

「『いやはや、ここまで強いとはねえ』 こっちもそれそうをの準備をしないと

やはり無理か。とりあえず、今回はこっちの負けでいいわ、その代わり、次はこうはいかねえぞ、首を洗って待ってな、ハッハッハ！！！！」

そう言つて、マンモンの声と気配が消えた。

百代

「暁、大丈夫か」

百代たちが暁の元へ近づいてくる。

こうして、アクシデントもあったが、暁と総司の試合は終わったのだった。

仕合が終わった直後、暁はその場に倒れた。

重症の傷を回復する為、魔力と気力が無尽蔵とはいえ、かなり消耗し、

そのせいで倒れたのだ。

暁が目覚めたのはそれから3日後だった。

目を覚ました場所は、自室のベットでだった。

そうそう、総司だが命に別状なかったが、体力を消耗しているらしく、

今は別室で眠っているらしい。

それにしても、今回本当にヤバかった。

暁は改めて敵の強大さを感じるのだった。

c o n t i n u e d

t
o
b
e

暁「明らかに考えてるだろ!!」

作者「ハッハッハ!! 何をいつてるんだちみは。おっと、もう予告の時間だぜ」

暁「チイ、後で問い詰めてやる。次回、第14話 『武道四天王
たちはな たかえ
橘 天衣』

でまた会おうぜ!」

作者「さてと……さらば!」

暁「あ、こら逃げんな!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214y/>

A.O.G -Agent Of God- ~ 真剣で代行者に恋しなさい! ~

2011年12月21日22時30分発行